引巣子画帖

始

395-155

井上炳司著

引菓子畫帖

大日本製菓講習會發行

大正
10 8 1
交内

著者　井上炳司

大日本農業會藏書

大五
8 18
19

序文

彼の歐洲大戰以來、應用的技術工藝に關する著書、頻々として刊行せられ、我が國民を裨益せし事、擧て數ふ可からず。然るに、翻て我菓業界を觀るに、製菓に關する著書の如き、實に寥々として晨星も啻ならず、是豈、我が菓業界の爲め、將たまた一般斯業徒弟諸君の爲め、浩嘆に堪ふ可けんや。玆に於てか、斯界全般の爲めに、其敎科書とも云ふ可き、製菓法一千題を著して、江湖に空前の歡迎を受けたる、本會講師井上炳司氏、更に今回、引菓子畫帖と名くる

（2）一書を編述して、一層斯界を益する所あらんとす。本書納むるところの、二百折の引菓子圖は、各其趣を異にし、各圖に對して、一々懇切に其製法を解説す、是れ實に斯界の至寶として、本會の、普く江湖菓業家諸彦に、是非一本を座右に備へられんことを切望して止まざる所以なり。

大正十年七月

大日本製菓講習會

序文

我が全國を通じて、菓子製造業者として成功し、巨萬の富を爲せる者、其數枚擧に遑あらず。雖然、將來製菓業者となり、或は當に製造に從事しつゝありと强も、未だ精巧の域に達せざる、斯業徒弟諸君の爲めに、或は懇切なる指南車となり、或は有益なる補導者となり、其後進に對する老婆心を傾倒して、以て利他的方面に甚深の貢献を爲せること、

（1）我が井上炳司氏の如きは、余りに利巳的なる現代に於て、誠に稀なりと云ふ可し。

（2）氏は既に、井上式製菓法一千題を著して、江湖に非常の歡迎を受け、今當に、引菓子畫帖を編著せられ、更に益々斯界に裨益するところあらんとす。氏の勞や誠に多とす可きなり。本書の發刊に際し、聊か氏の功績を錄して、以て之が序に代ふと爾か云ふ。

大正十年七月

東京菓子研究會

自序

拙著、井上式製菓法一千題を、初て世に公にするや、幸にして、江湖諸彦の多大なる賛助を蒙むり、深く其眞價を認識せらるゝに至り、著者の光榮之に過ぎず、更にます〳〵製菓界の爲めに、いさゝか貢献するところあらんとし、奮勵努力、約一ケ年の日子を費し、玆に本書を編述す

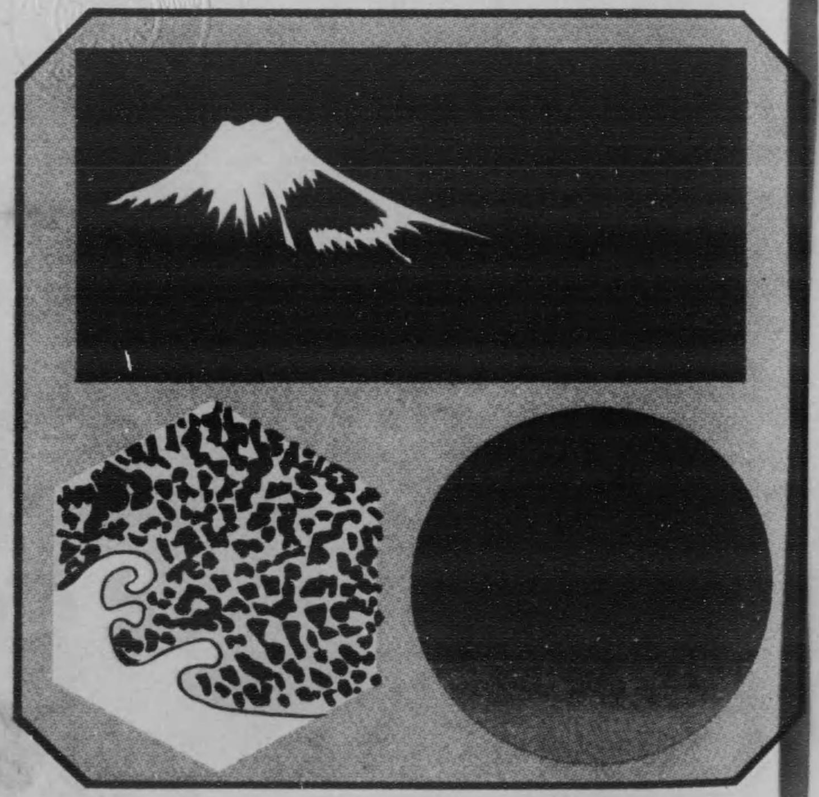
（1）本書は、著者が多年研究の結果たる、實地製作品二百種を各種多樣の變化に富める、引菓子の製法は、從來一種の美術的製菓技術として、製菓業者の常に苦心するところなり。

載錄圖解し、以て後進諸君の爲に、具體的研究に便せん微志を以て、玆に本書を著す所以なり。幸ひ菓業者諸君の座右の友として、其研究に資するところあらば、著者の本懷是れに過ぎず。聊か卷首に一言を題して、以て序となす。

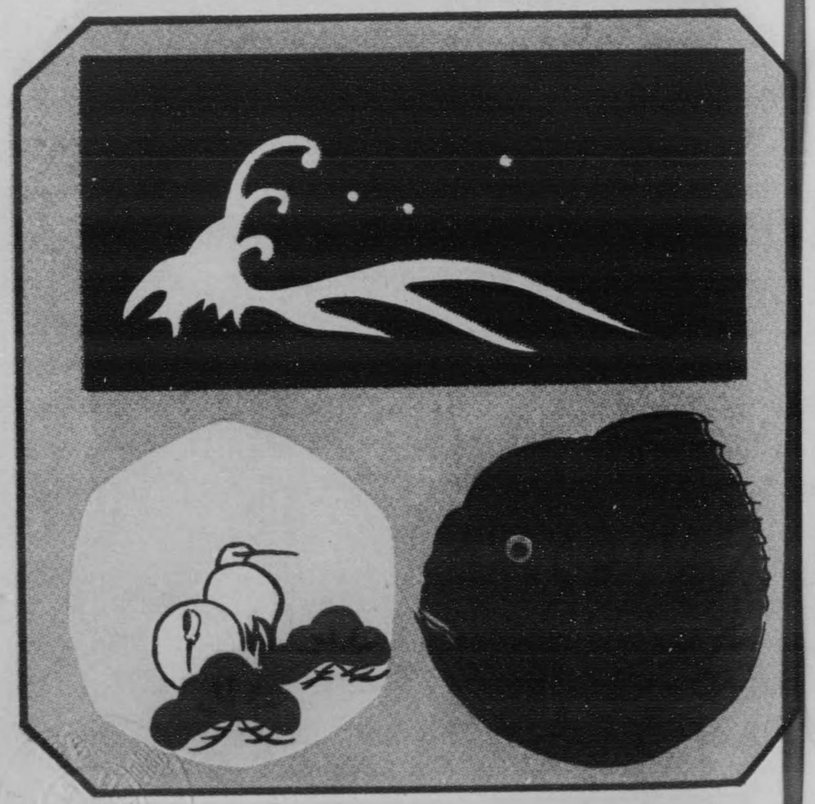
大正十年七月

井上炳司識

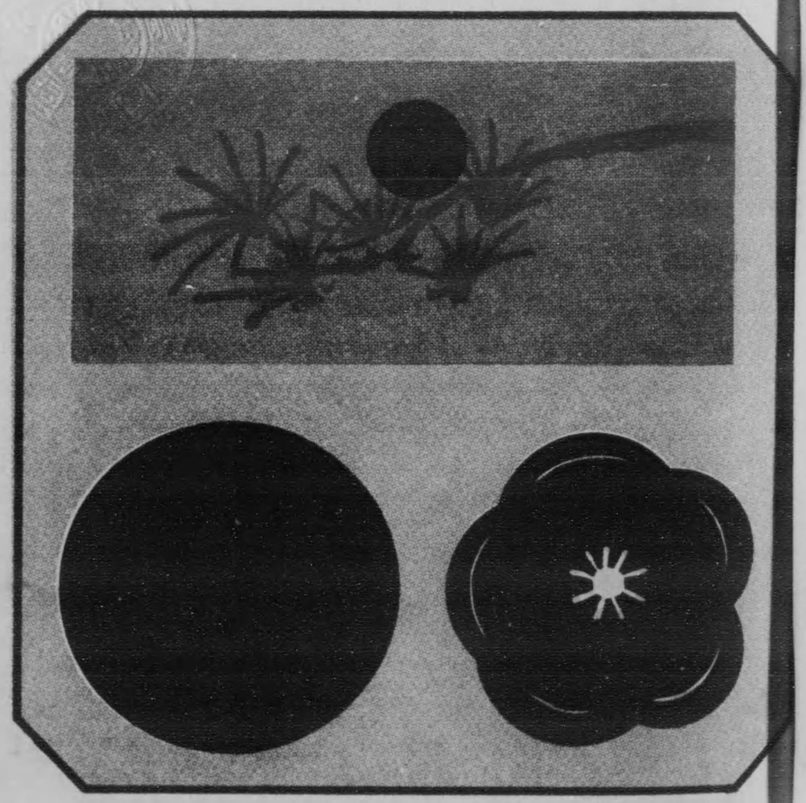
祝事用



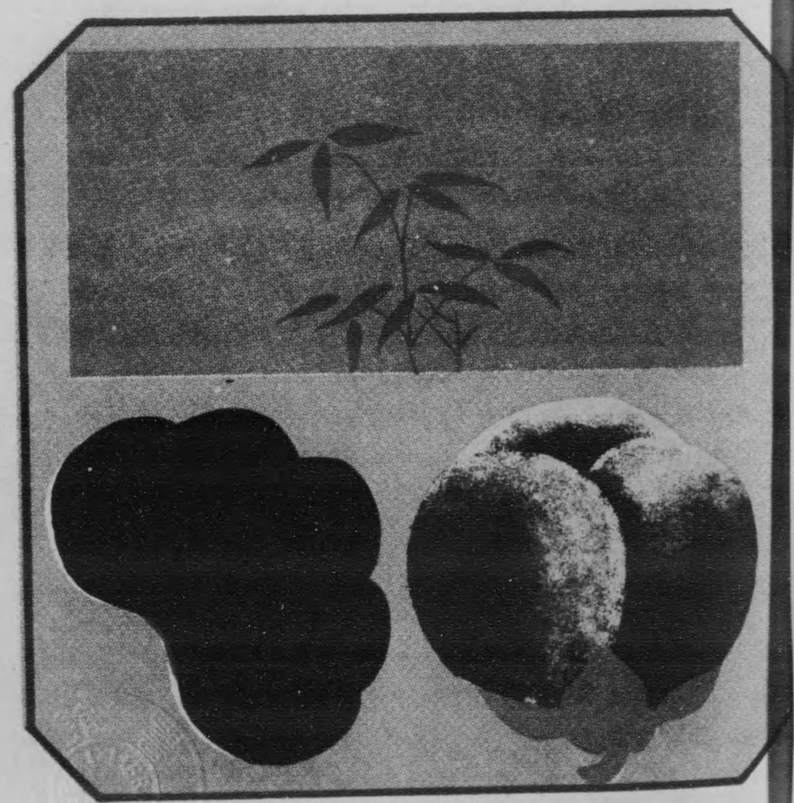
祝　事　用



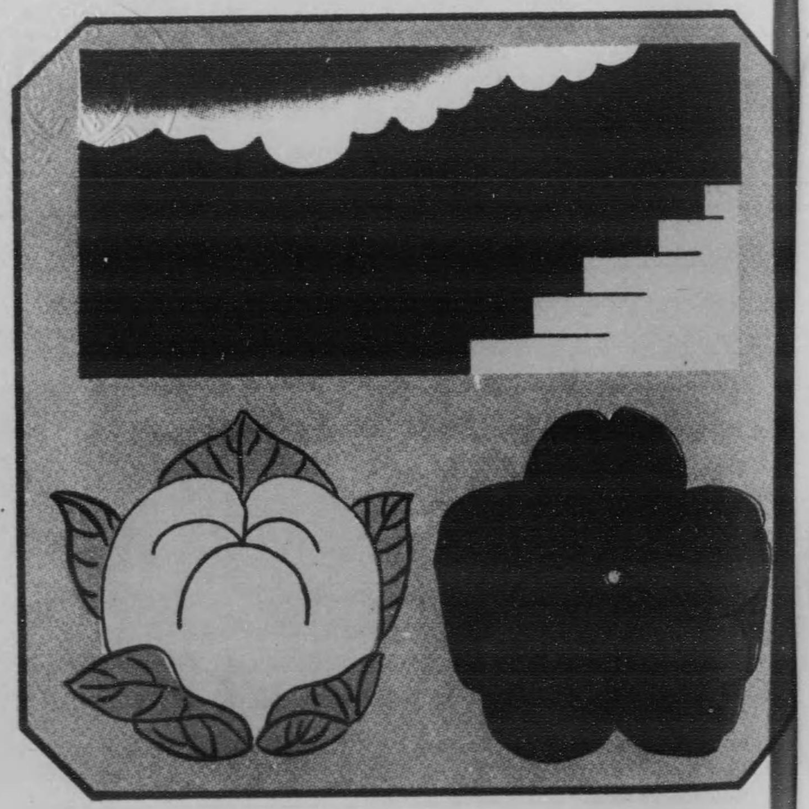
梅　竹　松



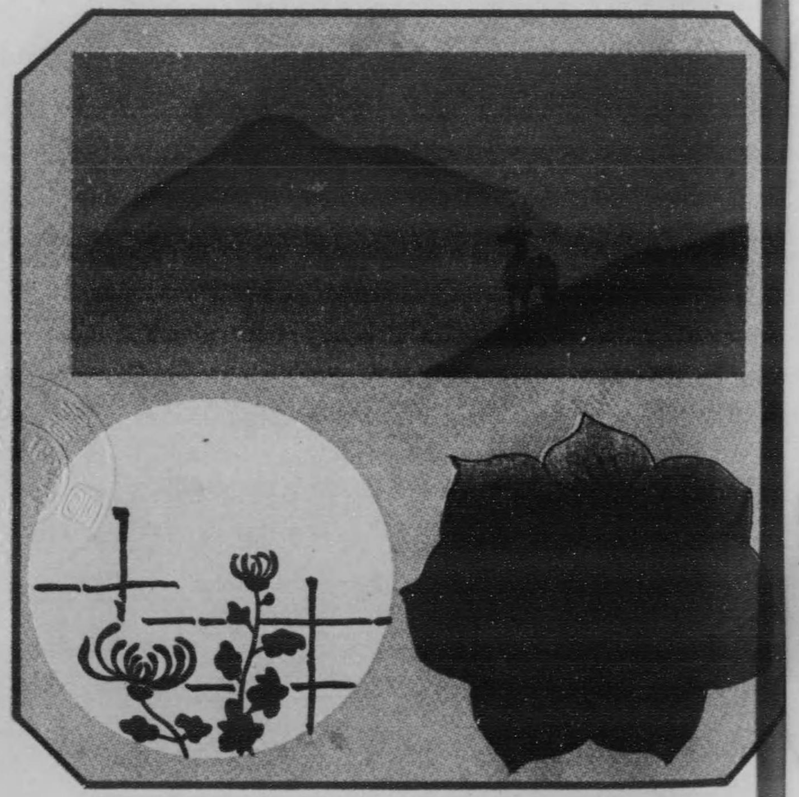
松　竹　梅



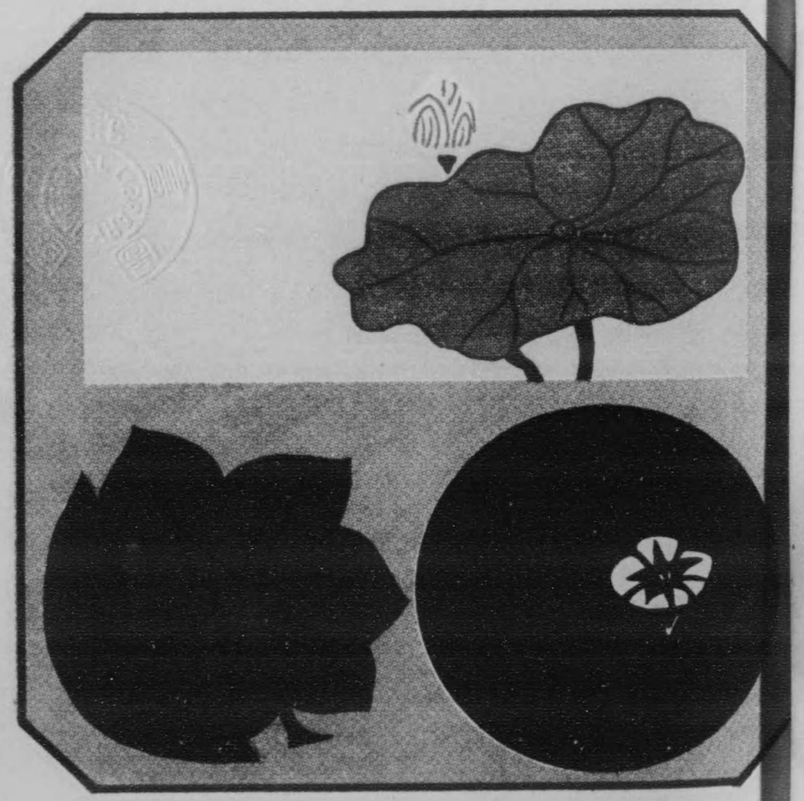
雛祭用



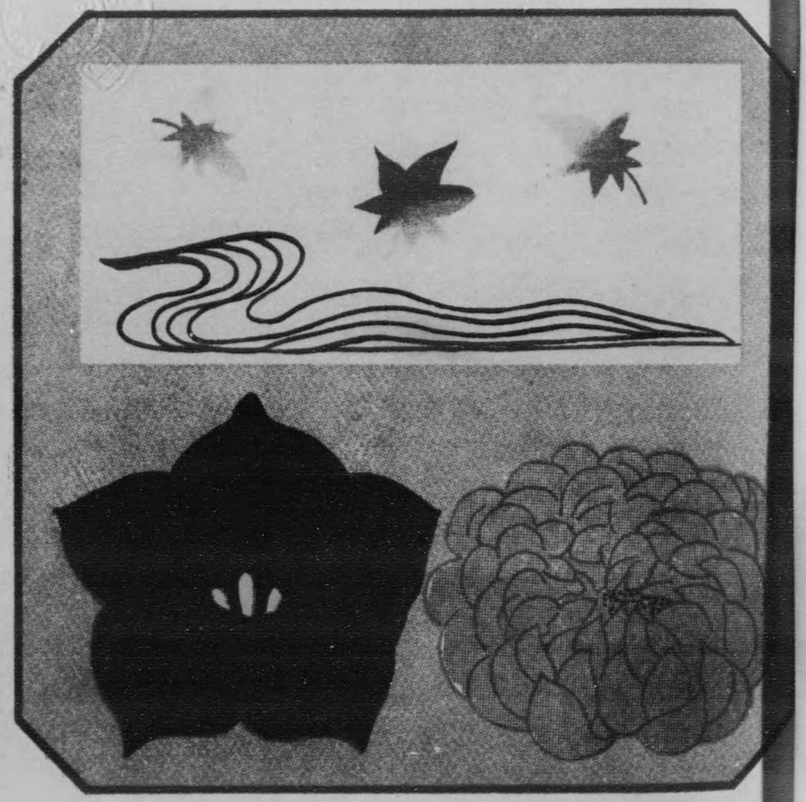
季節用



季節用



佛事用



梅　竹　松

向附

日の出に松は岡時雨にして臺を小豆餡にして模樣を白餡にて木形を利用して作るなり。

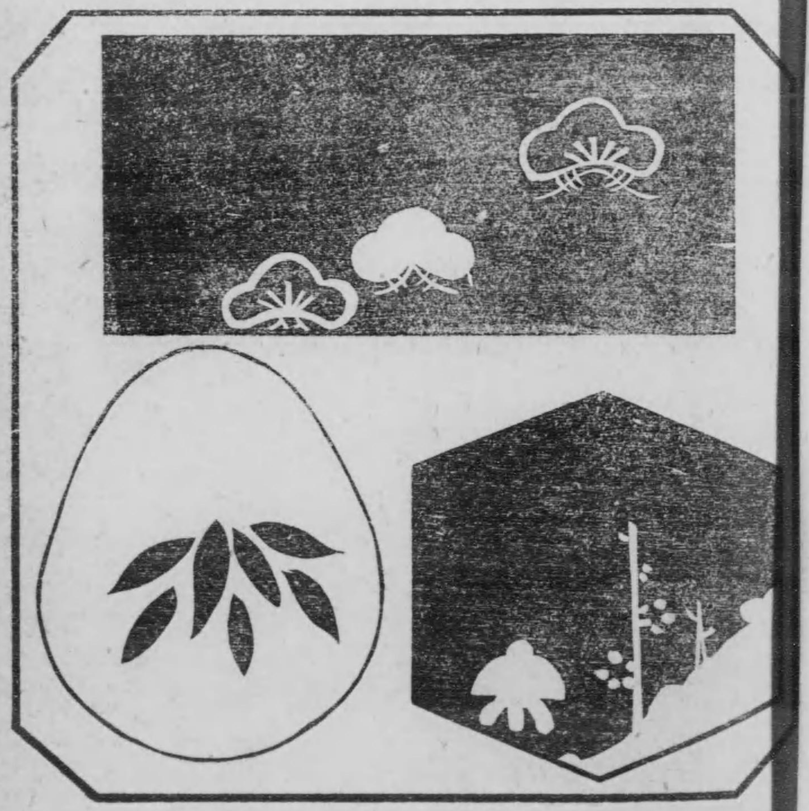
右盛

竹は白の牛皮にて包み圖の如き形を作りて模樣は燒き火箸にて付けたるものなり。

左附

梅は薄紅の煉切にて丸の輪形に作り表面の所に棒切れを利用して枝を押して作り後細き箸にて穴を明けて花及びツボミの形を押し付ける事。

松竹梅鶴龜



向付

松は小豆羹にて絞り出しを利用して舟の中に三重松の裏表を書きて冷えたる時を以て薄紅羊羹を全部流したるなり。

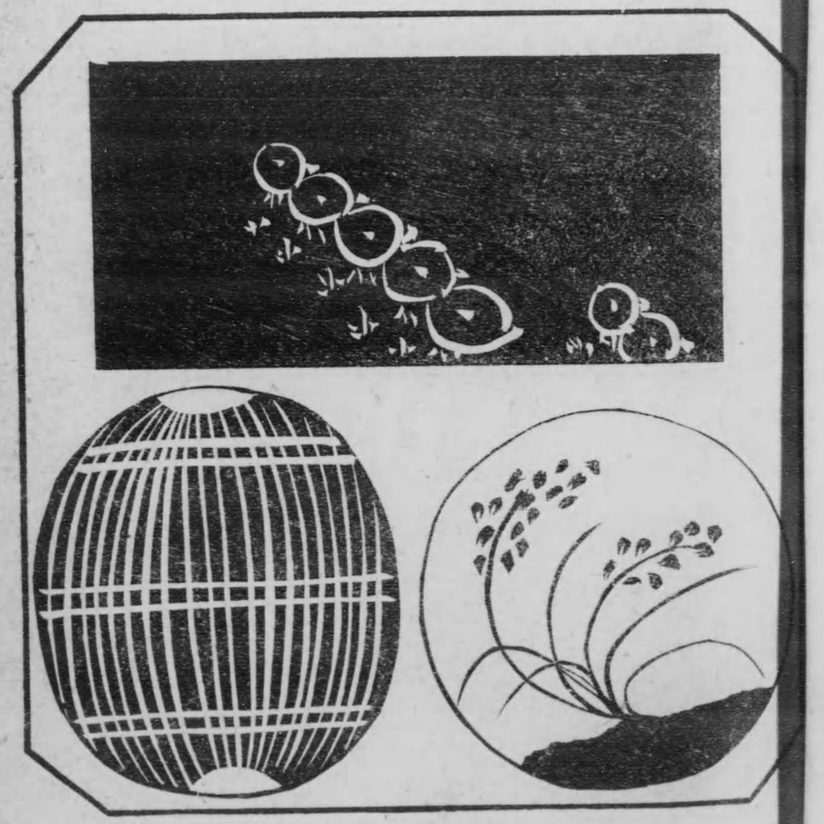
右付

龜甲に梅は青の煉切に白を附けてボカシとなして棒にて押して花及び枝を作り石燈籠は白餡にて指先にて刷り込みたるなり。

左盛

鶴之子に笹は白牛肥にて形を作りて笹は焼き火箸にて焼き附けたるなり。

豐年祝



向附

田植は小豆羹を絞り出しにて羊羹舟の中に圖の如き畫を書きて薄紅羊羹を全部流したる事なり。

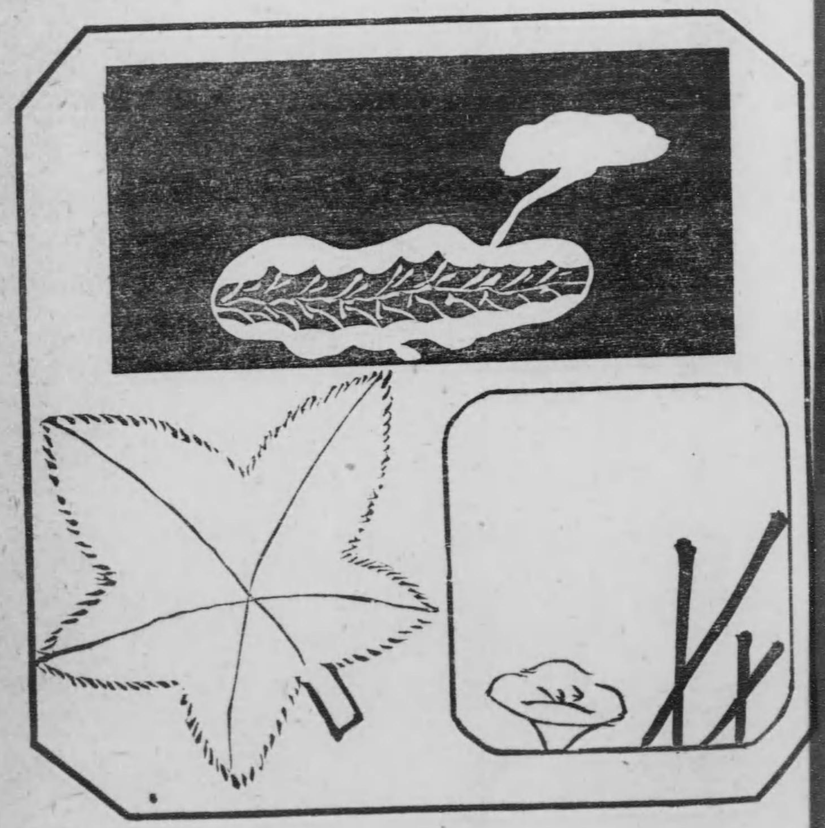
右盛

稻穗は白の牛肥の丸形の上に形紙を置きて稻は青にて穗は黄色にて畑は薄墨にて刷り込みたる事。

左附

米俵は黄色の煉切を俵形に丸めてヘラにて圖の如く筋を附けたる物たるべし。

佛事用



向附

蓮は初めバラヒン紙の上に紙形を置きて小豆羹にて刷り込みて冷えたる時羊羹舟に張り附けて後ち挽茶羊羹を全部流したるなり。

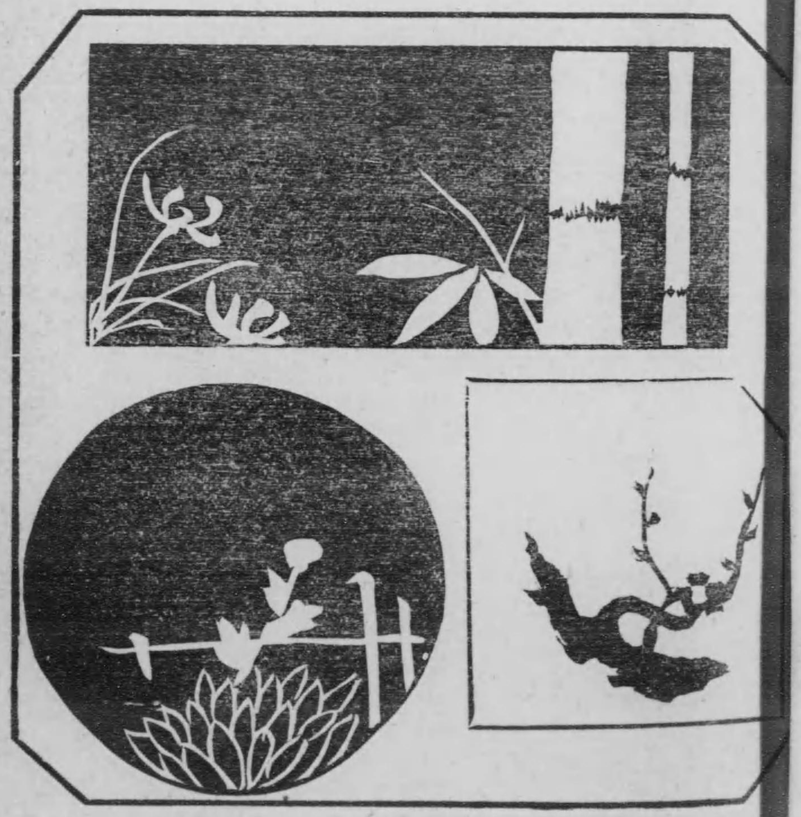
右附

朝顔は白の煉切を洞形に作りてヘラにて棚を押して朝顔を紅餡を以て指先にて思ふ所に刷り込みたる事。

左附

紅葉は薄紅の煉切にて三角定木を利用して形を作りて後ちヘラにてフチのキザを附けるべし。

四君子



向附

竹にランは挽茶色臺の岡時雨にて模様を白にて出したるなれば木形を利用して初め竹及びランを拔きて其の上より少々づゝ挽茶時雨を入れて押して後輕く全部を入れ押なり。

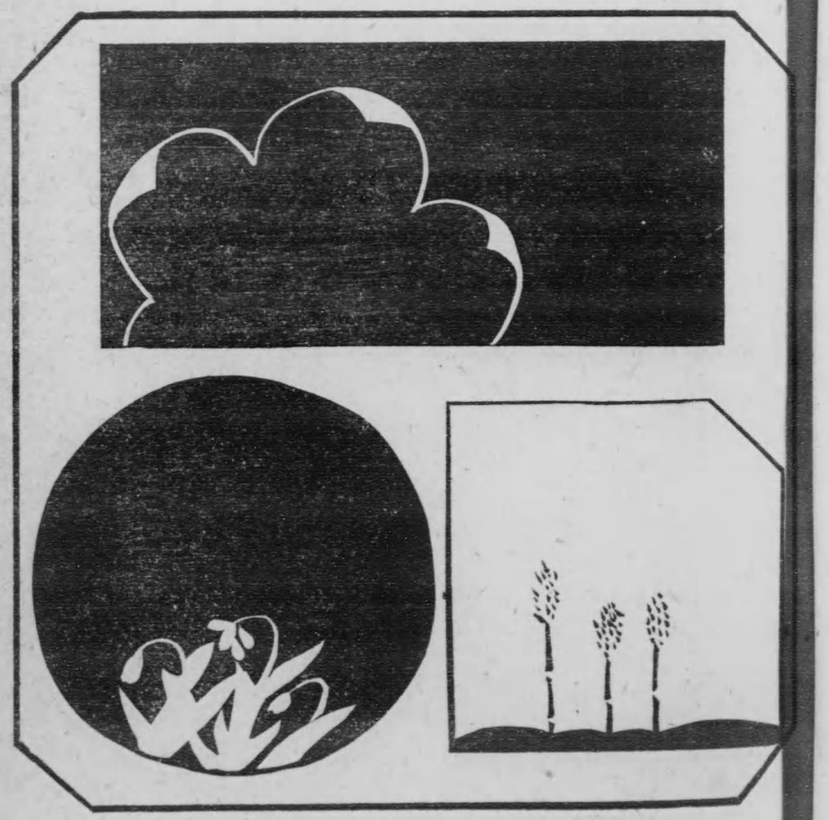
右盛

梅は白臺の煉切に一寸赤を出して形を角切りに作り枝及び花は棒切れを利用して押して模様を出したるなり。

左盛

菊は紅の煉切にて輪形にして白を一寸菊の所に張りて模様は花棒をケヅリて押し垣根はヘラにて押し付たる事。

春の野



向附

櫻は挽茶羊羹を一分程流して其の中に櫻の花を薄紅煉切を伸して武力形にて拔き取りし物を入れて後ち全部流したる物なり。

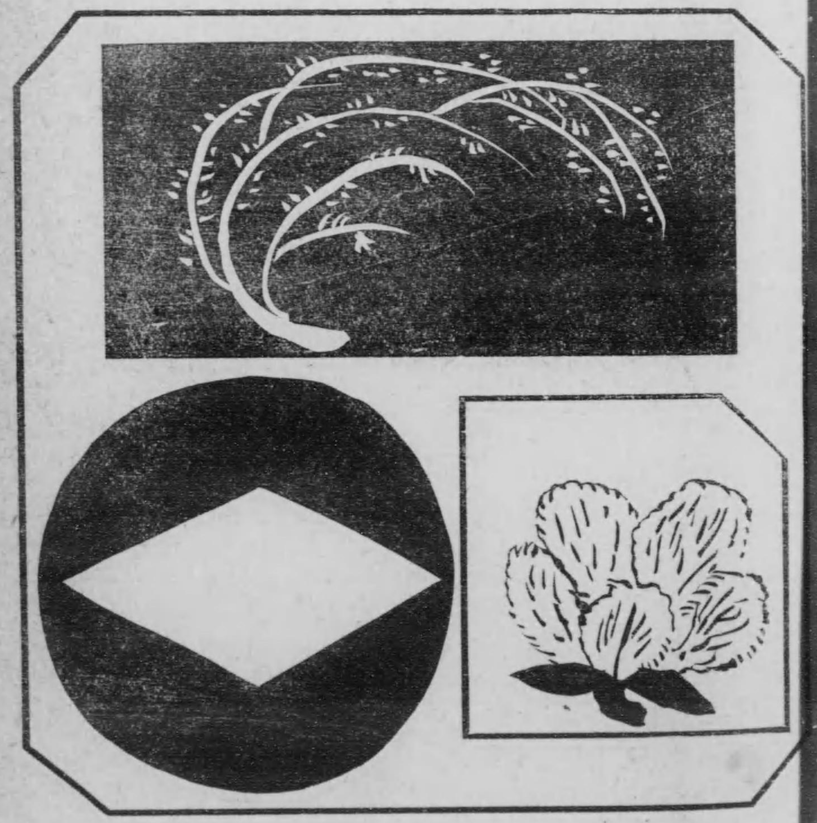
右附

ツクシは白の煉切を角切の形に作りて模樣は棒を以て押して附けるべし先の方は箸の先きにて附けたる事。

左盛

スミレは紅の牛肥の丸形の上部にスミレの形紙を利用して上より二ツケ粉にてボカシたる物なり。

三月節句用



向附

柳は小豆羹にて絞り出しにて柳を舟に書きて冷えたる時を以て挽茶羹を作りて全部流したる物なり。

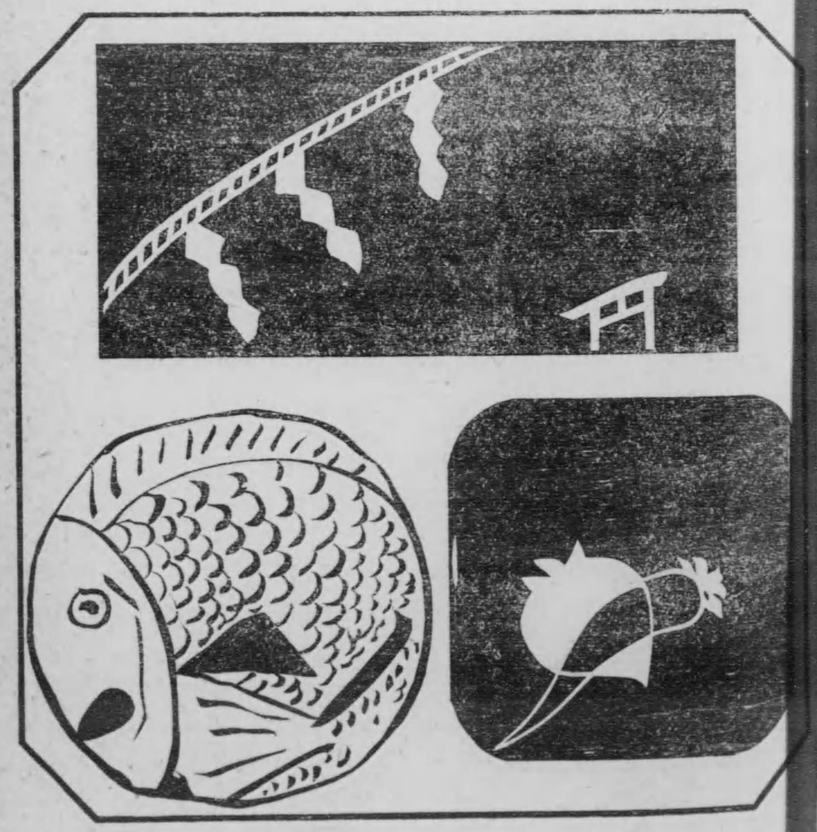
右盛

桃花は角切形の框にて白臺の岡時雨にて花を紅にして葉及び枝を挽茶にして押して抜きたる物なり。

左盛

菱は白の薯蕷羹を菱形に飽丁して紅の煉切にて丸く卷きて簾にて卷きて後ち小口より落して切口を上部となしたる物なり。

神事用



向附

シメ繩及び鳥居は白の煉切にて作り舟の中に菫味羹を一分程流せし中に入れて冷えたる時を以て全部流したる物なり。

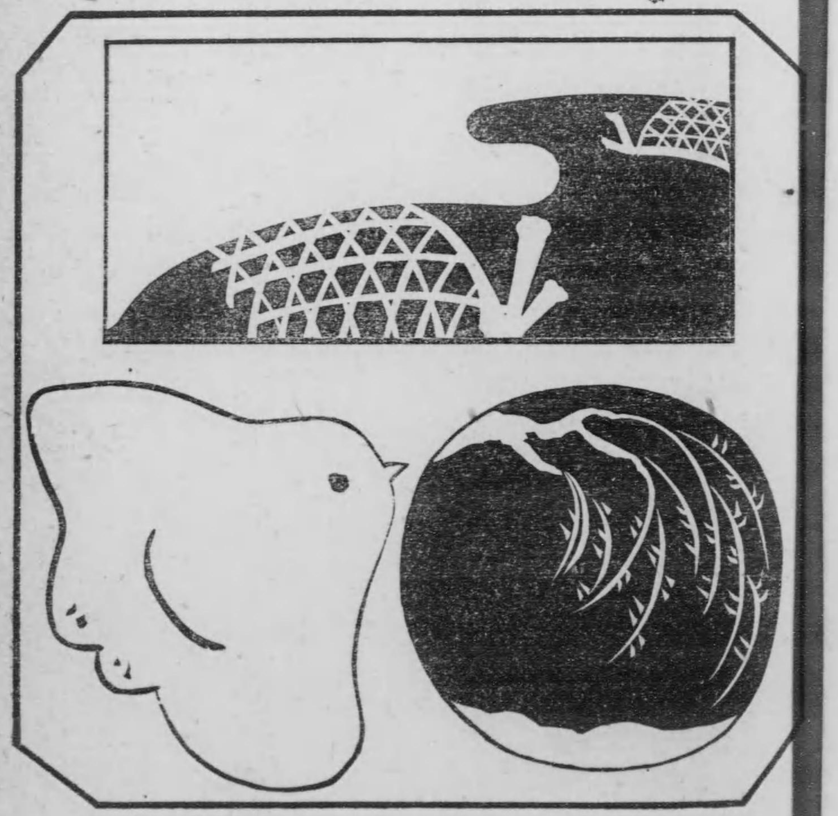
右附

赤蕪及び大根は青の洞形煉切の上に大根白餡にて蕪を赤餡にて交互に指先きにて刷り押して後葉を挽茶餡にて刷り込みたる事。

左附

鯛は薄紅煉切を丸形に作りて圖の如く初め頭より尾をヘラにて附けて後ちコケラをヘラにてタガイチガイに筋を附けたるなり。

春の流



向附

水は白及び小豆の岡時雨にて木形にて判面の黑き方に白にてジャリ籠を作りし模樣を拔きて後ち全部堅く押したる物なり。

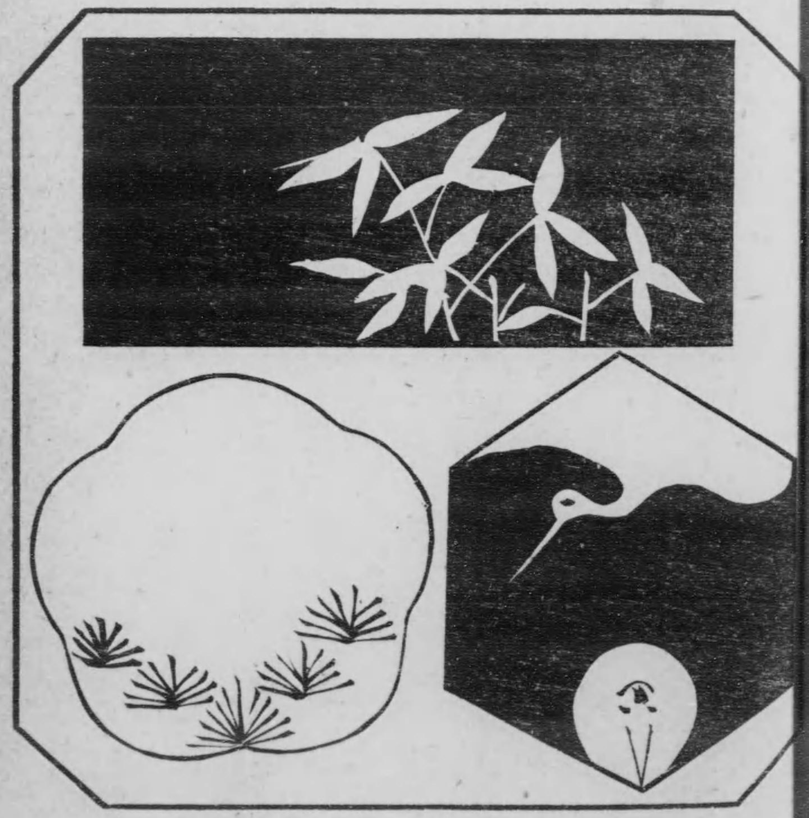
右盛

柳は挽茶煉切を丸形に作りて枝を棒及びヘラにて附けて葉の芽を箸の先にて突き明けたる事。

左附

千鳥は白の煉切にて圖の如く手形にて形ちを作りて足の所をヘラにて押し目玉を燒き火箸にて附けるなり。

祝事用



向附

笹は小豆羹にて絞り出しにて書きて其の上に白の薯蕷羹を流したるなり又は笹はバラヒン紙に型紙にて刷り込みて後流すも善し。

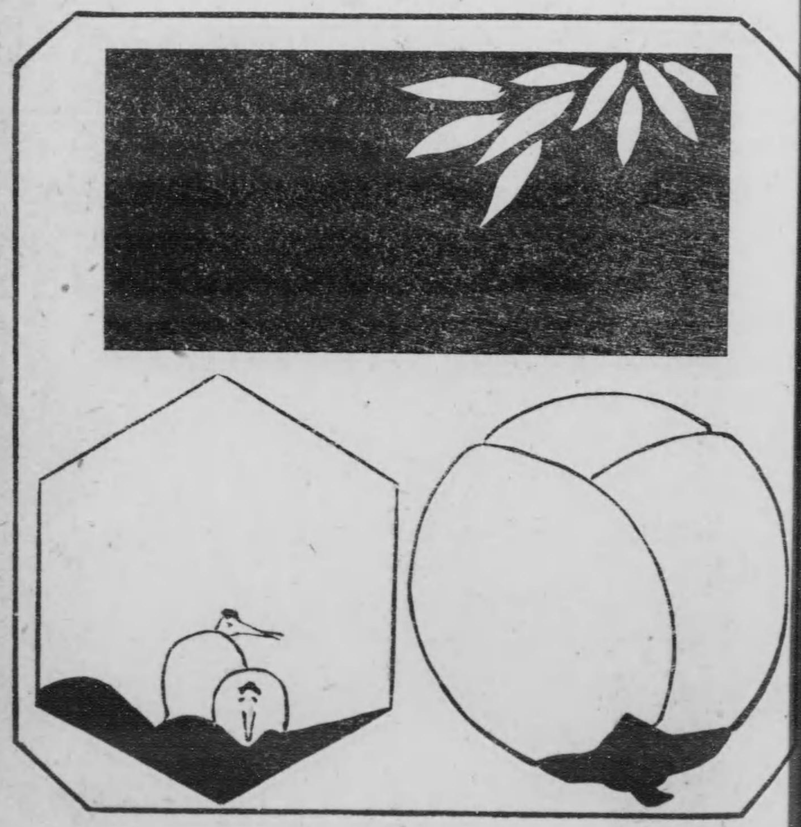
右盛

龜甲に鶴は挽茶煉切にて甲龜形を取りて鶴の所は白餡を張り附けて指にて押して下の鶴の口はヘラにて附けたるなり。

左盛

梅に松は紅の煉切りにて梅の輪形に作りてヘラにて松を圖の如く筋を附けたるなり。

婚禮用



向附

笹葉は小豆羹絞り出しにて書きて挽茶羊羹を流したる物なり。

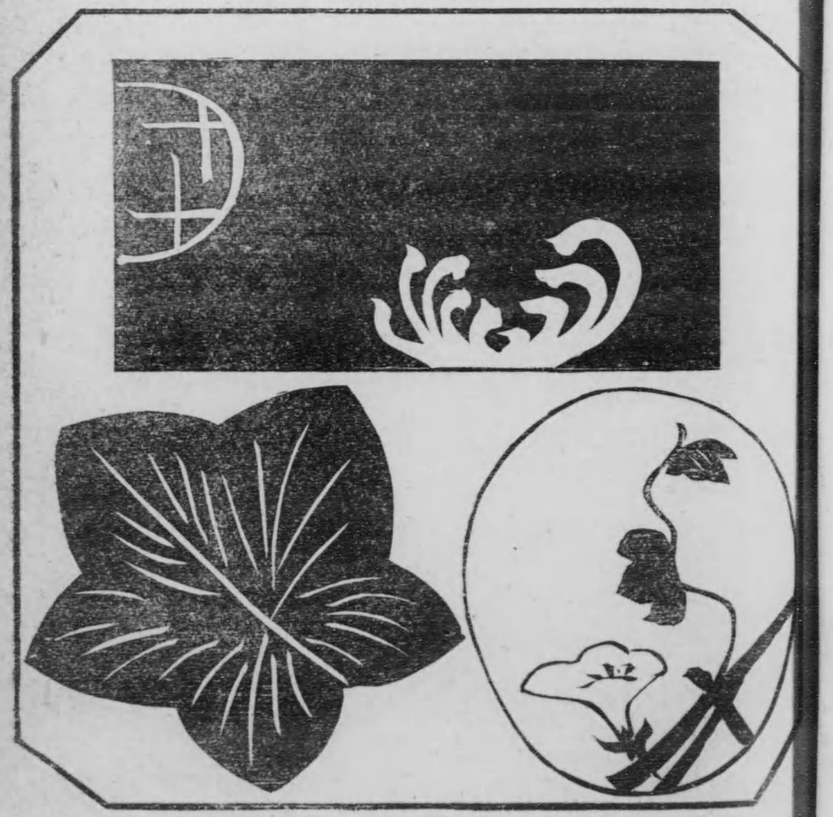
右附

梅ツボミは薄紅の牛肥にて包みて形を作りてヘラにて筋を附けてツボミの如くしてヘタを挽茶煉切にて作りたるなり。

左盛

龜甲を白煉切にて作りて下部の所に青にて松を思はせる如く作りて指にて平に押して其之上部に針金を輪にして燒きて鶴の形を押したる物なる事。

季節用



向附

菊は圖の形を白の蕎麦の絞出しにて書きて後ち冷えたる時を以て挽茶羹を全部流したるなり。

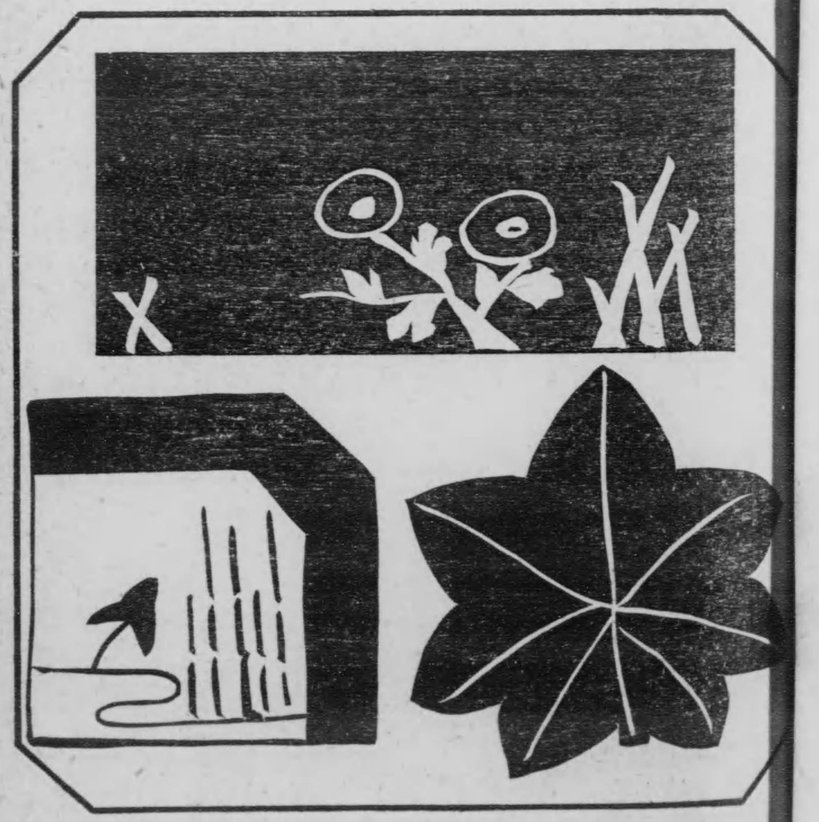
右盛

朝顔は白の煉切を小形に丸めてツル及び莖を青餡にて指先きにて刷り押して花を紫に押し刷りとして作るなり。

左盛

紅葉は赤及び黄をボカシたる色取りとして以上の如き形を作り後ち布に包みて手輕に眞中を絞りたる物の事。

佛事用



向附

菊は小豆羹にて絞り出しにて羊羹の舟に書きて後上より白薯蕷羹を流したる事。

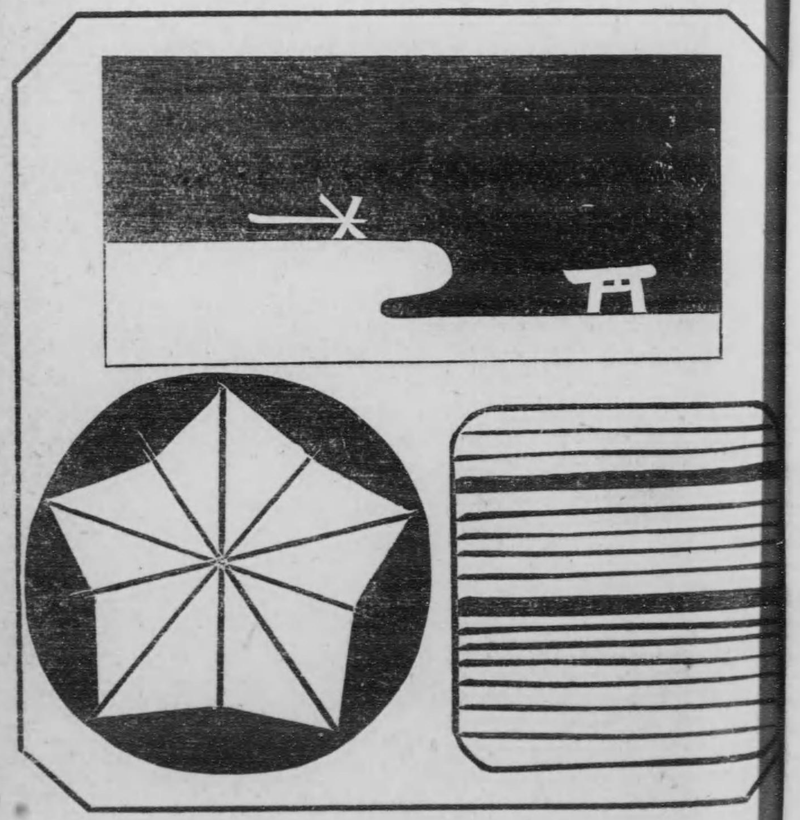
右附

紅葉は黄色に少々紅をボカシて以上の形を作りて筋はヘラにて附けたるなり。

左附

式紙形にヲエ及びコウホネの模様にて黒き畫の所を赤時雨にして白き所を挽茶時雨にして模様を形紙を利用してニッケ粉にてハタキボカシとして岡時雨にて作るべし。

七五三御祝用



向附

神家は下の白き所を白の薯蕷煉切にて作りて舟に入れて家根及び鳥居を小豆羹にて書きて後ち挽茶羹を流したる物なり。

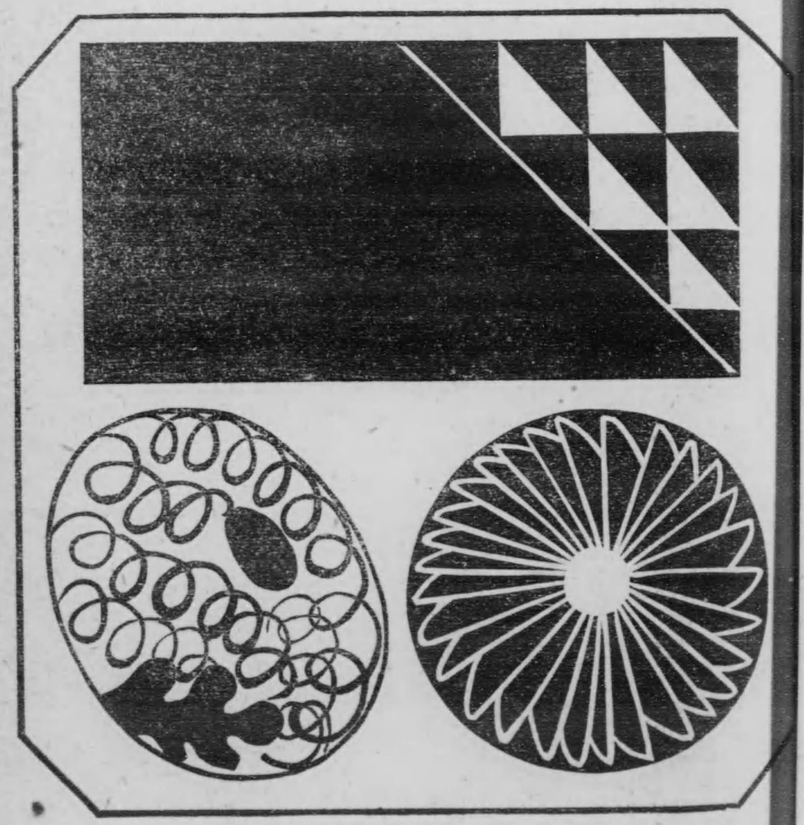
右盛

煉切を初め白黄赤の三色にして圖の如く合せて小口より切りて其の切口を平らにしてヘラにて七五三の筋を附ける事。

左盛

麻葉は白にて中を赤にて筋を入れて三角を合せて組み合せ外を紅煉切にて卷きて小口より切りて切口を上にして置くなり。

菊之園



向附

ウロコ形家根模様は小豆羹を圖の如く三角に切りて羊羹舟にナラベ後白薯蕷羹を流したるなり。

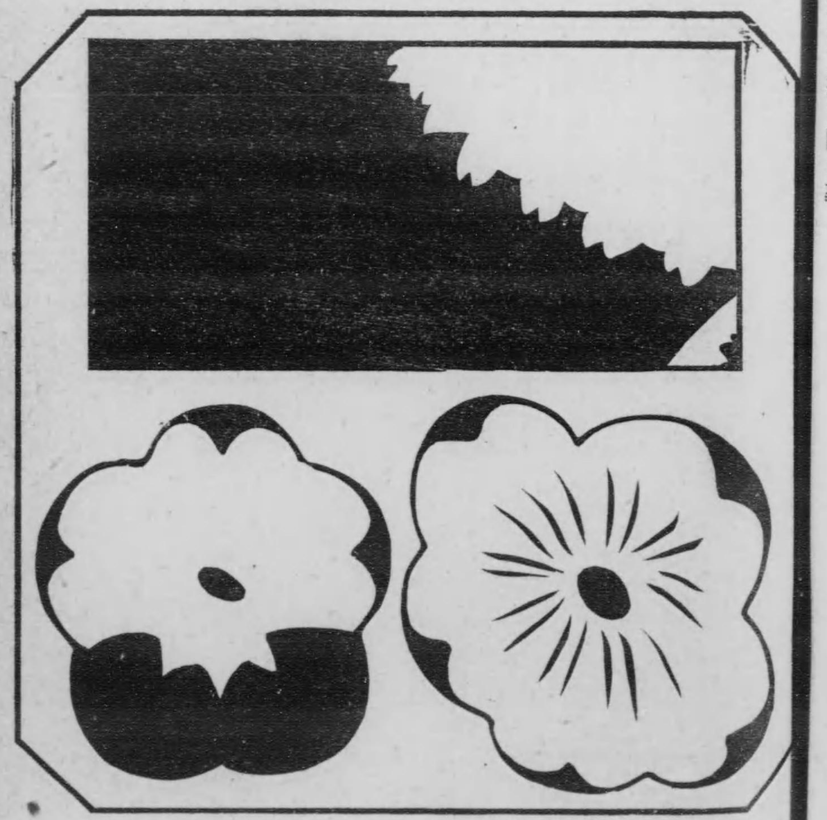
右盛

煉切菊は中を赤にして上白に包みボカシとしてヘラにて圖の如く切りて眞中の所に黄染の飴を丸めて付けるなり。

左盛

牛皮菊にて是は牛肥を小判形に包みて其上に蜜を引き其の上に小田巻の糸を筒にて廻し掛けて圖の如く掛けて眞中に黄色煉切を指にて押附葉は羊羹をぶりき形にて拔き附る事。

季節用



向附

櫻は薯蕷羹を煉りて三分程を薄紅にて染めて圖の如く判面に舟に流して後武力櫻枝形にて所々取除け後ち殘りの白羊羹を流す事。

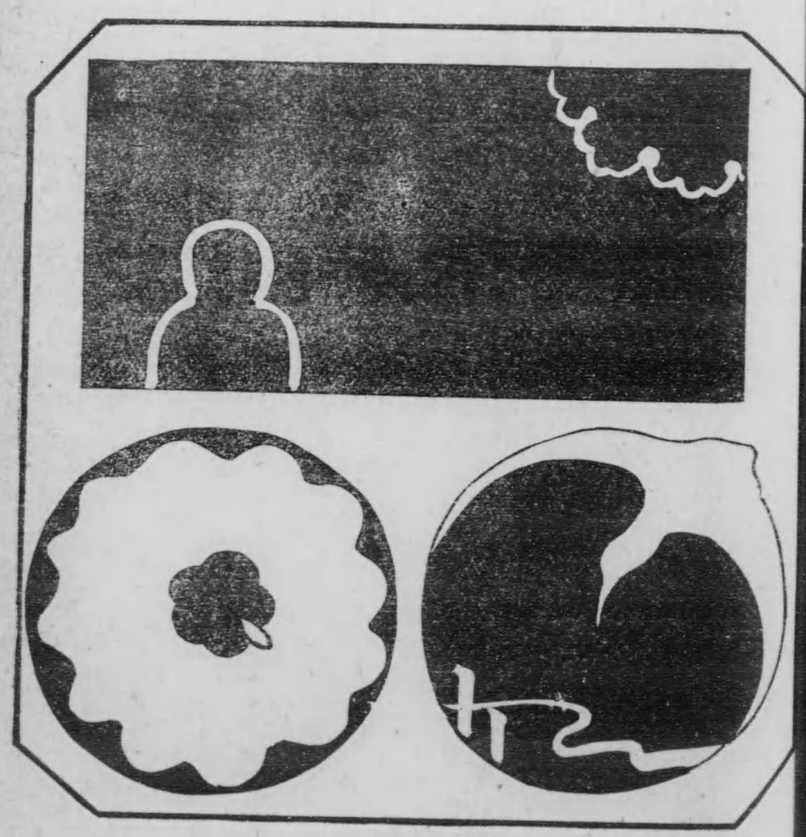
右盛

櫻は煉切りを薄紅に染めて圖の如き形ちに手先きにて作り眞中に黄飴を附けて布に包み手輪に絞りたるなり。

左附

櫻は上三枚の花びらは表を見せ下の二枚は裏を見せし形ちに付き上を手形にて作り下をへうにて筋を付けて眞中に黄色染飴を附けるべし。

會席用



向附

雪輪及び雪達磨の形を白煉切にて武力形を用ひて作り小豆羹を一分程舟にながして其上に摸樣の煉切をナラベ後ち小豆羹を全部流したるなり。

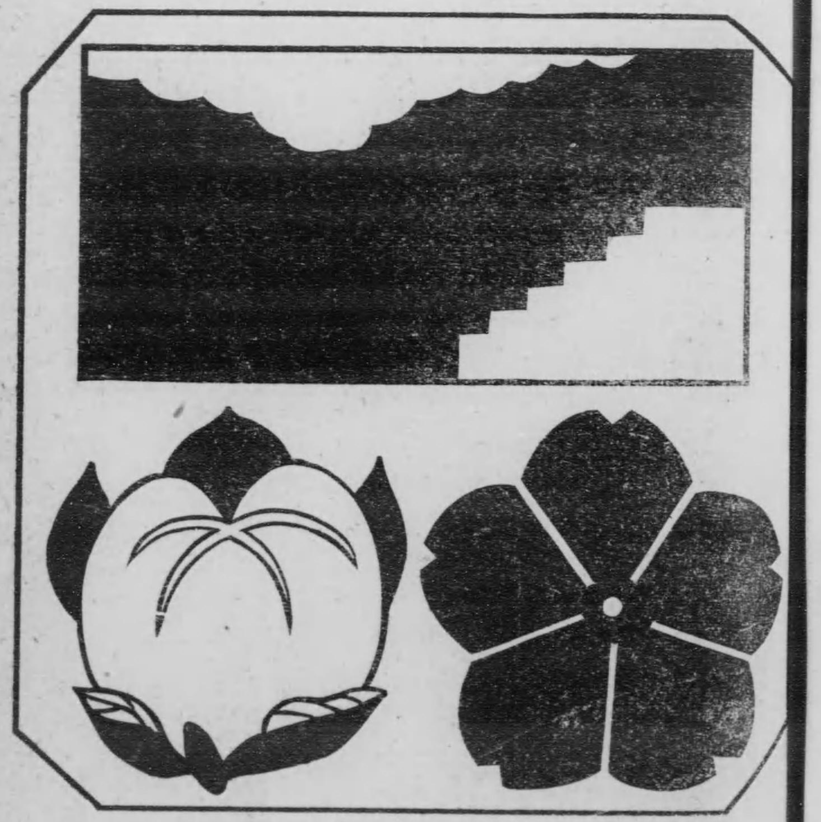
右附

月に雁は白の煉切を丸き輪形に作り其の上判月に小豆煉切を指先にて雁の形ちに刷り込みたるなり。

左盛

櫻は薄紅の牛肥にて包み揚げて櫻の形に形取りて直中の所にヘタを挽茶色餡にて作り附けたる裏櫻の模型なり。

三月節句用



向　附

雲及びキダハシは岡時雨にて雲及びキダハシを木形を利用して小豆色にして全部を白の時雨にて仕上る事。

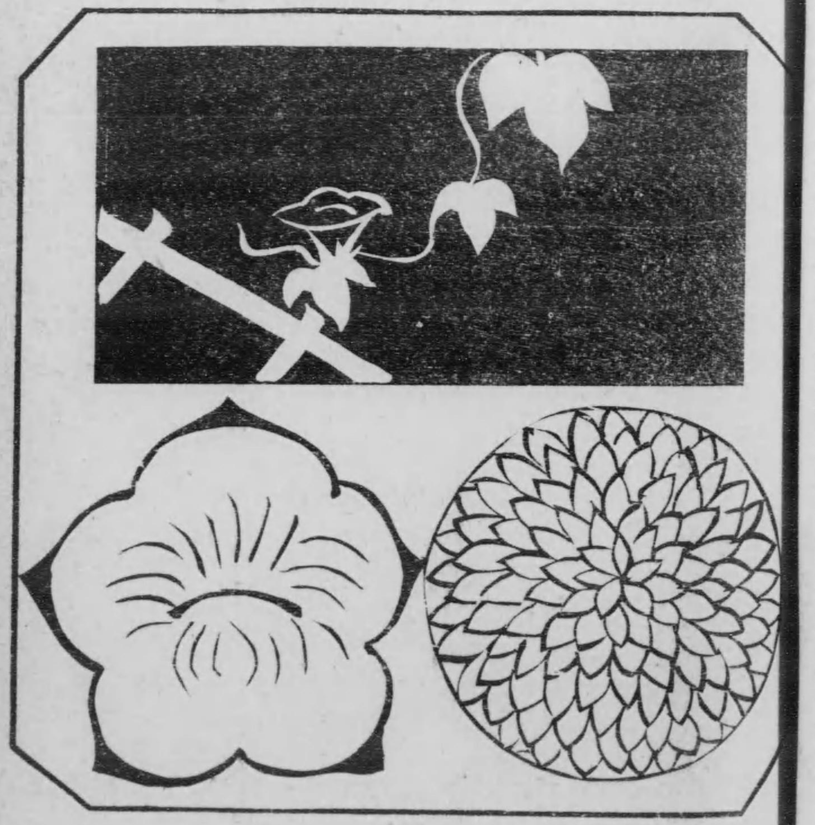
右　盛

櫻は薄紅の煉切りにて圖の如き形ちに三角定木を利用して作り深き筋はヘラにて附け眞中に黄の餡を附けるべし。

左　盛

橘は黄色の煉切にて眞中を紅を中より包みボカシとして以上の如き形を作り筋はヘラにて二重に附け葉は挽茶餡煉切にて後より四方に附けたる物なり

秋の庭



向附

井に朝顔は小豆羹を以て絞り出しとして舟の中に書きて冷えたる時を以て挽茶羊羹を全部流したる品なり。

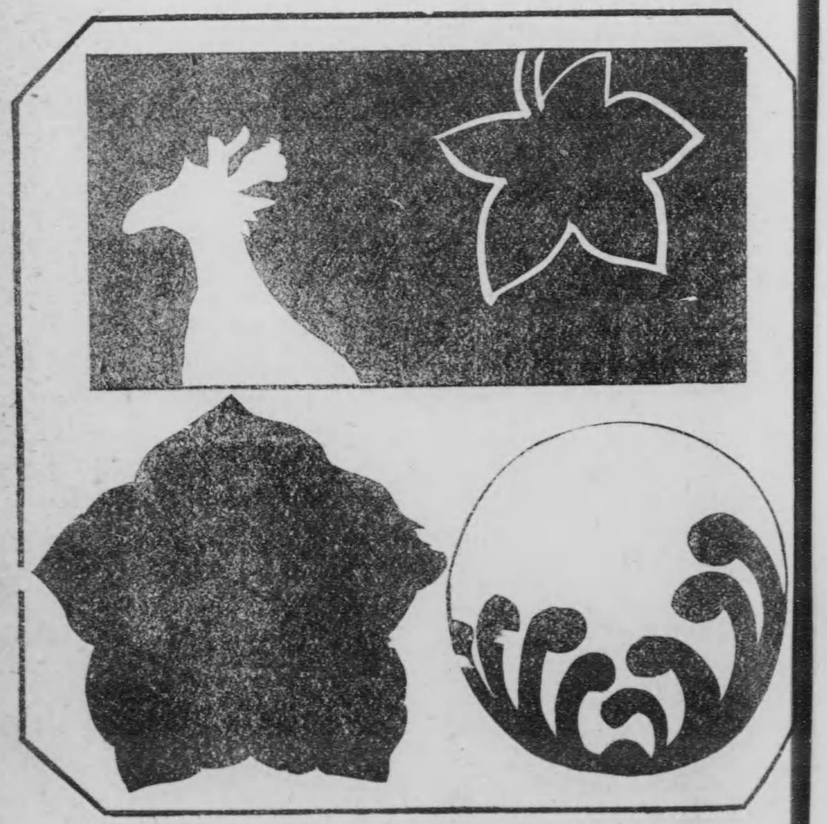
右盛

煉切氣は上部を白にて中に紅を包みてボカシとなして圖の如く下より上にてハサミ揚げたる物なり。

左附

煉切桔梗は薄・紫色に染め上げて眞中に黄色を丸くして少々附けて圖の如く手先きにて形を作り後布に包みて手輕に絞るべし。

秋の野



向附

紅葉鹿頭は白の煉切を薄く伸して鍼力形にて拔き取り舟の中に挽茶羹を一分程流して其の中に模樣をナラベ冷えたる時殘りの羊羹を流し仕上げべし。

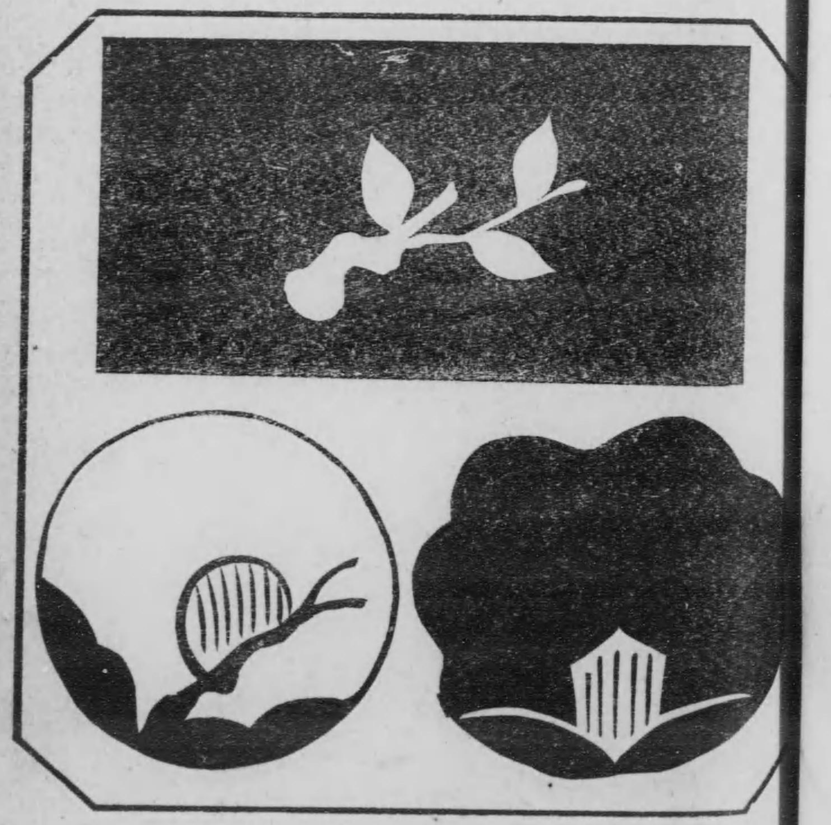
右盛

牛皮菊は薄紅色に包みて輪形に作り其の上に砂糖蜜を筆光きに附けて圖の如く菊模樣を書きて其の所にニッケ粉を掛けるなり。

左附

煉切桔梗に白にて手先きにて形を作り後ち眞中に黃色を少々丸くボカシに附けて光琳形となしたるなり。

季節用



向附

椿の枝は小豆羹にて枝及葉を書きて冷えたる時を以て全部薄挽茶羊羹を流したる物なり。

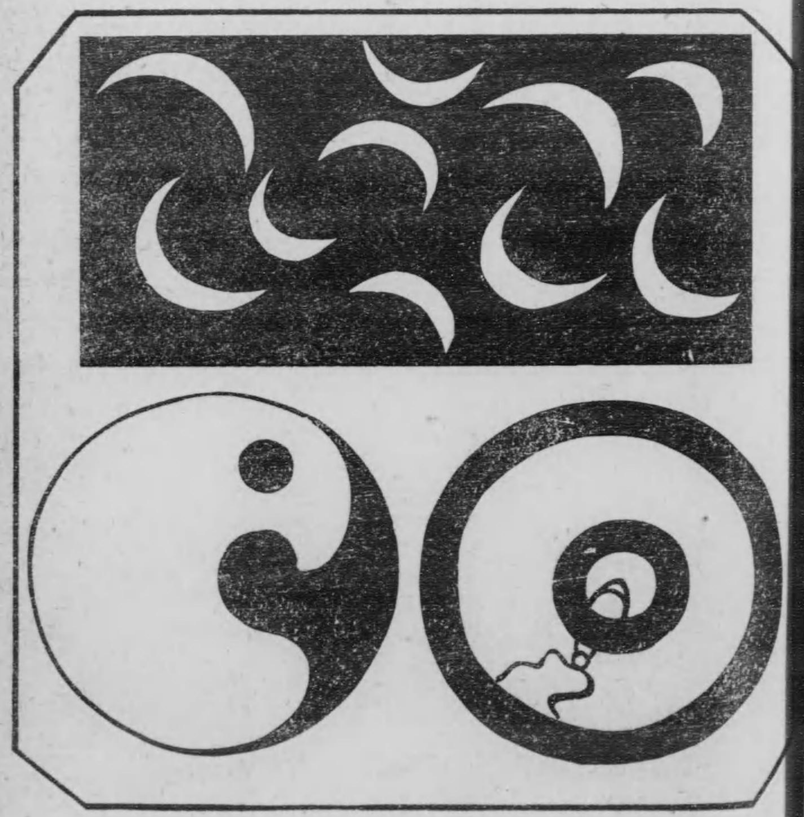
右盛

椿は薄紅煉切に染めて上三枚の花を手先にて、作り下二枚の花びらをヘラにて筋を附けて眞中に黄色餡を附け筋を引きたる事

左附

丸形椿は白の煉切を丸形に作り眞中に菫色煉切を張附けて枝をニッケ色餡を刺り込みて圖の如く下に二枚の花びらを指にて押したる事なるべし。

神事用



向附

月輪は白薯蕷を薄く伸して月形の鍼力形に拔きて薄紅羹を一分程舟に流し其の中にチラシテ月を置き冷えたる時を以て全部流したる物なり。

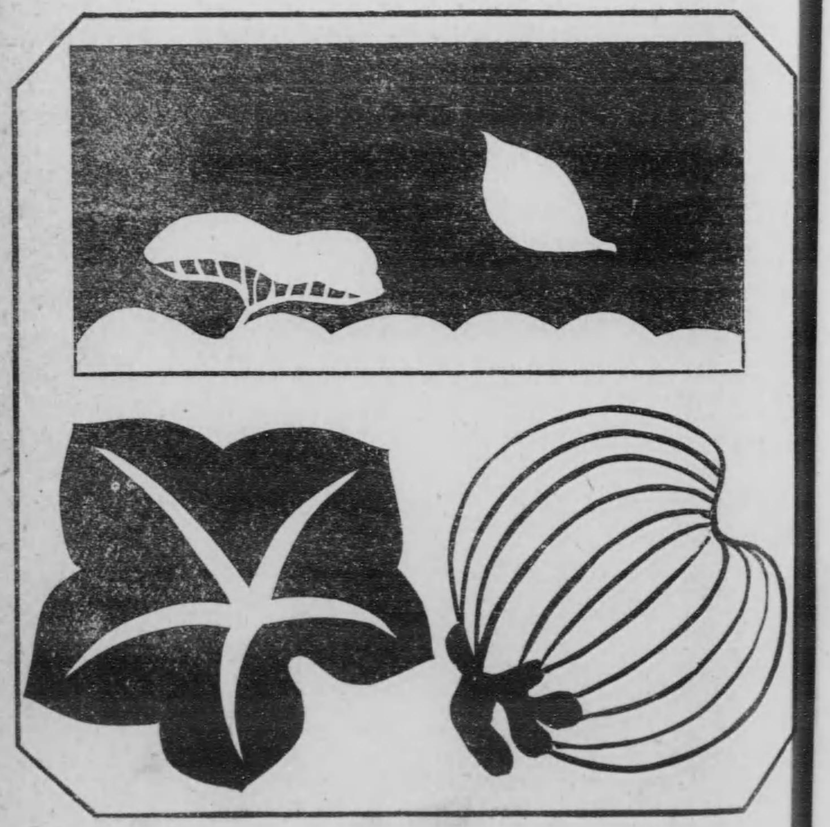
右盛

古代鏡は地を小豆色の煉切にて中の丸及び外の丸は白にて見せヒモは紫を以て染め出し後是をヨリて附けるべし。

左附

マガ玉は牛皮を丸く包みて蜜を引き其の上に金鈍を青に染めてマガ玉形に箸にて植えて空地には黄染の餡を植える事。

佛事用



向附

蓮花及び葉は小豆羹にて舟の中に絞り出しにて書き其の上より白の薯蕷羹を流したる物なり又、バラピンに紙形を利用して刷り込みて是を舟に張り其の中へ流すも善し。

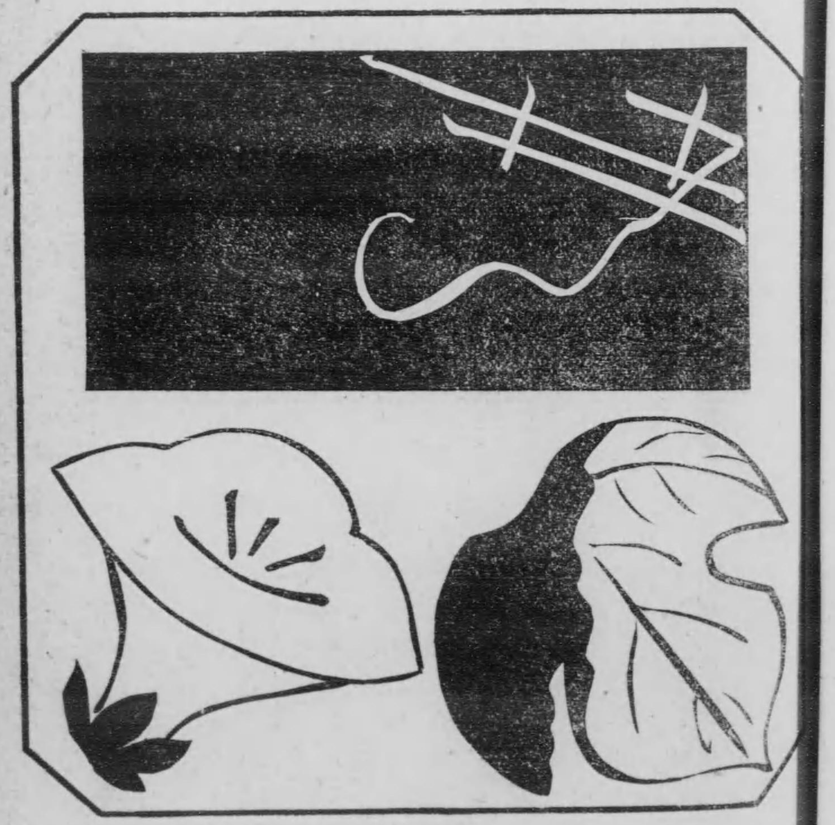
右盛

煉切菊は薄紅にて圓の如き形に作り其上をヘラにて筋を付けて下部青色餡にて葉及び枝を付けたるなり。

左附

紅葉にて挽茶煉切を以て圓の如き形ちを作りて筋はヘラにて二筋に附けべし。

季節用



向附

棚は小豆羹にて絞り出しにて舟の中に圖の如く書きて冷えたる時を以て薄紅羹を全部厚さに流したる物なり。

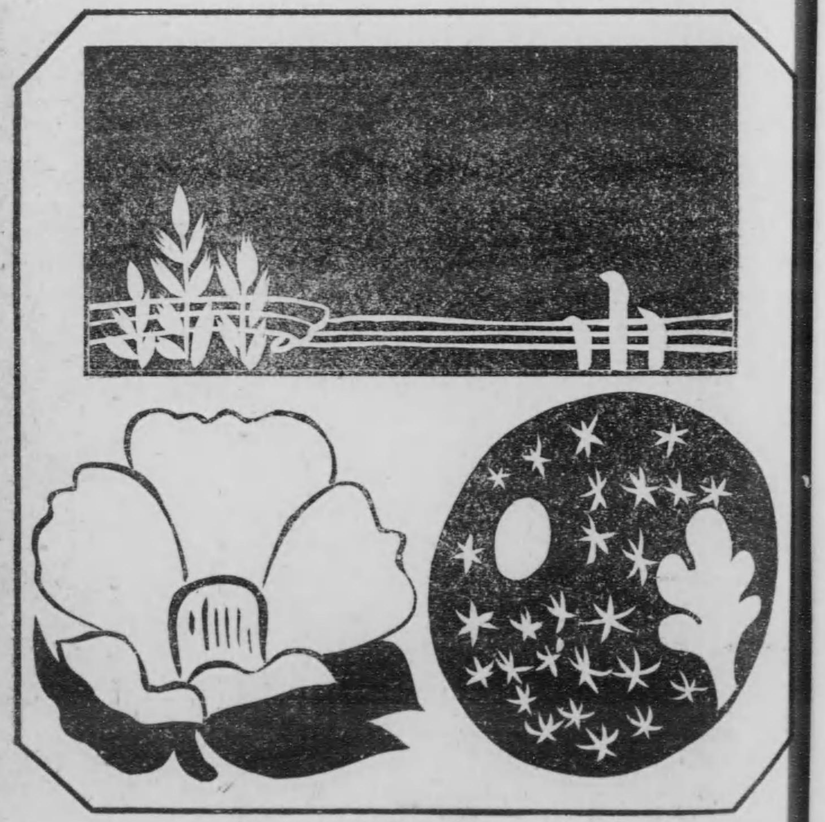
右盛

葉は挽茶と黄色の判面張りボカシにて圖の如き形ちに手先きにて作り筋はヘラにて附けたる事但し煉切なるべし。

左附

朝顔花は上は薄紫下は白の包みボカシの煉切にて圖の如き形ちを作りヘタは青色染餡にて後で附けたる物なり。

佛事用



向附

流及び葦は青羊羹にて葦を絞り出しにて舟に書き流水を水色羊羹にて書きクイを小豆羹にて書き其の上に薯蕷羹を玉子色に染めて流したるなり。

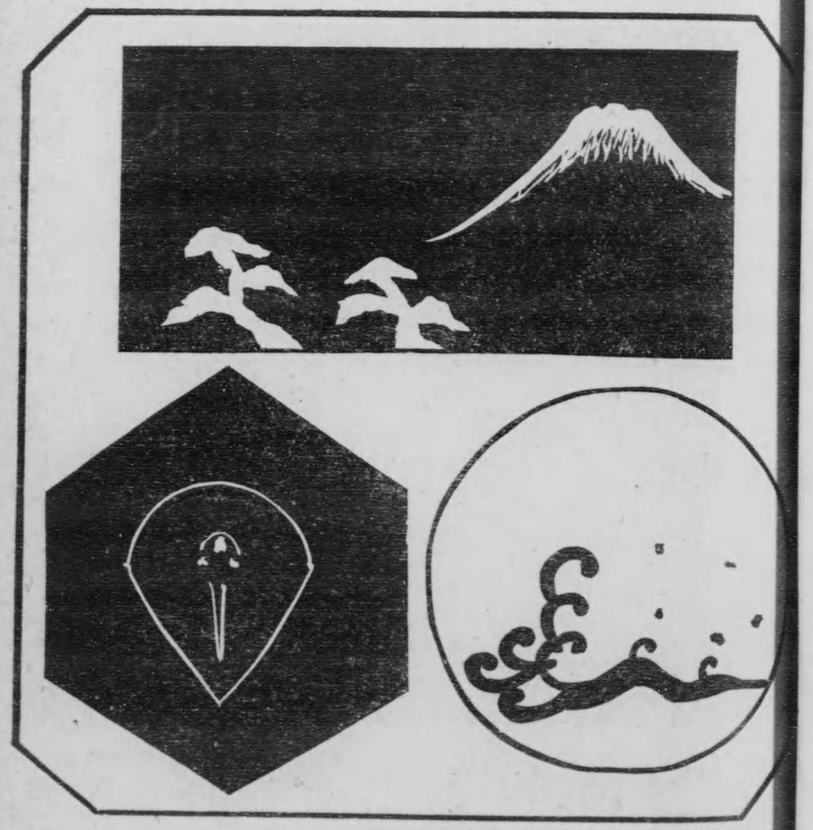
右附

金團菊は牛皮を小判に包みて後蜜を附け後白のソボロを箸にて一面に植附けて眞中黄餡を附け下に羊羹を形にて抜き葉を附けべし。

左盛

葉附椿は紅煉切を以て圖の如き形を作り眞中に黄を附け筋はヘラにて附け葉は挽茶煉切を以て附けるべし。

祝事用



向附

挽茶羊羹にして富士山及び松は小豆羹にて舟に書きて後流したるなり。

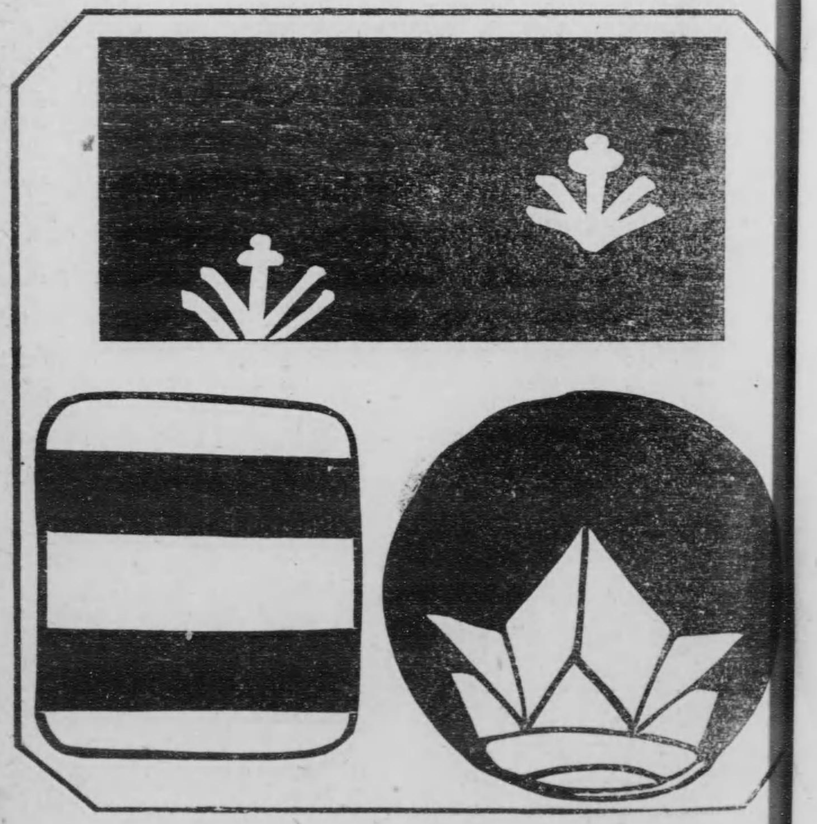
右附

紅煉切を丸形にして日之出を見せて其の上に白の羊羹にて浪を圖の如く書きたる事たるべし。

左付

小豆の岡時雨にて鶴を白にて抜き出したる物なり。

五月節句用



向附

挽茶羊羹にして菖蒲は小豆羹にて書きたる物に流したるなり。

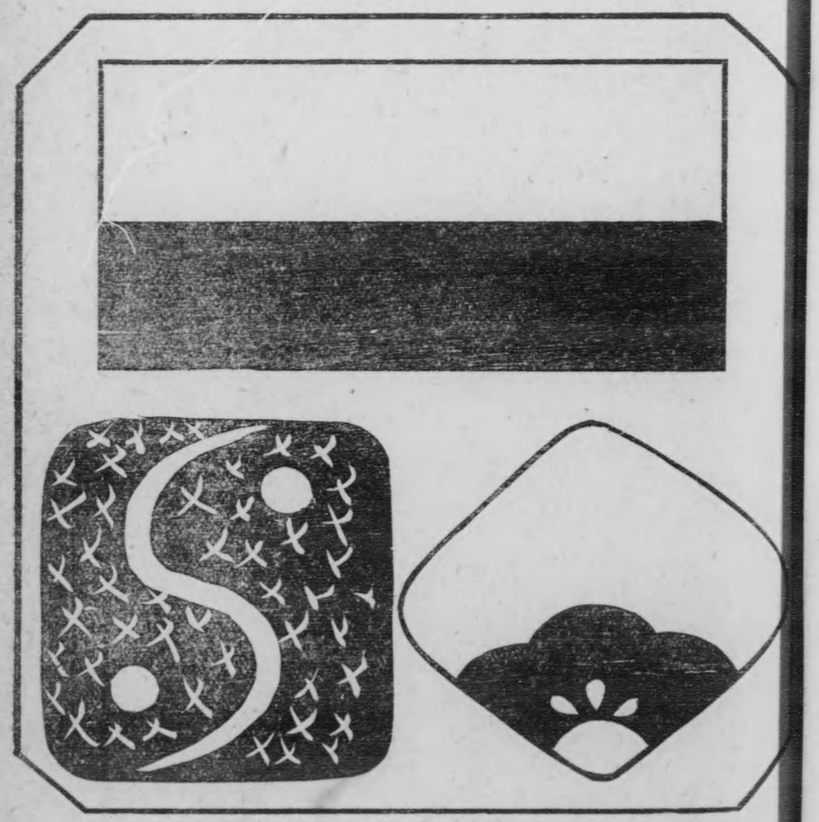
右附

白の煉切を丸形に包みてカブトはヘラにて筋を附けたるなり。

左附

五色の色に時雨餡を染めて段々に岡時雨框に押し重ねて重ね口を上にして利用するなり吹き流しを見せるなり。

會席用



向附

薯蕷羹を白紅の二種にして初め紅を流し半分の空きし所に白を流してボカシとなして後冷えたる時を以て全部流して日之出を思はせるなり。

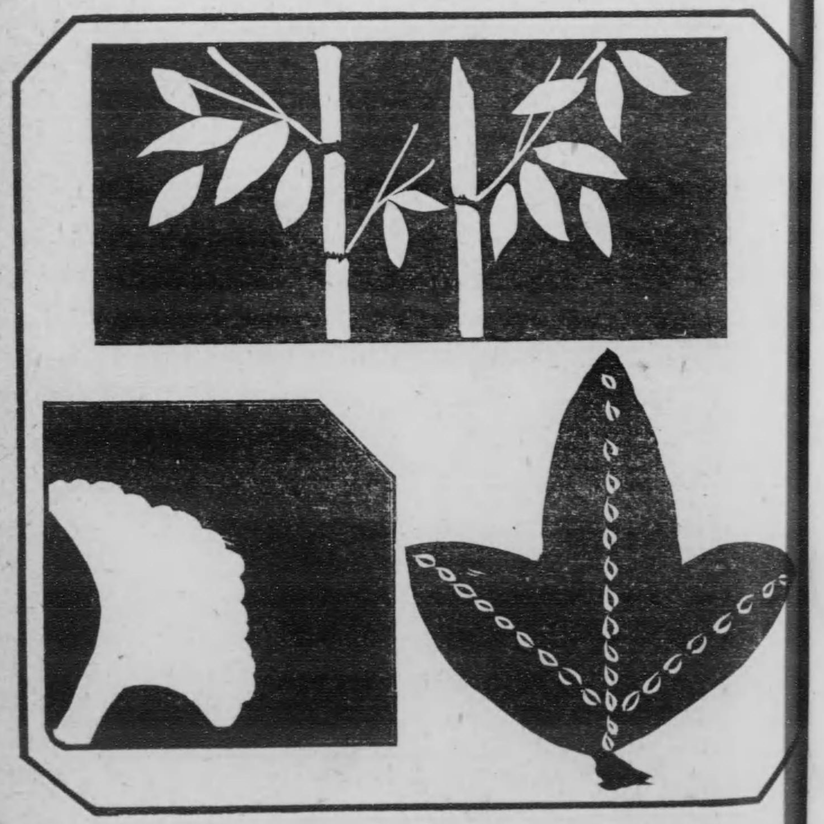
右附

挽茶の煉切を圖の如き形に作りて松を白餡にて張り附けて指にて押して後フルイに押して目の模様となしたるなり。

左附

牛皮を包みて白と黄のマガ玉の金鍋の植附け合せとなす事。

佛事用



向附

白の岡時雨にて竹の模様は挽茶餡にて拔き出したるなり。

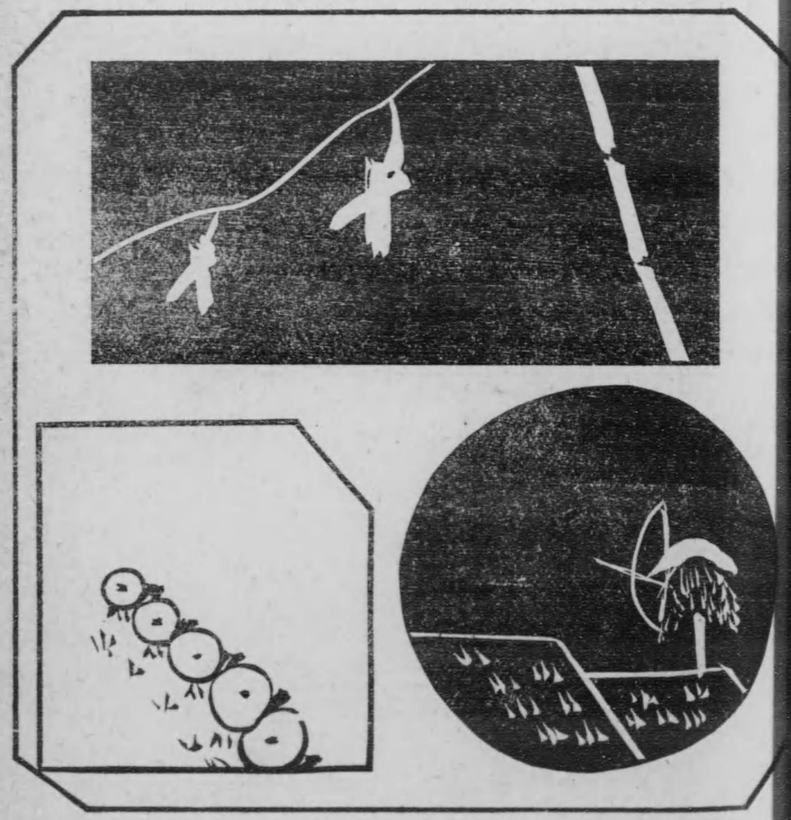
右盛

楓は挽茶煉切にて三角定木を利用して圖の如き形を作り丸小棒にて穴を明ける事。

左盛

薄紅羊羹の中にイテウの葉を白にて現はして是を角切形に切りたるなり。

田植用



向附

竹にシメの圖は小豆羹にて書きて紙を白の煉切にて作りて入れて挽茶羹を流したる物なり。

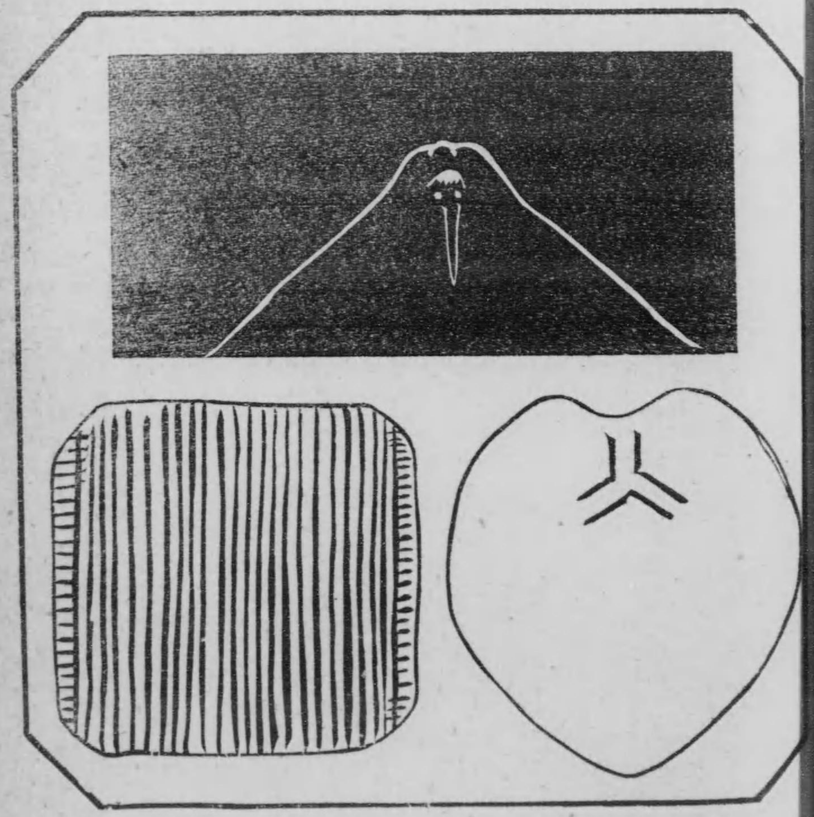
右盛

田に稻及びカカシは紅の岡晴雨にて模樣を白にて出すべし。

左盛

白の煉切を角切形に作りて模樣を形紙を利用してニッケ粉にてハタキボカシとなして田植の形を見せるなり。

婚禮用



向附

挽茶羹にて富士山及び鶴の頭は白の薯蕷羹にて書きたる物なり。

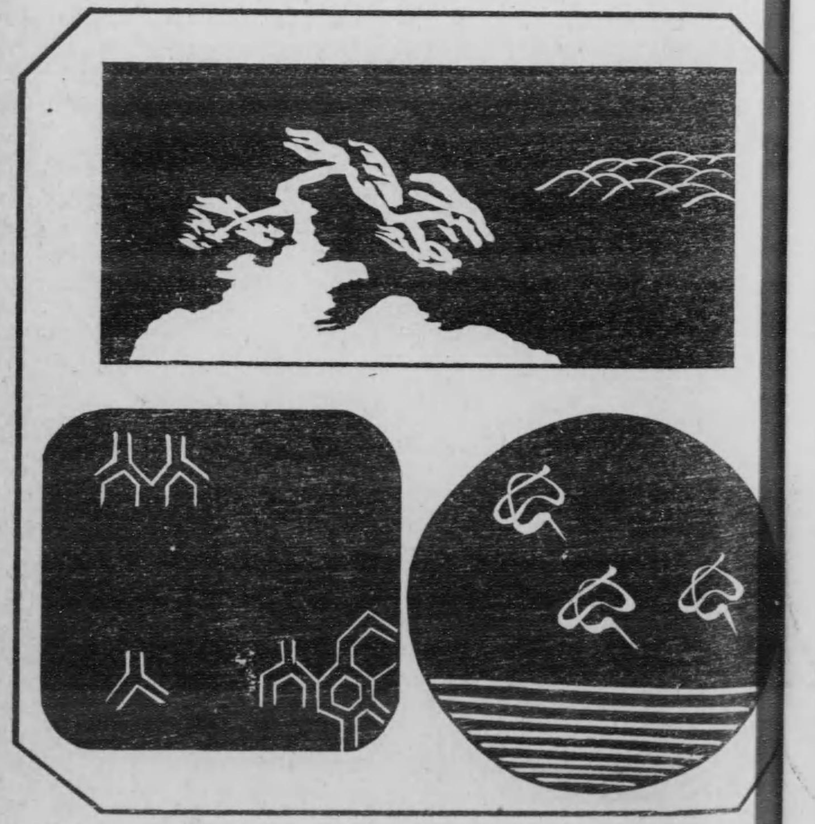
右附

龜の甲の形にして小豆煉切にて作りて筋はヘラにて附けたるなり。

左附

糸卷にて白の牛肥を包みて洞形に作り紅の小田卷糸を筒の中より押し出して圖の如く掛けたる物なり。

祝事用



向附

松に遠浪は岩も圖の如く小豆羹にて書きて其の上に挽茶羹を流したる事。

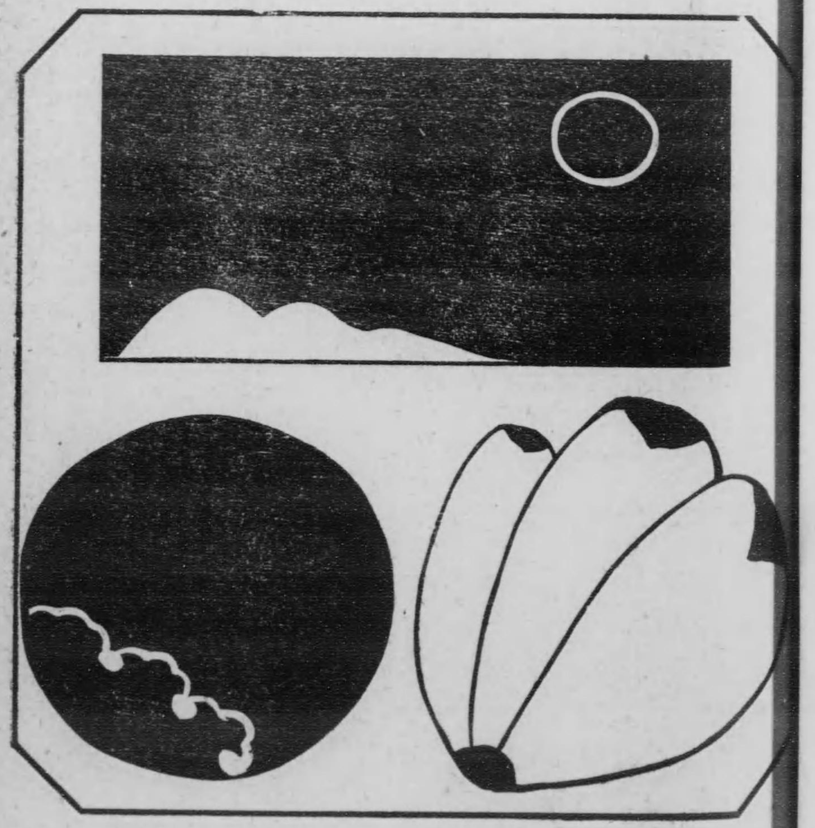
右盛

赤の牛皮を丸形にして其の上に白の長鶴を薯蕷にて作りて張り付けたるなり。

左附

白と小豆の半ボカシ張合せにして洞形の煉切を作りて龜甲クズシの筋はへラにて付けべし。

會席用



向附

小豆羹の中に山及び月を白の煉切りにて拔き取りて入れて流したるなり。

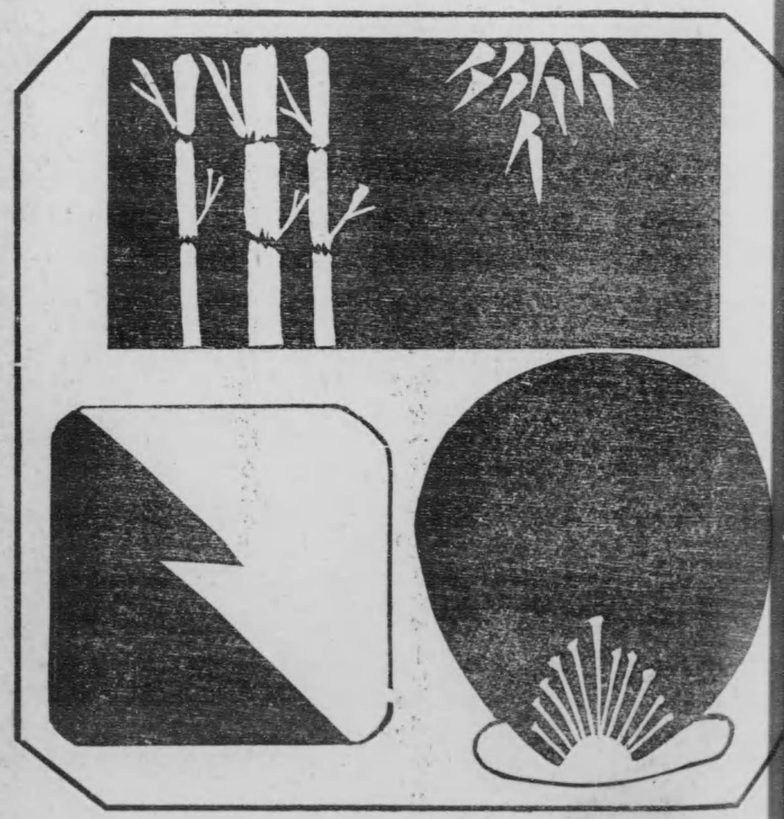
右附

櫻にして薄紅煉切小判に包みて三角定木を以て花の三片を見せたる物にて下の所に黃餡を丸めて附けたるなり。

左附

白の雪平にて包み丸形として其の上に筆に砂糖蜜を附けて雪輪を圖の如く書きて其所に引茶を降り掛けたる事。

松　竹　梅



向　附

小豆岡時雨の臺にて竹を白にて押し出したるなり。

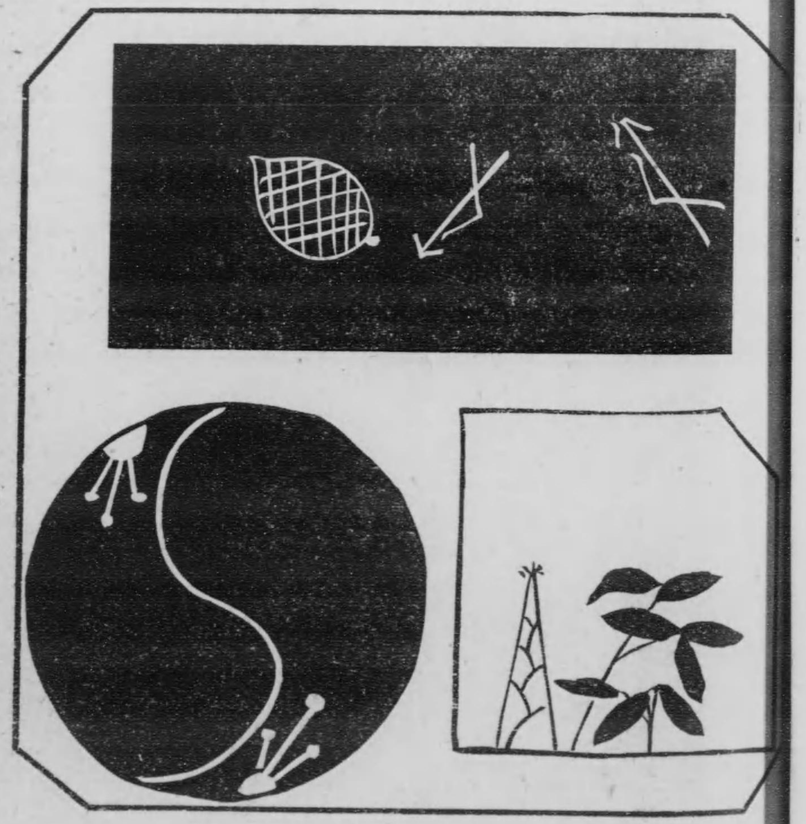
右　盛

紅煉切にして一輪大小判にして下二輪をヘラにて切りカヅイを黄餡を附けて筋をヘラにて附けたる梅花なり。

左　附

白及び青の羊羹又は寒氷の如き類にて松川菱に合せて煉切又は雲平にて卷きて鉋丁して切口を上にして仕上たる事。

松　竹　梅



向附

白の薯蕷羹の中にニッケ色又は青にて松笠の形を作りて松葉は小豆羹にて書きて其上に一分程流して松葉を入れて全部流すなり。

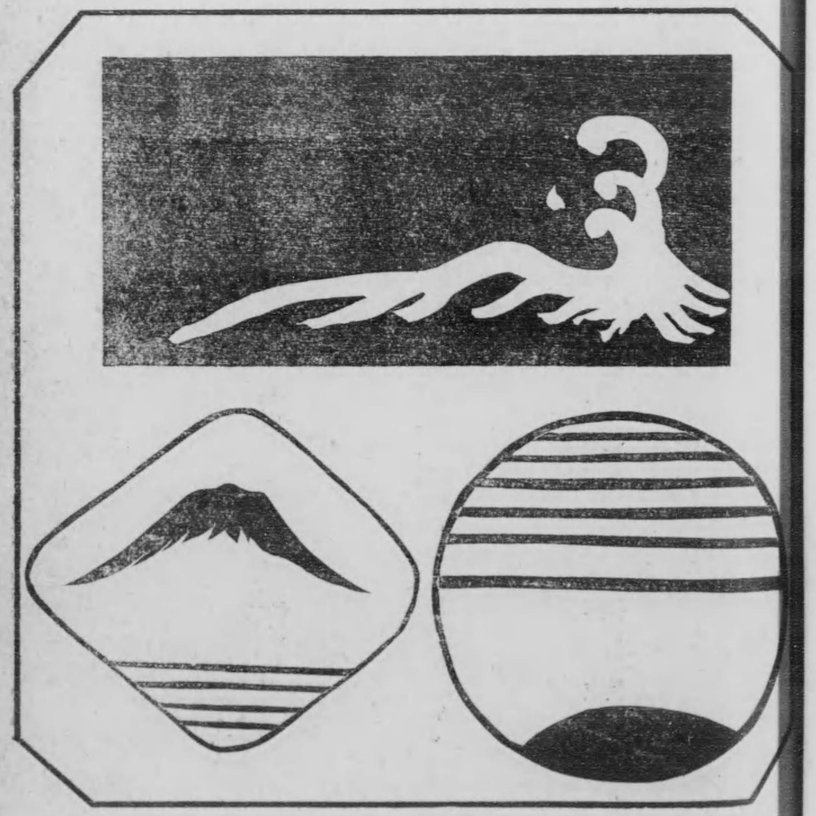
右盛

青の岡時雨にて模様を白にて出すべし。

左盛

梅は薄紅煉切にて丸く形を取りて針金にて筋を附けて後へラにて花のカヅイを附けて黄餡を丸めて下部に附けるなり。

祝事用



向附

地は挽茶羹にして浪を小豆羹にて絞り出しにて書きたる物なり。

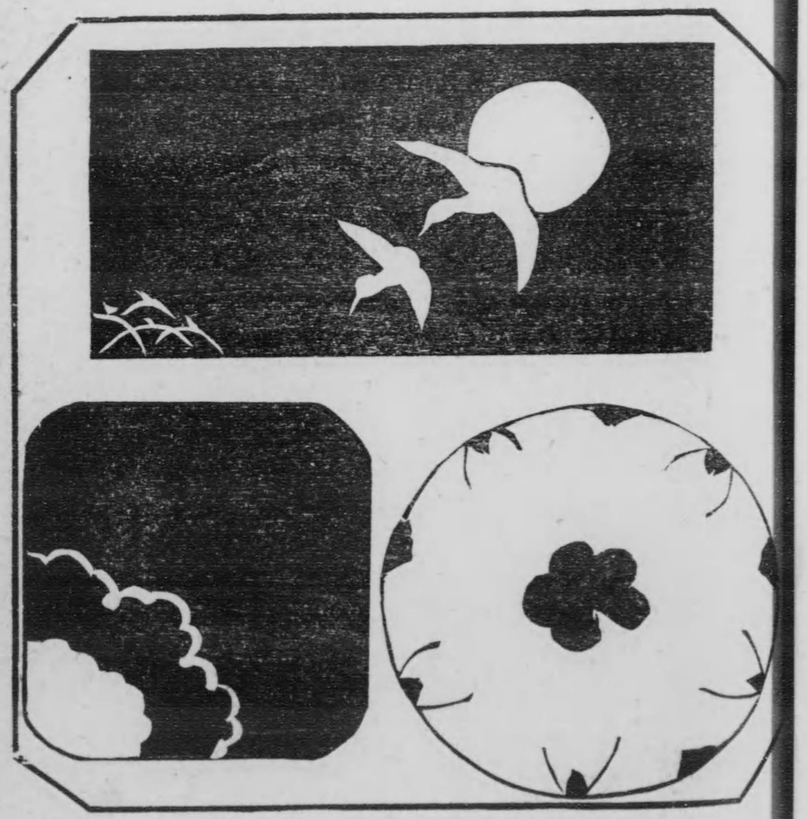
右附

日の出は紅の煉切にて丸く作り下の所を少々白にてボカシたるなり。

左附

富士山は黄色の煉切にて形を作りて模様は青餡を張りて指にて押して刷り込みたるなり。

月雪花



向附

小豆羹にて月及び雁は白の煉切にて拔き取り置きて水草は白の羊羹にて書きて後ち圖の如く流し上げたるなり。

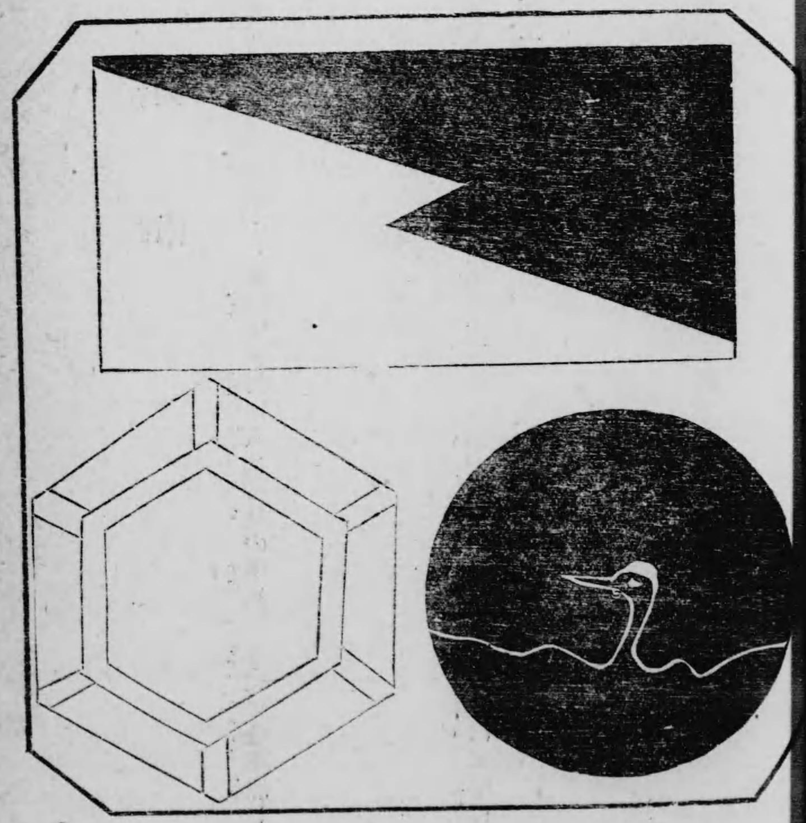
右附

櫻は薄紅色の煉切にて三角定木にて以上の形を作りヘタは押棒を利用して青にて附けたるなり。

左附

白の牛肥を包みて洞形に作り青の金鈍を植附けて圖の如く雪輪を二重に白にて植附ける事。

祝事用



向附

松川菱は白を薯蕷煉切りにて作りて舟に入れて其の中に挽茶羹を全部流したるなり。

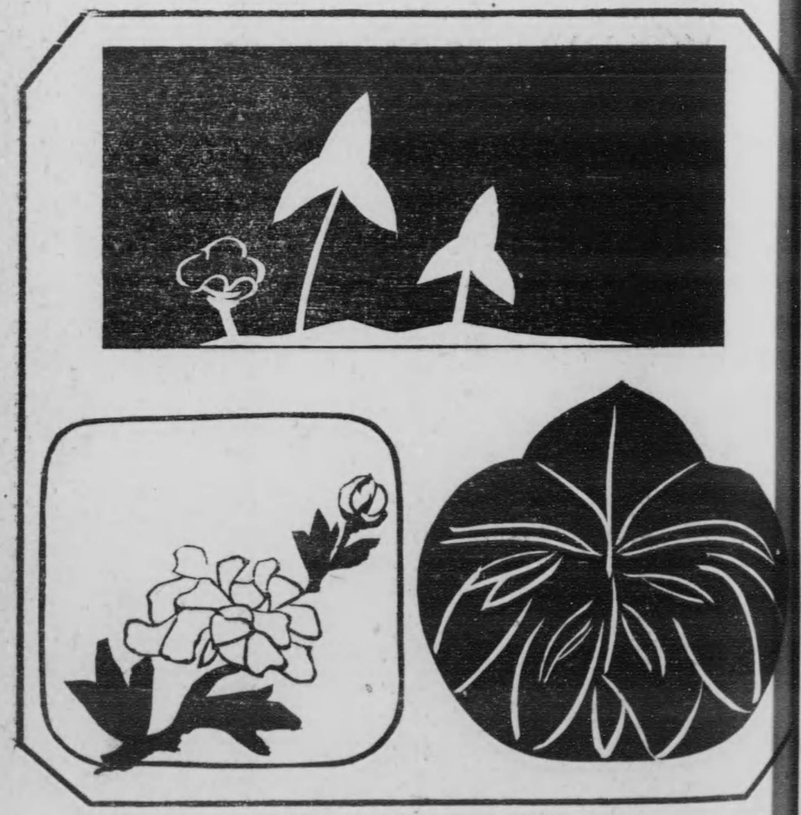
右盛

紅煉切を包みて丸くして日の出に見せて鶴の所を白を張りて指先にて平に刷り込みたるなり。

左盛

小豆煉切を以て龜甲の形を作りて筋はヘラにて附けたる物なり。

佛事用



向附

挽茶羹に小豆羹にてコウホネの葉及び花を書きて仕上げたるなり。

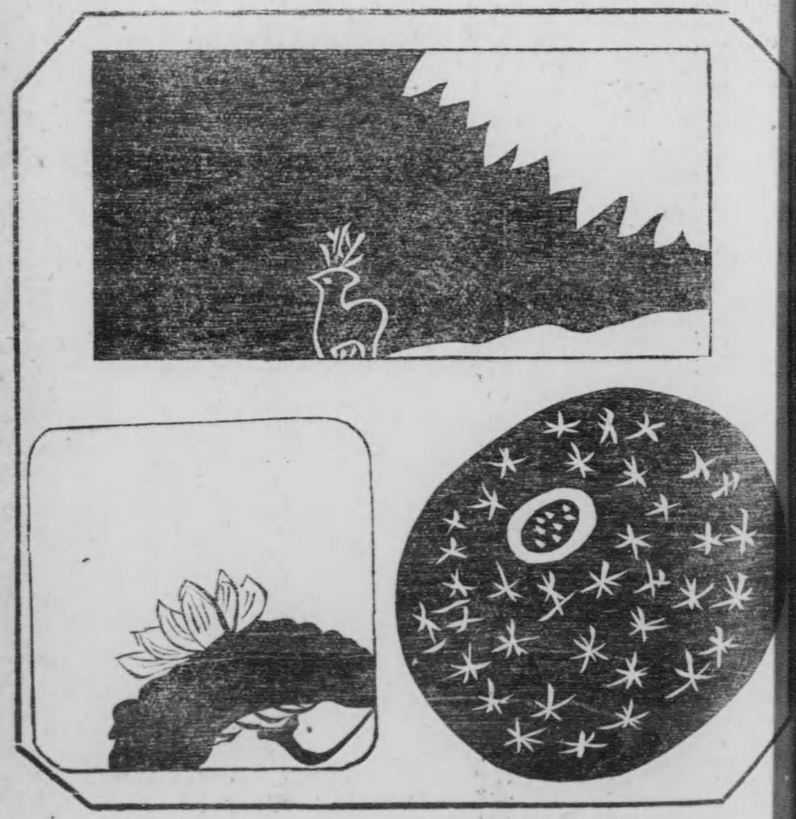
右附

紅葉は黄色と赤色の混合せしボカシ色にて包み上げて圖の如き形を作りて布の中に包みて手輕に絞り上げたる事。

左附

白の雪平を包みて洞形に作り上部の所に型紙を利用して牡丹の花は赤にて葉は青にて刷り込みたるなり。

佛事用



向附

挽茶羊羹にして圖の白き分を黄赤にして紅葉の遠見を作りて下の所の白き所を小豆羹を以て流して全部を仕上後表の所型紙を利用して鹿の模様を現はすべし。

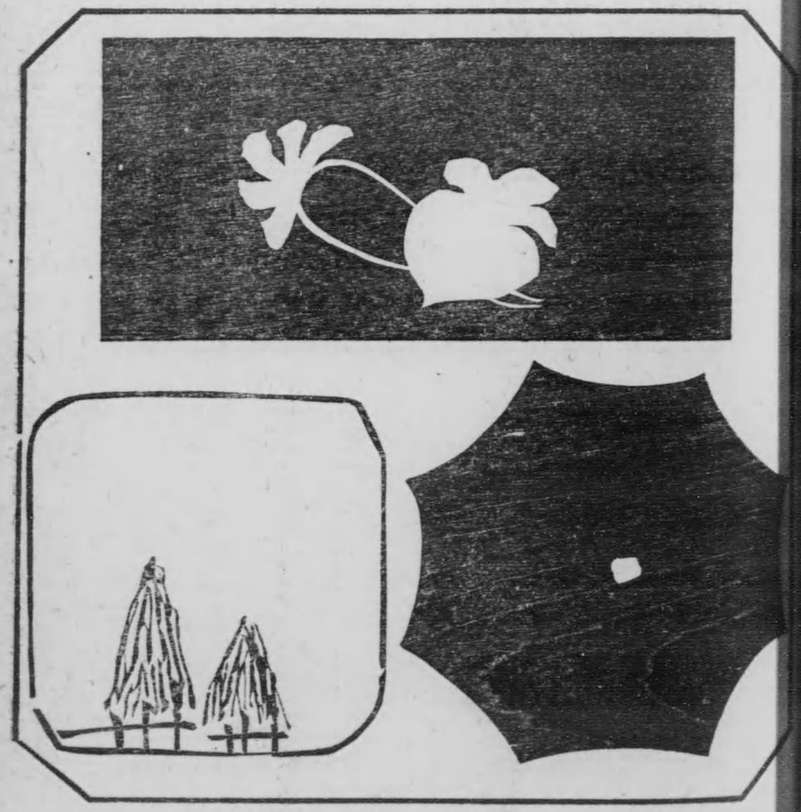
右附

白の牛皮を丸小判に包み上げて薄紅の金團を箸にて植ゑて眞中の所に黄餡を植へて菊の形を見せたるなり。

左附

白の煉切を洞形に作りて蓮の葉挽茶にて花を薄紅にて張りて指にて押して後サヤ形の平面に押すべし。

神事用



向附

挽茶羊羹にして大根は白の煉切にて作り青の葉を附けカブは紅煉切にて丸めて葉を青にて附けて交互に圖の如く流し込みたるなり。

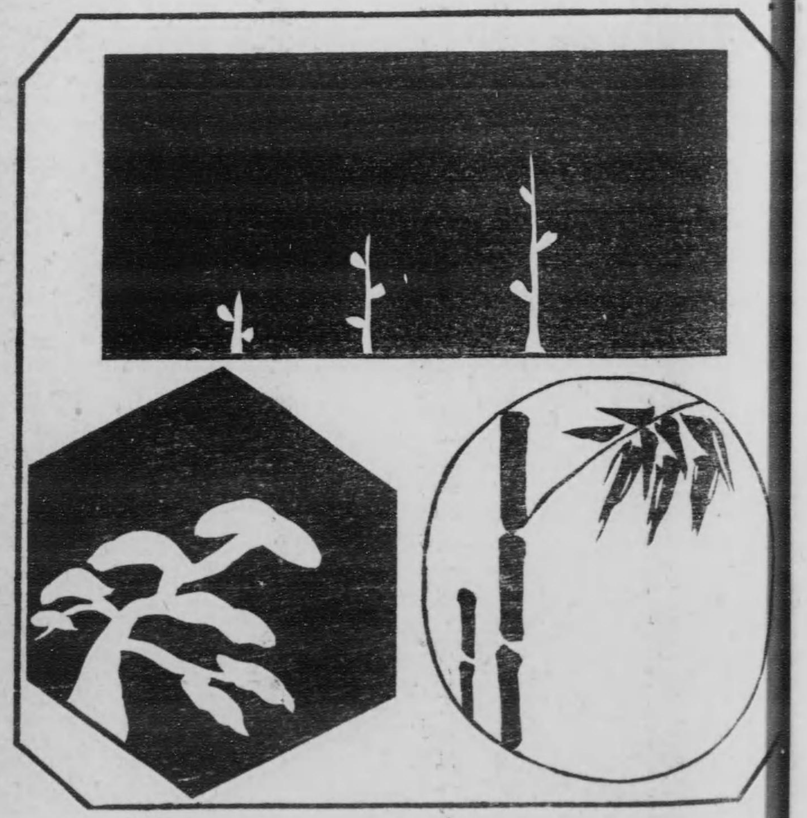
右附

八咫鏡は紅の煉切を以て八鏡の如く三角定木を利用して手先にて光琳式に作りたるなり。

左附

黄色の鬮時雨にて榊は青と白のボカシにて現はしたるなり。

松　竹　梅



向附

梅は日之出羹にして模様は小豆羹にて書きたるなり。

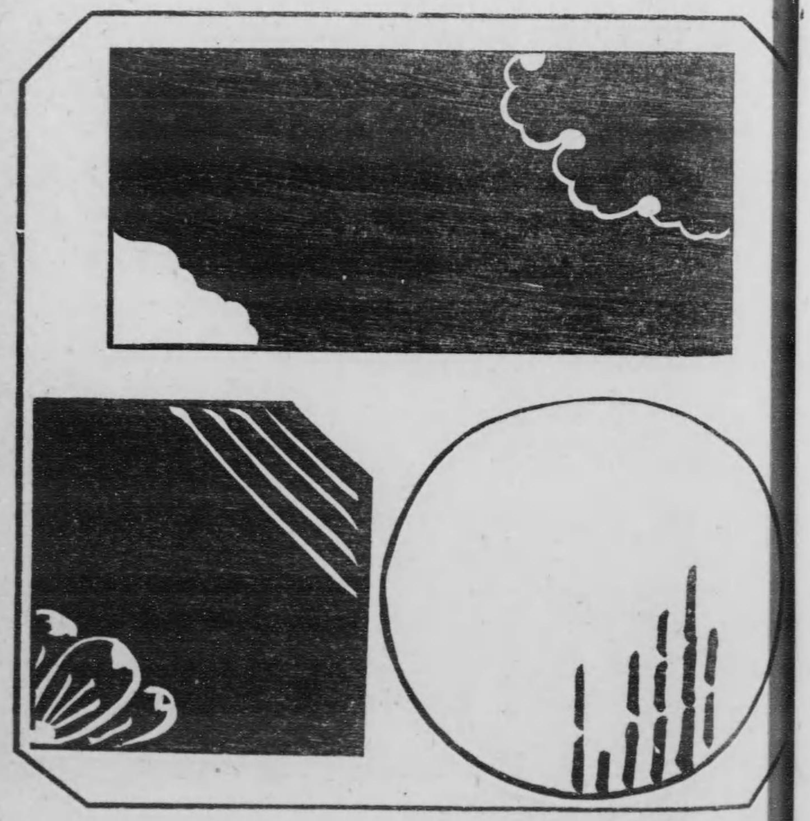
右盛

白の煉切を小判丸に包み揚げて其の上部に本物の竹を以て押して笹はヘラにて附けたるなり。

左盛

松は黄色の煉切を龜甲形に作りて其の上に木はニッケ色葉は挽茶色の二色の煉切を圖の如く張りて指にて能く押して後ちフルヒの目に押したるなり。

會席用



向附

小豆羹にて雪輪を上下の隅に書きて冷えたる時を以て挽茶羹を全部流したるなり。

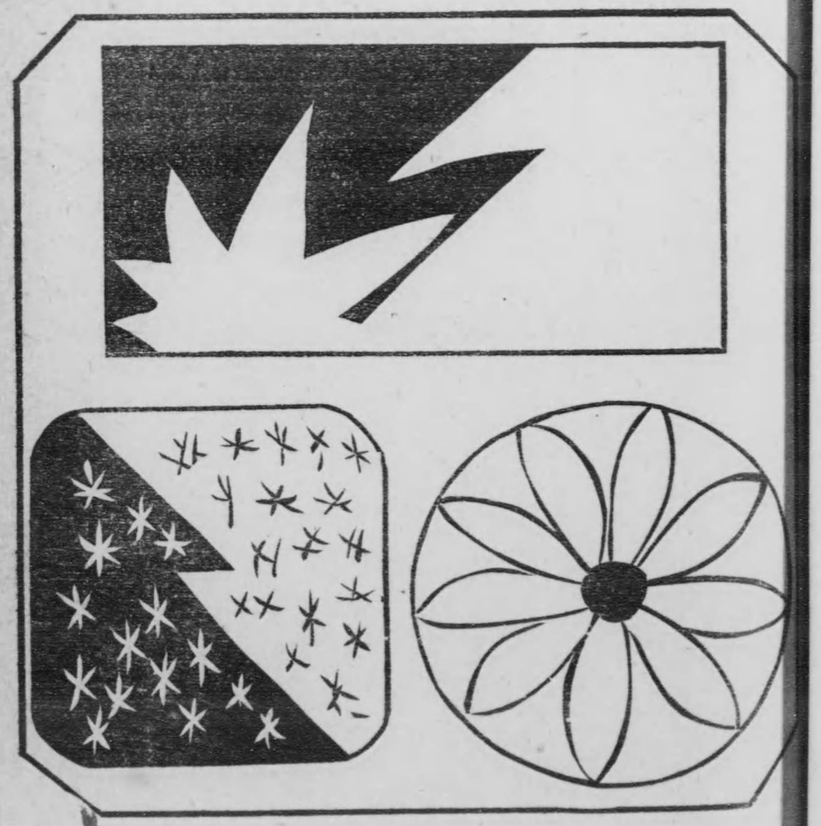
右盛

月は白の牛皮を雪平にして丸く包み揚げて下部の所に焼き目を火箸にて圖の如くトクサの模様を出したる物なり。

左附

櫻は紅臺の岡時雨を作りて花及び霞を白にて拔き押して仕上たる物なり。

佛事用



向附

紅葉は白煉切を以て鍼力形にて拔きて白と青の松川菱に羊羹を流し合せて青の方に模樣を初めの内に入れて流すなり。

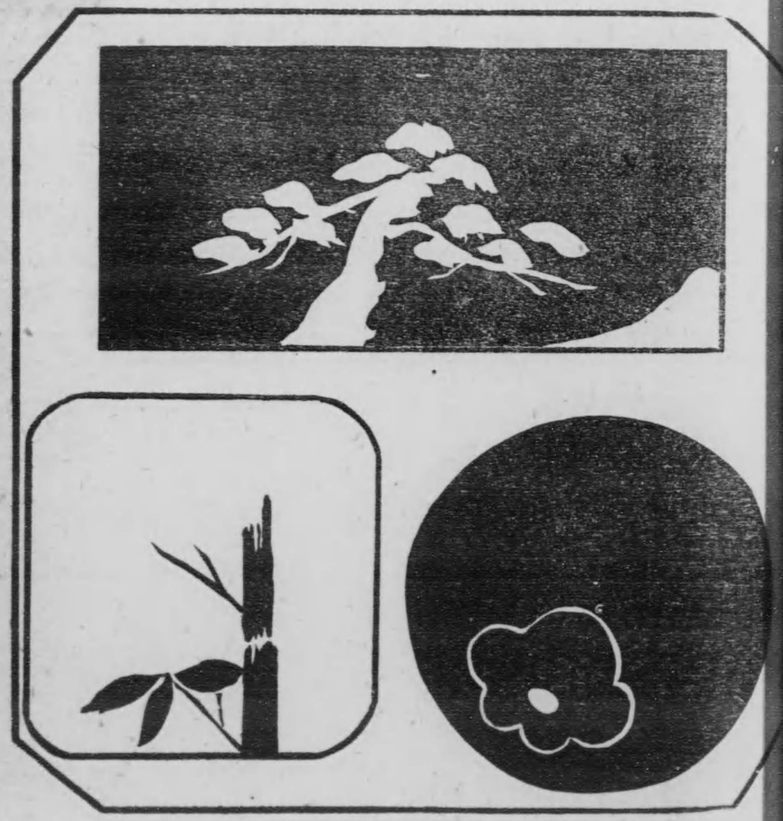
右附

菊は薄紅臺の煉切にて丸く圓めて圖の如くヘラを利用して筋を附けて眞中の所に黃色染め餡を附けたる事。

左附

白の牛皮を包みて洞形に形を取りて上部に砂糖蜜を引きて白と小豆の金團を箸にて植附けたる市松金團の事なり。

松　竹　梅



向附

松は岡時雨にて挽茶臺にして白の松を木形にて押し抜きて後茶餡を全部入れて押したるなり。

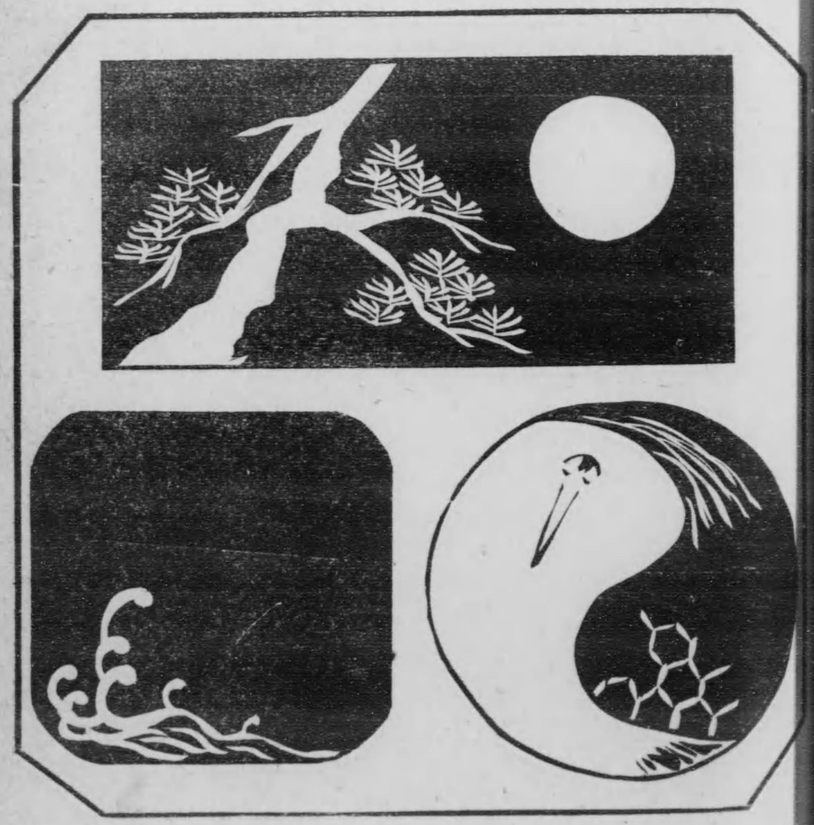
右附

日の出梅は紅の煉切を丸く輪形にして其の上に下の方に梅の花の形ちに白餡を張りて指にて押して眞中に黄餡を一寸附ける事。

左附

竹は白の牛皮を洞形に作りて其の上に燒き火箸にて圖の如く燒き目を附けたるなり又は形紙を利用して青にて刷り出すも宜し。

祝之友



向附

日之出松は初め黄色の岡時雨を作り日の出を紅に染松を青に染め木をニッケに染め以上三色の餡を以て木形にて押して抜き後黄色の餡を全部押し込みて堅く押したる事。

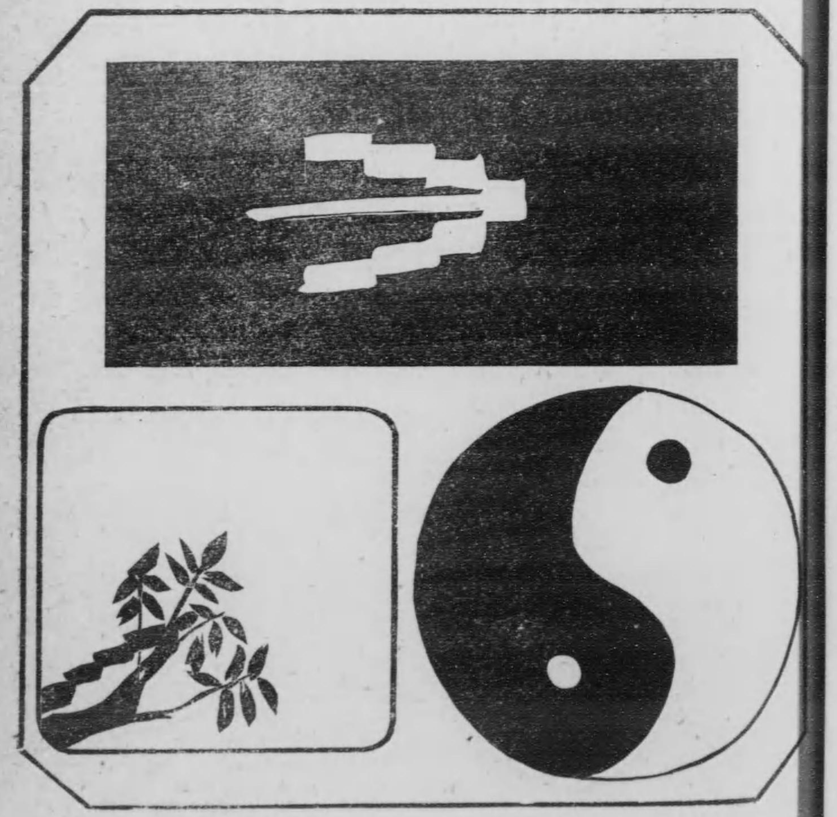
右盛

鶴龜は白と小豆の二色の煉切を張り合せて圖の如くヘラにて摸様を出したるなり。

左盛

浪は紅の煉切を洞形に形どりて平面に押して其の上に下部に形紙を利用してニッケ粉にてハタキボカシとなしたる物なり。

神事用



向附

白の御幣を金玉の中に流し込みしなり。

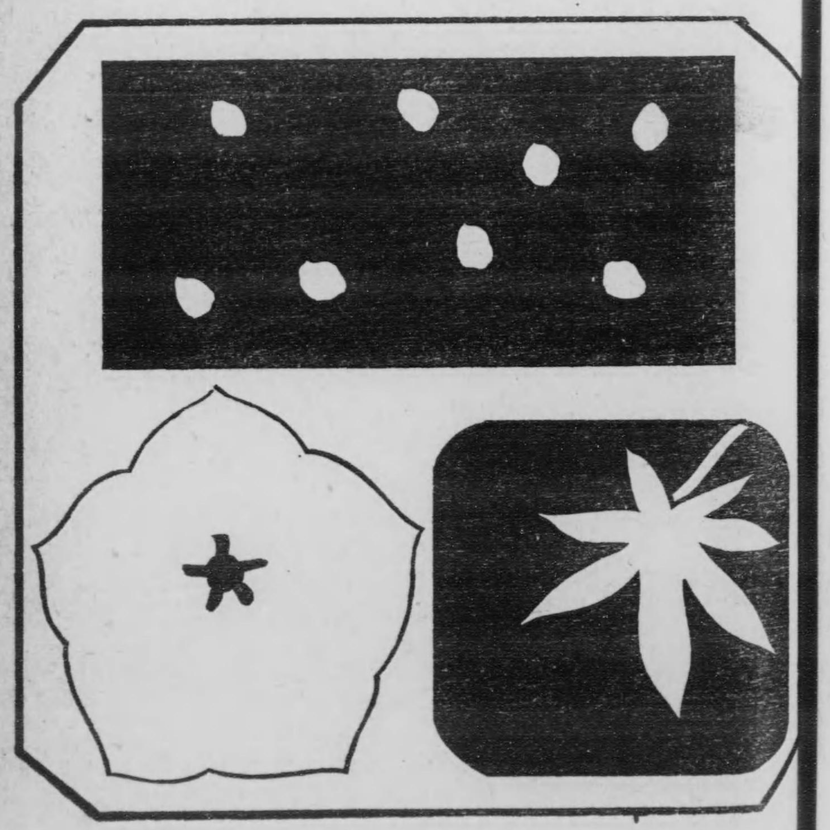
右附

赤白の煉切をマガ玉に合せたる物なり。

左附

黄色の雪平の上に形紙にて榊の枝を刷り出したるなり。

佛事用



向附

小豆羹の無地の物なり。

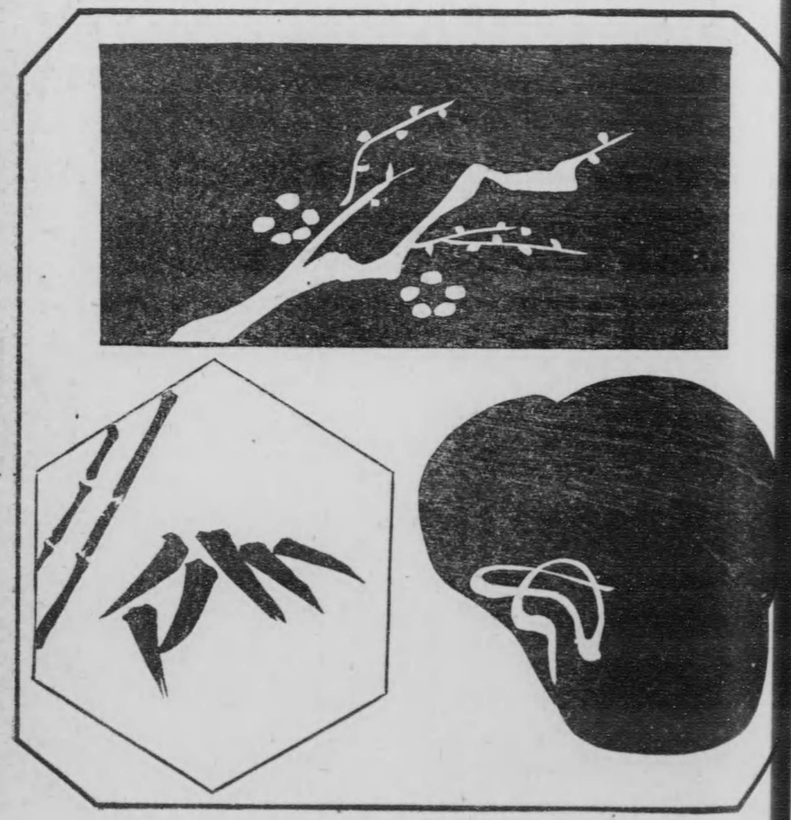
右盛

挽茶の洞形煉切に黄赤のボカシ紅葉を張り附けてフルヒに押したる物なり

左盛

白の煉切を桔梗の形に手先きにて作り筋はヘラにて附けたる物なり。

祝事用



向附

梅は小豆羹にて舟の中に書きて上より紅羊羹を流したるなり。

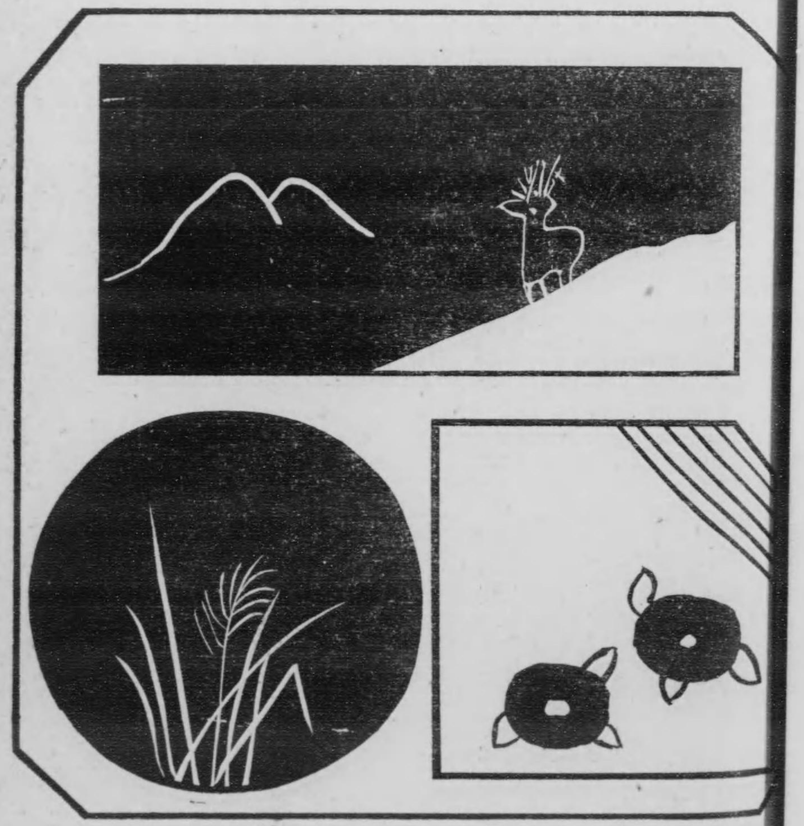
右附

青の煉切にて松の形を作り長鶴を白の煉切にて作りて附けたるなり。

左附

白の岡時雨にて竹を小豆餡にて抜き出したるなり。

秋の山



向附

遠山及び山は小豆羹にて書きて全部青羊羹を流して冷えたる後ち切りて形紙を利用して鹿をニッケ粉にてあらはすべし。

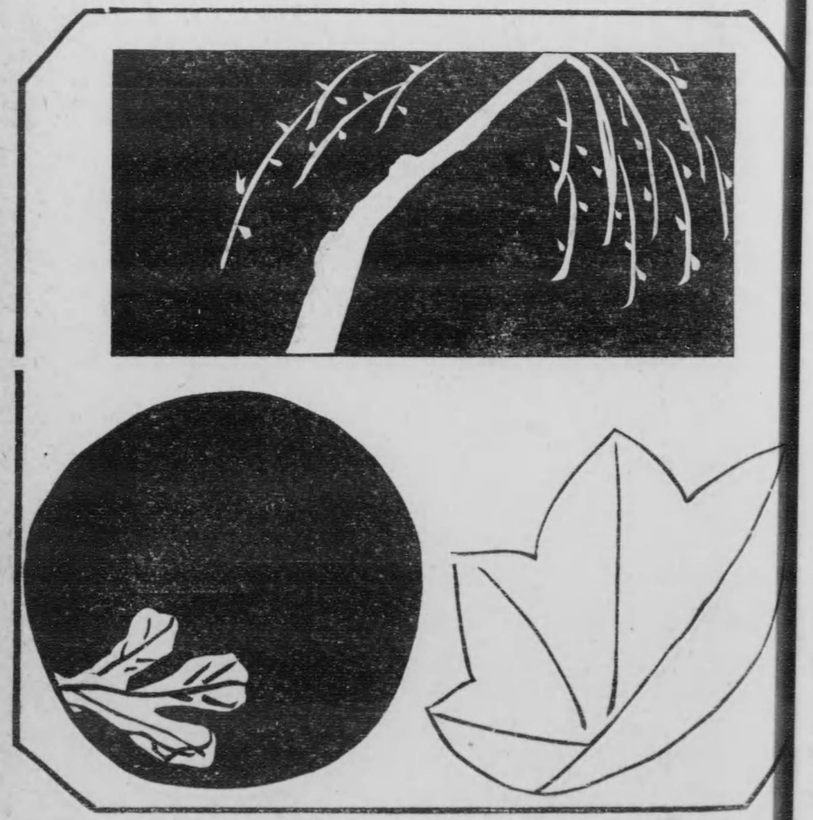
右附

紅煉切を角切形に作角を白にて一寸ボカして菊を白餡にて張りて指にて押したるなり。

左附

黄色の煉切にて丸形に包みてススキの模様はヘラにて筋を付けたる物なり

佛事用



向附

柳を小豆羹にて舟に書きて其の上に白の羊羹を全部流したるなり。

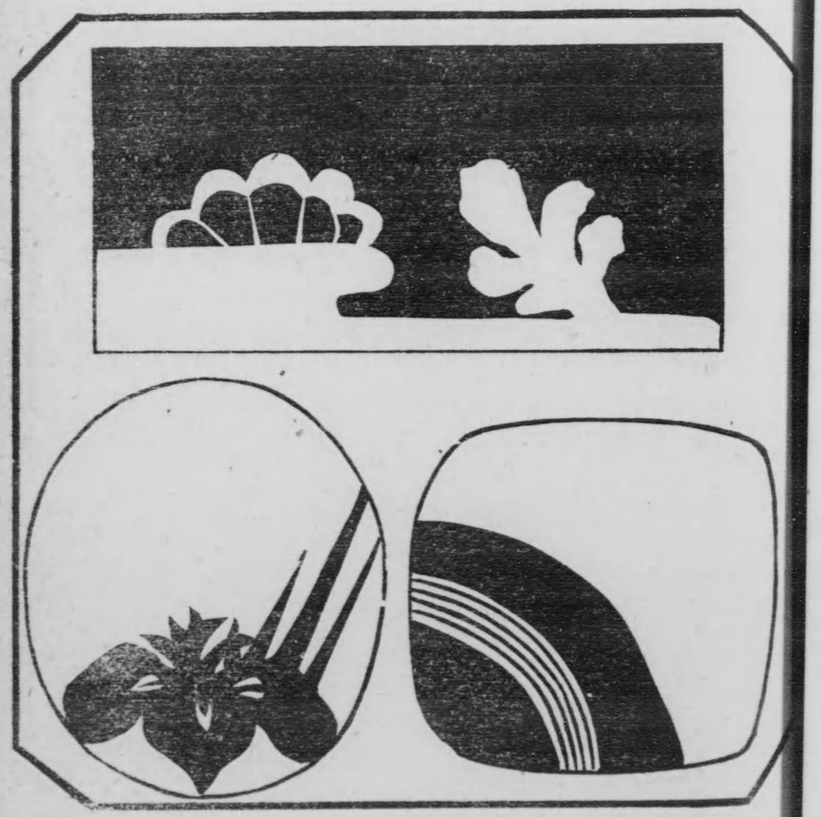
右附

挽茶の煉切にて紅葉の半面の形を手先きにて作るべし。

左附

薄紅の牛皮を丸形に包みて葉は茶羹を薄く切りて鍼力形にて抜きて下部の脇に張り附け光琳の菊形なり。

佛事用



向附

下の白き處を薯蕷にて舟に入れ小豆羹にて菊及び葉を書き後ち玉子色羊羹を流したる物なり。

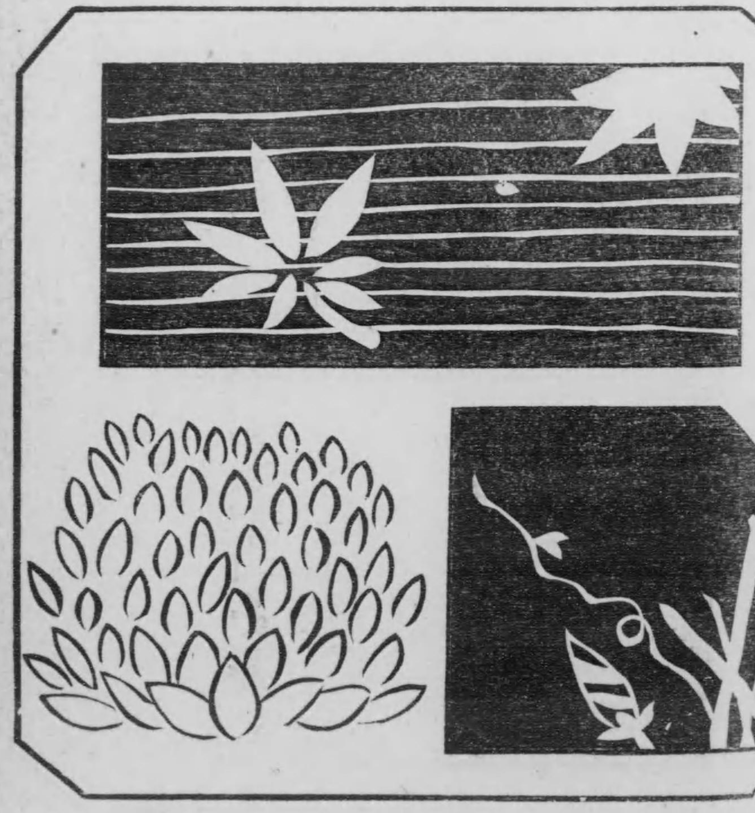
右盛

紅葉の遠見にて地を挽茶色として角の方の下を青にして中を黄にし上を紅にして張り附けて平らに押し附けたるなり。

左盛

薄紅の丸小判の煉切を作りて葉を青にて花を紫にて張り附けてフルヒに押してカキツの花を見せたるなり。

佛事用



向附

金玉を一分程流して紅葉を入れ其の上に白の小田巻糸を突き出して冷えたる時を以て全部金玉を流したるなり。

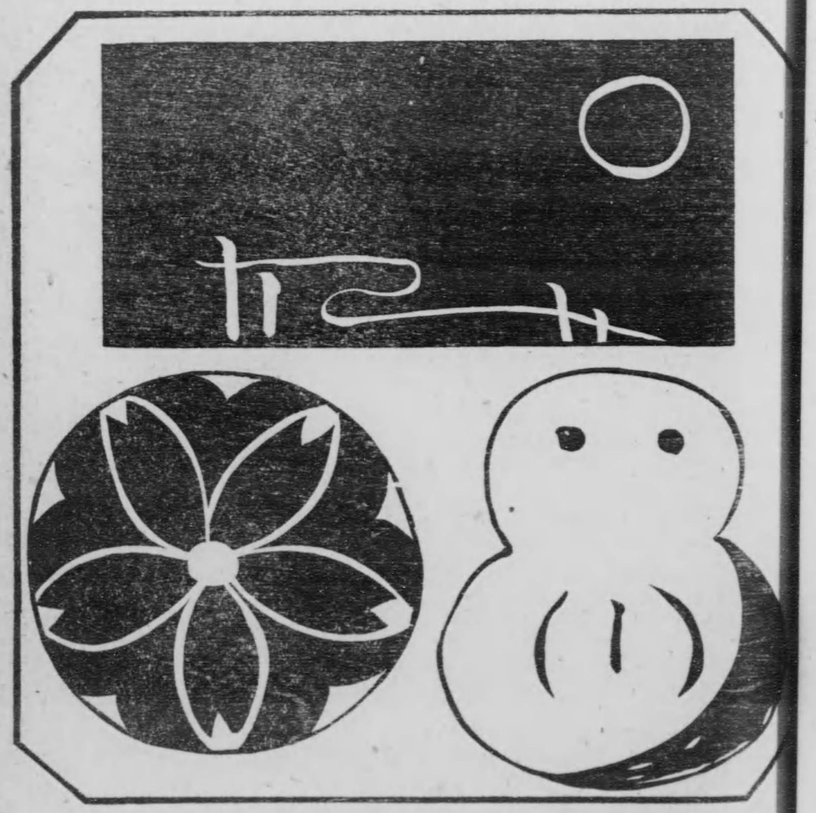
右附

白の煉切にて棚をヘラにて押して朝顔及び葉は白餡にて指先きにて平らに刷り込みたる事。

左附

菊にして黄の中に赤を包みてボカシとしてハサミにて圖の如く下より上にハサミ上げたる物なり。

雪月花



向附

金玉の中に白餡にて月を入れ小豆羹にて水の流れを書きし物にて其の上に金玉を流せしなり。

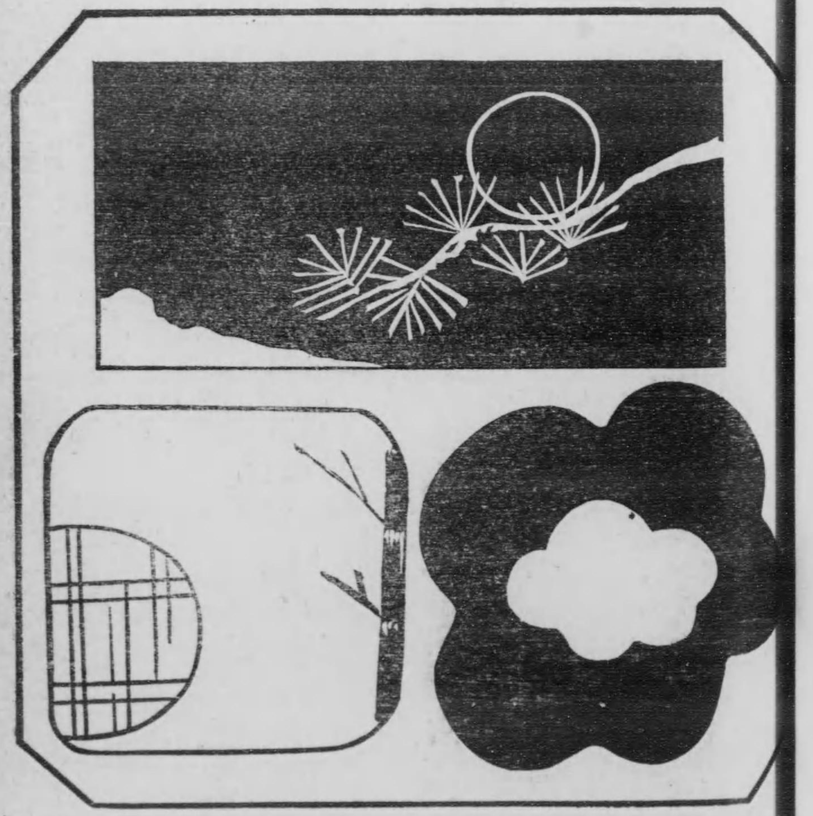
右附

白の雪平にて雪達磨の形を作りて目玉を焼目にて付ける事。

左附

薄赤の煉切にて圖の如くヘラにて丸形に筋を附けて中に黄餡にてシビを付けたる物なり。

松　竹　梅



向附

松を小豆羹にて書きて日之出を紅の煉切にて作りし物を入れて全部挽茶羹を流したるなり下部の白き所は小豆羹にて山を見せたるなり。

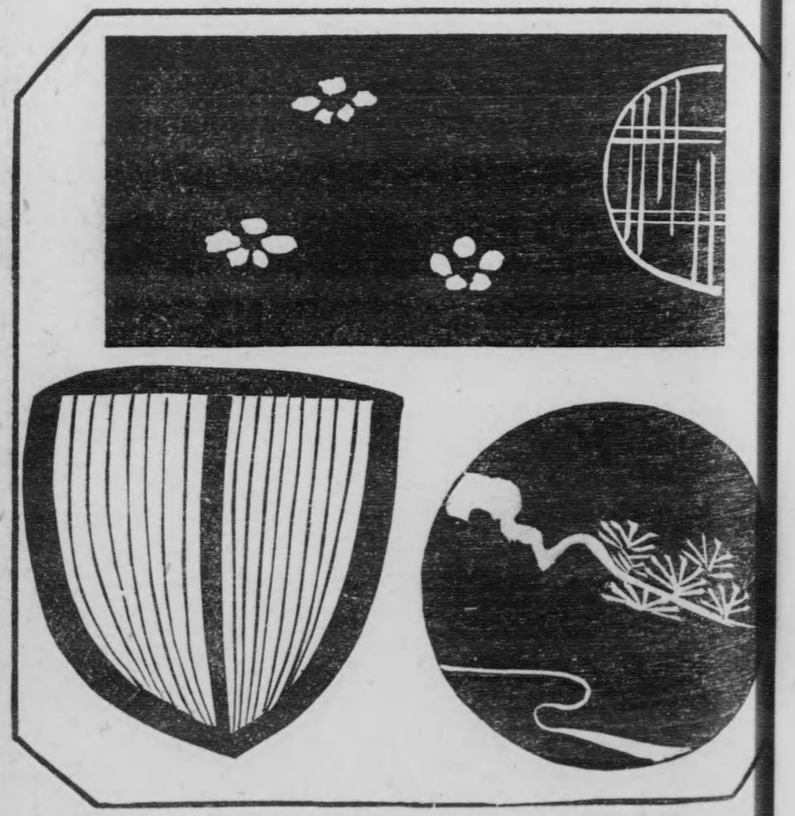
右附

梅の二重にて紅の煉切の梅形の眞中の上部に白の梅花を鍼力形にて拔きし物を張り附けてフルヒに押したるなり。

左附

白の煉切にて竹を以て角の方を圖の如く押して形紙を以てニッケ粉にてマドをボカしたるなり。

松　竹　梅



向附

小豆羹に圓形及び梅の散しは紅の羊羹にて書きて流したるなり。

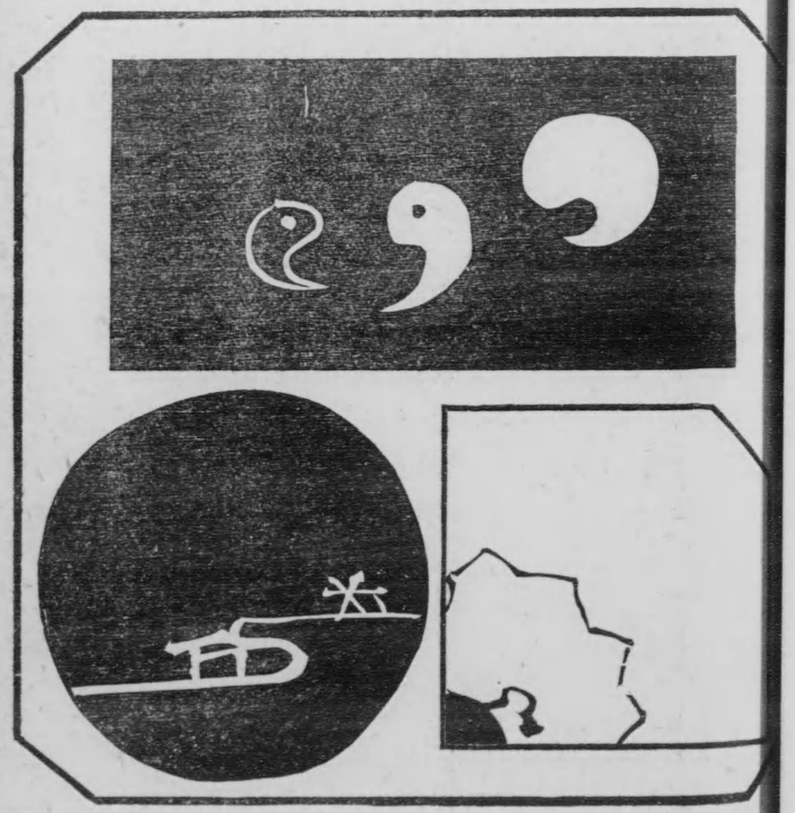
右附

薄紅の煉切を日の出の如く丸形に包みて下に白餡にて水の流の如く張りて指にて平らに押し松を本物の松の棒にて押して松の葉をヘラにて筋を付けたるなり。

左附

青の煉切に白の筋を入れて笹の大なる葉を作り是を小口より薄く切りて中に餡を丸めて巻きたるなり。

神事用



向附

小豆羹の中にマガ玉の形を作りて流し込みたる物なり。

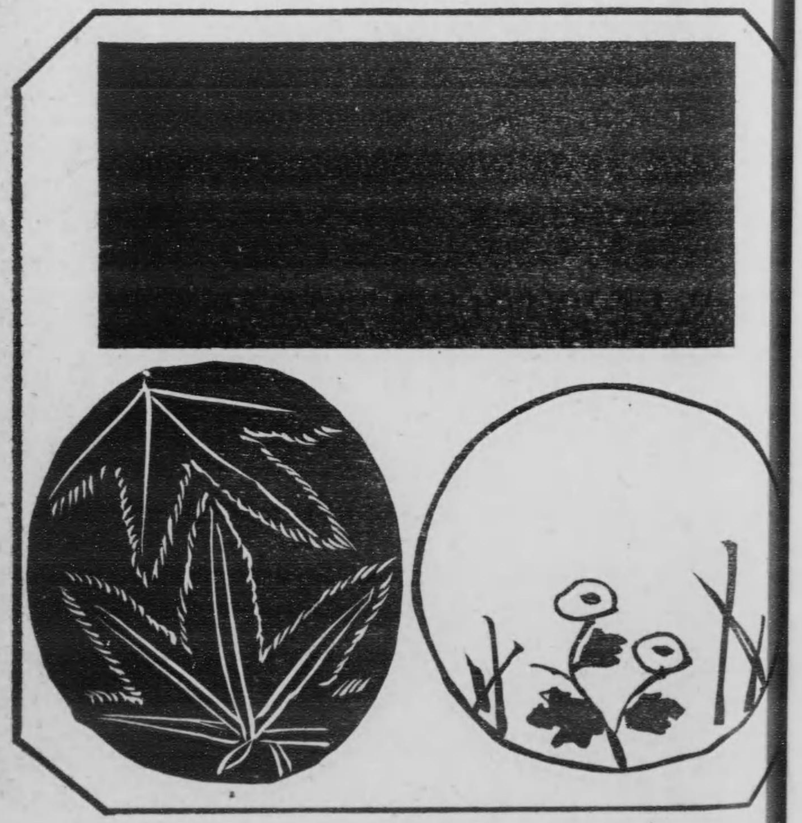
右盛

白の煉切を角切形に作りて角の所に八咫鏡の半面を張り付けてヒモを付け指にて平らに押したるなり。

左盛

紅の煉切を以て丸く作りて神宮の家根又は鳥居をヘラにて筋を附けたる物なり。

佛事用



向附

挽茶羹を無地にて流したるなり。

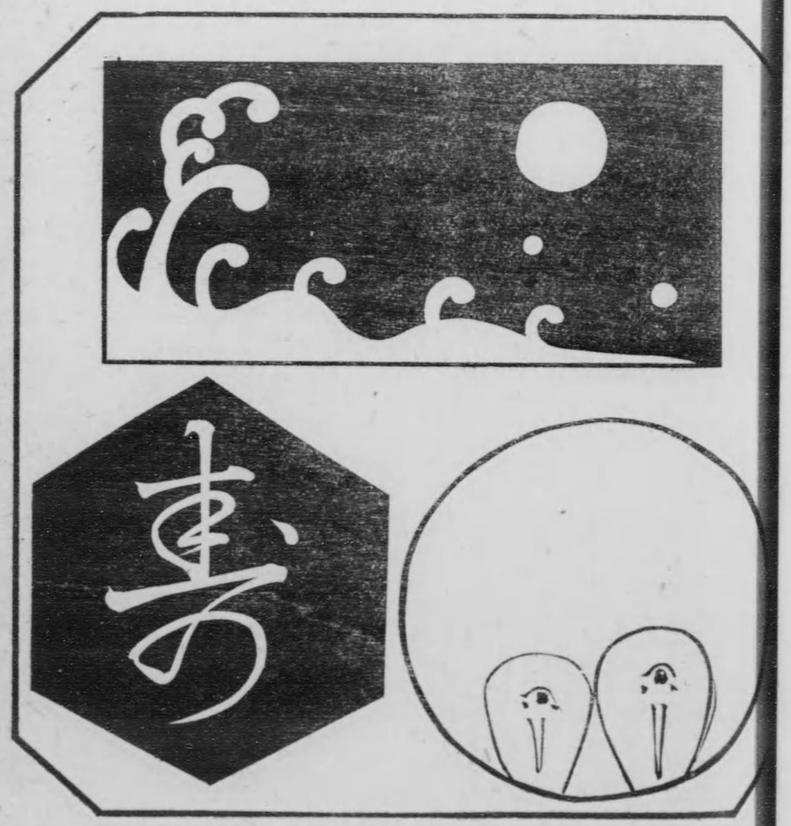
右盛

薄紅の丸形の煉切の上にカキネはヘラにて押して菊は白にて葉は青にて張り附けてフルヒに押し附けたるなり。

左附

白の煉切を丸小判に包みてハサミにて紅葉の如くハサミ上げて上より強き火にて狐色に葉を色附けたるなり。

祝事用



向附

白餡を以て浪を出し紅を以て日の出を出し地を挽茶色にて拔きだしたる岡時雨なり。

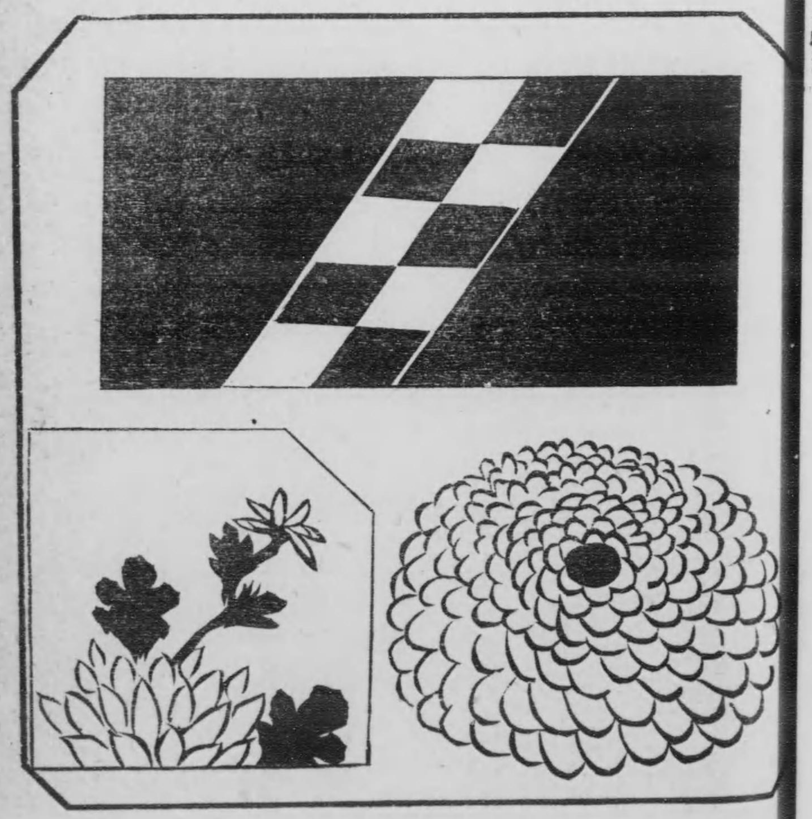
右附

白の丸形の煉切の上に針金を輪にして燒きて燒き目を以て二羽の鶴を見せしなり。

左附

黃色の雪平にて包み龜の甲の形を作りて表面に壽と云ふ文字を紅の羊羹にて書きたる物なり。

菊畑



向附

挽茶羊羹にて眞中白の所は白羊羹をナラべ置きて後ち全部流したるなり。

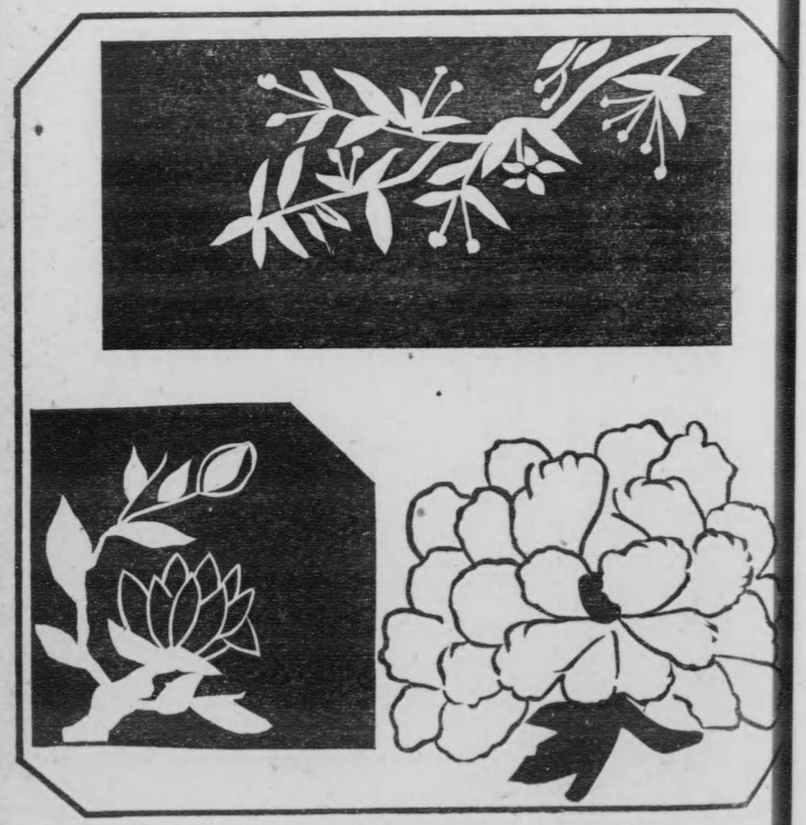
右附

菊にて白と紅のボカシに包みてハサミにて圖の如く下より上に段々に切り上げて後ち黄餡を以てシビを附けたるなり。

左附

黄色の煉切を角切形に作りて模様の菊は棒をケヅリて押して作りたるなり

季節用



向附

櫻枝はパラピン紙の上に形紙を以て小豆羹にて刷り込みて舟にウッス後薄紅羊羹を全部流したるなり。

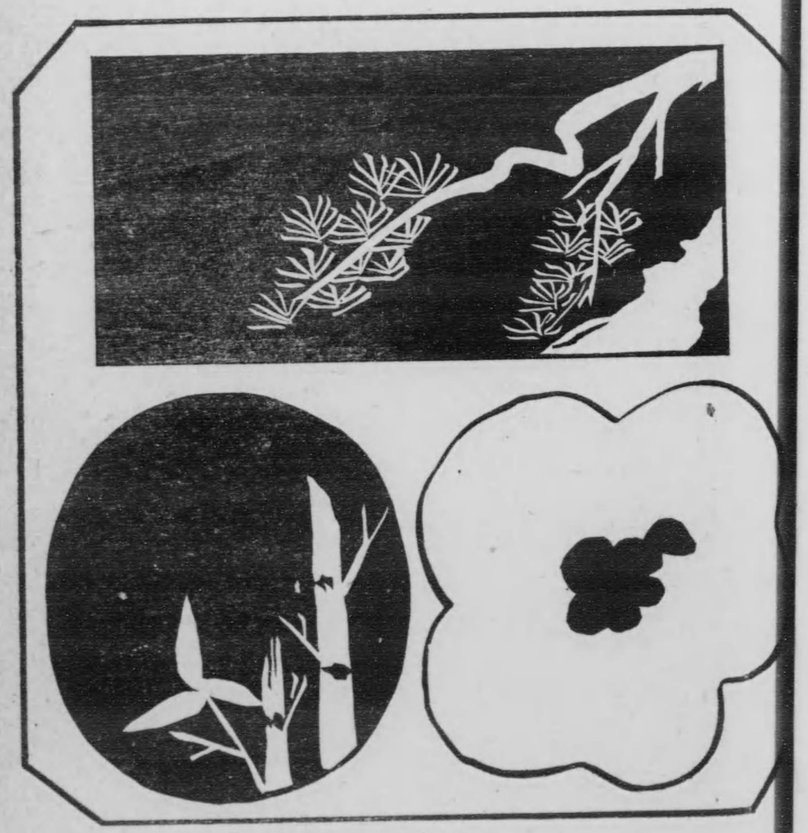
右盛

牡丹にて是は有平を赤白のボカシにして作りたる物なり。

左盛

挽茶の岡時雨にて木蓮は白餡にて拔き出したるなるべし。

松　竹　梅



向附

挽茶羊羹に小豆羹にて松の模樣を書きし物なり。

右附

梅は薄紅の煉切を圖の如く作りてヘタを押棒にて青餡を押し附けたる事。

左附

竹は白の煉切を丸小判に包みて其の上竹の枝附の棒にて水にて浸し水を切りて挽茶を附けて押して葉をヘラにて押し附けるなり。

佛事用

向附

白の羊羹の中に稻の穗を小豆羹にて書きて後ち全部流したる物なり。

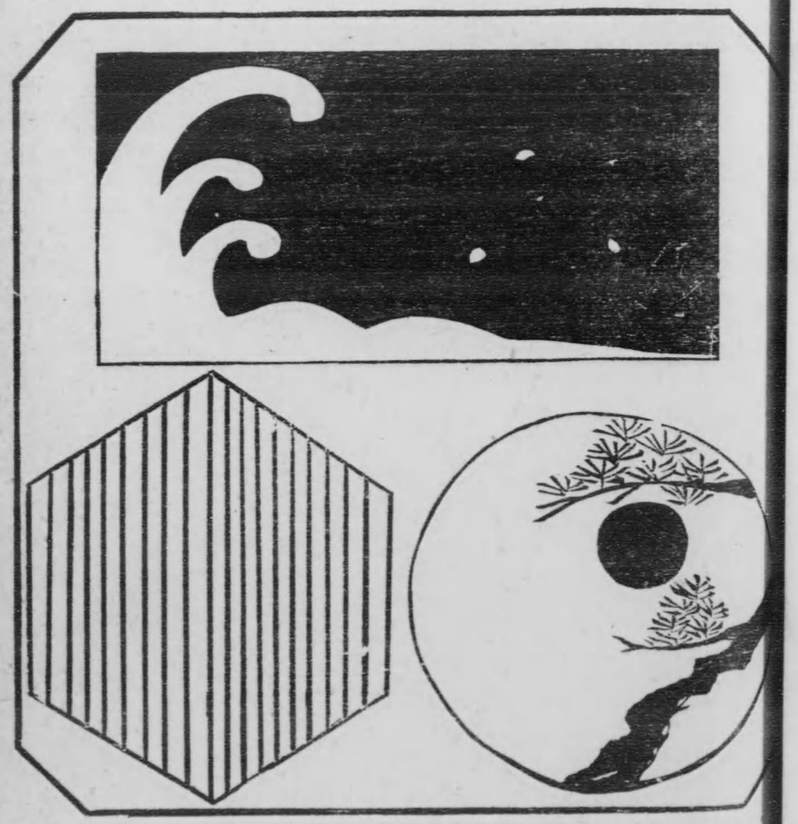
右附

紅葉は黄と紅を混合せし色に染めて形ちを作り其の中に黄及び青のボカシの紅葉を鍼力形にて拔きたるを張り附けてフルヒに押し附けたる事。

左附

白の雪平を角切形に作りて其の上に形紙を利用して枝はニッケ色、バラの花は赤、葉は青にて刷り込みたる事。

祝事用



向附

小豆餡の岡時雨にて浪を白餡にてあらはして仕上げたるなり。

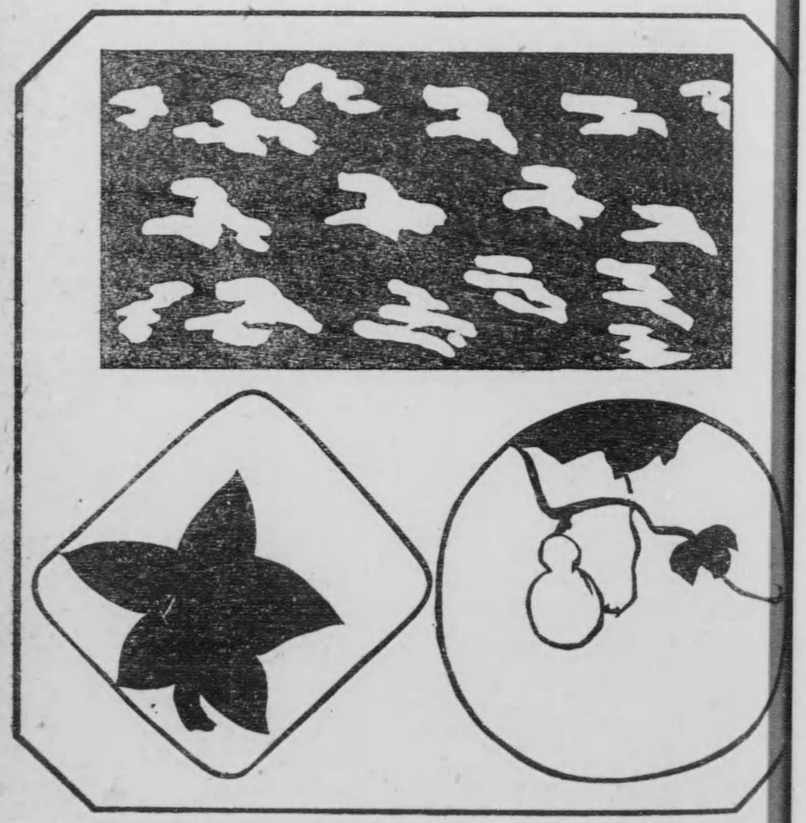
右盛

白の煉切に松を青にて日の出を紅にて木をニッケ色にて染めたる餡を張り付けて指にて平らに押して松の筋はヘラにて付けべし。

左盛

牛皮を包みて龜甲形にて作り紅の小田巻糸を筒にて圖の如く掛けたるなり

佛事用



向附

小豆羹にてマバラの雲を書き其の上に玉子色の薯蕷羹を流したるなり。

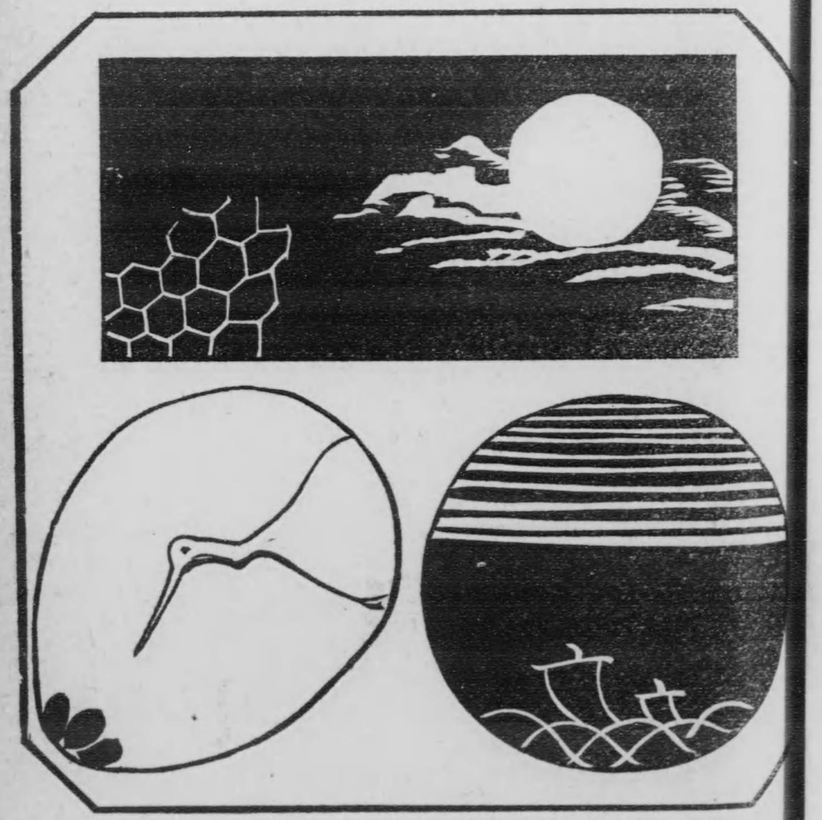
右盛

白の煉切を丸形にして瓢及び模様を青にて張り附けて指先きにて押して半らにしたるなり。

左盛

青の煉切を圖の如き形に作りて紅葉を赤と黄のボカシにて鍼力形にて拔き張り附けフルヒに押し附けたるなり。

祝事用



向附

雲を小豆羹にて書き龜甲及び日の出を煉切にて形抜きとして作りて茶羹一分程流して紅の日之出と白龜甲の網を入れて後ち全部流すなり。

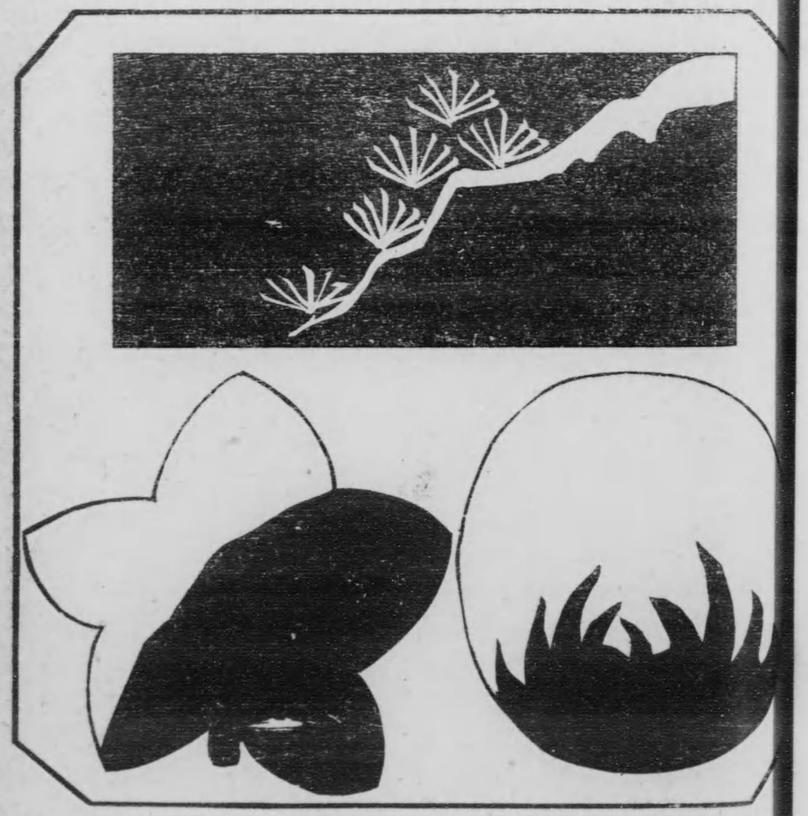
右附

黄色に白をボカせし丸形の煉切を包みて浪及び帆はヘラにて筋を附けるなり。

左附

白の牛皮にて鶴の頭を長く伸ばして上に上げて尾を燒き目にて出したる物なり。

佛事用



向附

小豆羹にて松を書き金玉を流したる物なり。

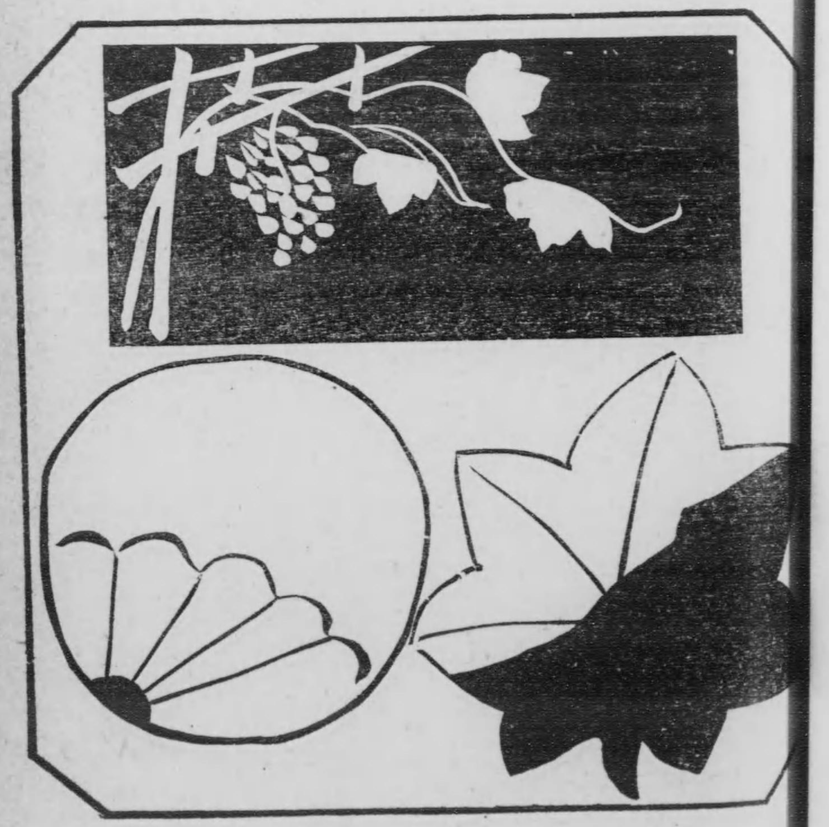
右附

白の煉切を丸小判形に作りて下ノ所に薄紅餡を以て遠見の菊の如く張りてフルヒに押したるなり。

左附

牛皮を包みて紅葉の形を作り後砂糖蜜をハケにて引きて青及び黄の砂糖ソボロを附けたるなり。

佛事用



向附

葡萄棚は小豆羹にて舟に書きて其の上に挽茶羊羹を流したるなり又はバラピン紙に形紙にて刷り込みて其れを舟にうつして流すも善し。

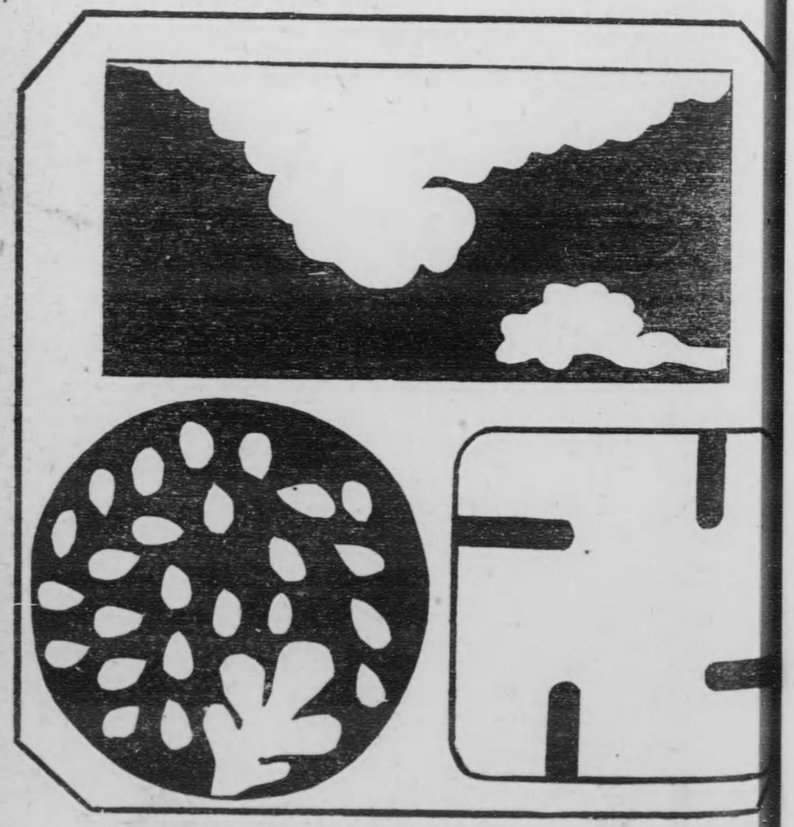
右附

黄と赤の紅葉にて煉切を三角定木にて圖の如き形を作り筋はヘラにて附けべし。

左附

白の雪平を丸形に包みて平輪となして其の上に菊の半面を燒火箸にて燒き目としてアラハシたるなり。

佛事用



向附

佛雲は白にて地は小豆にて木形利用にて押したる岡時雨なり。

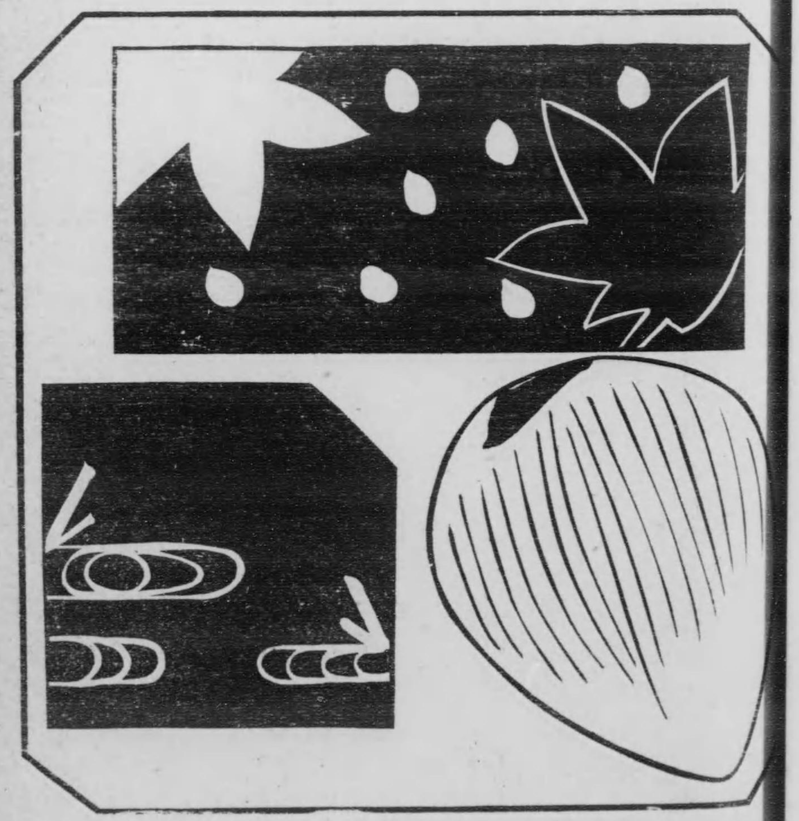
右附

薄黄の煉切を角形に作りて圖の如くヘラにて四方より筋を附けて万字の形を作るなり。

左附

白の煉切の中に牛皮を包みて丸くして全身に大納豆の煮込を附けて菊の葉を青の羊羹を薄く切りしを鉞力形にて拔きて横に付け菊の思ひをなさしめるなり。

佛事用



向附

小倉羹の中に紅葉を白にて鋏力形にて拔きて一分程流したる中に入れて後ち全部流したる物なり。

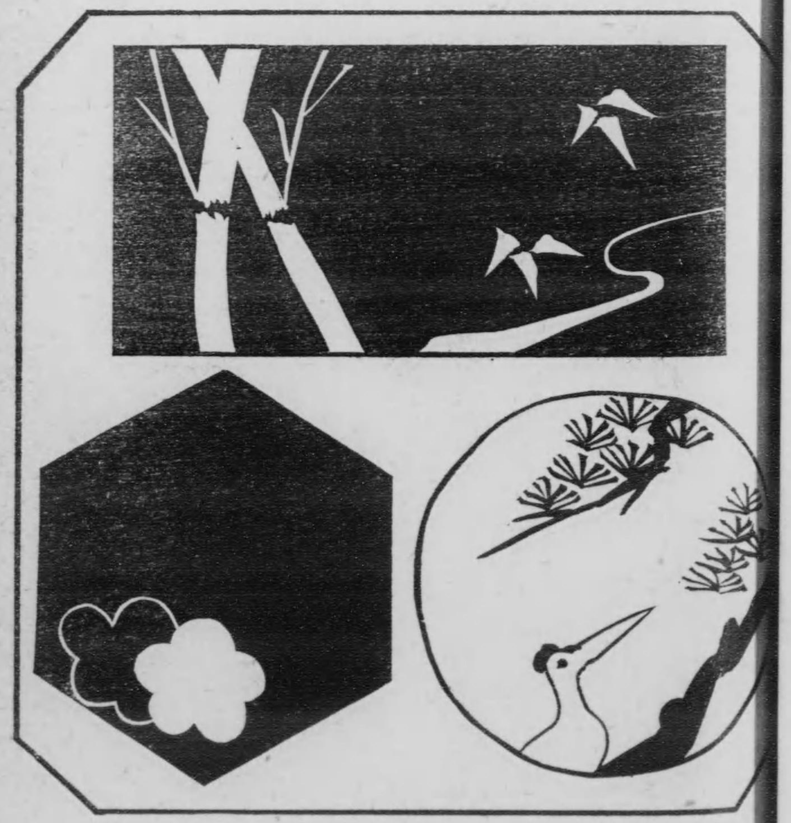
右附

薄紅の煉切にて圖の如く作り筋をヘラにて附けてヘタは青を附け蓮花のツボミを見せたるなり。

左附

白の寒氷の角切形にて水を小豆羹にて書きたる物なり。

祝事用



向附

岡時雨にて流れ及び竹を白にて拔きて地を青にて押したるなり木形利用の事。

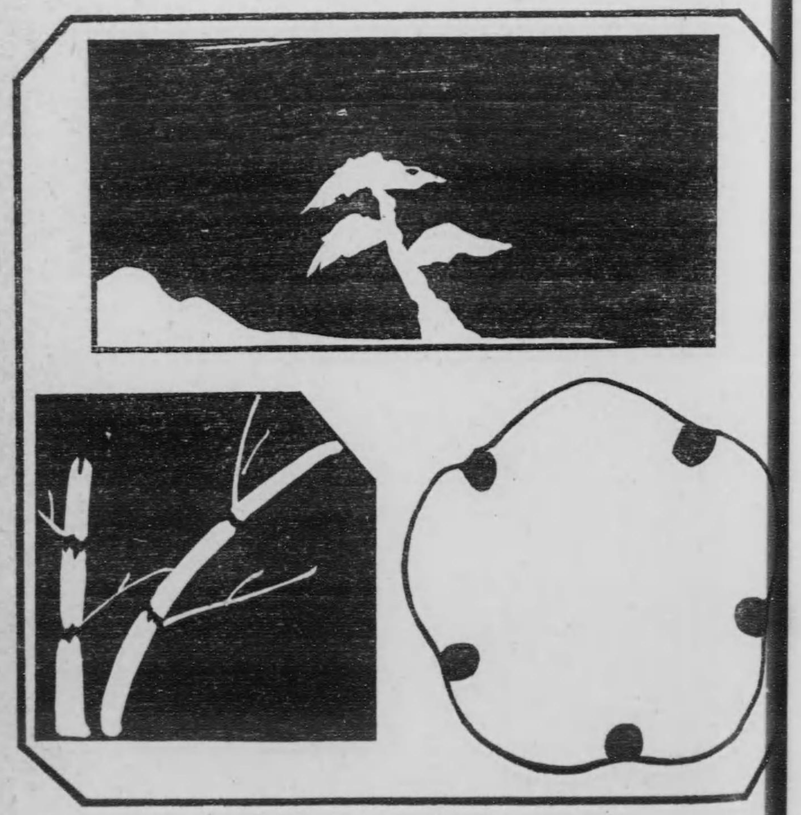
右附

白の煉切にて丸形に作り松の葉は青を張り附けて筋をヘラにて押し木は椿にニッケ粉を附けて押し鶴は指先きにて脇を押して鶴を高く出したるなり。

左附

紅羊羹を龜形に流して梅を白は煉切にて作り黑の方は大納豆を五つ擲へたるなり。

松　竹　梅



向附

岡時雨にて松及び遠山を白にて抜き出し地を挽茶餡にて押したるなり但し模様は木形を利用する事。

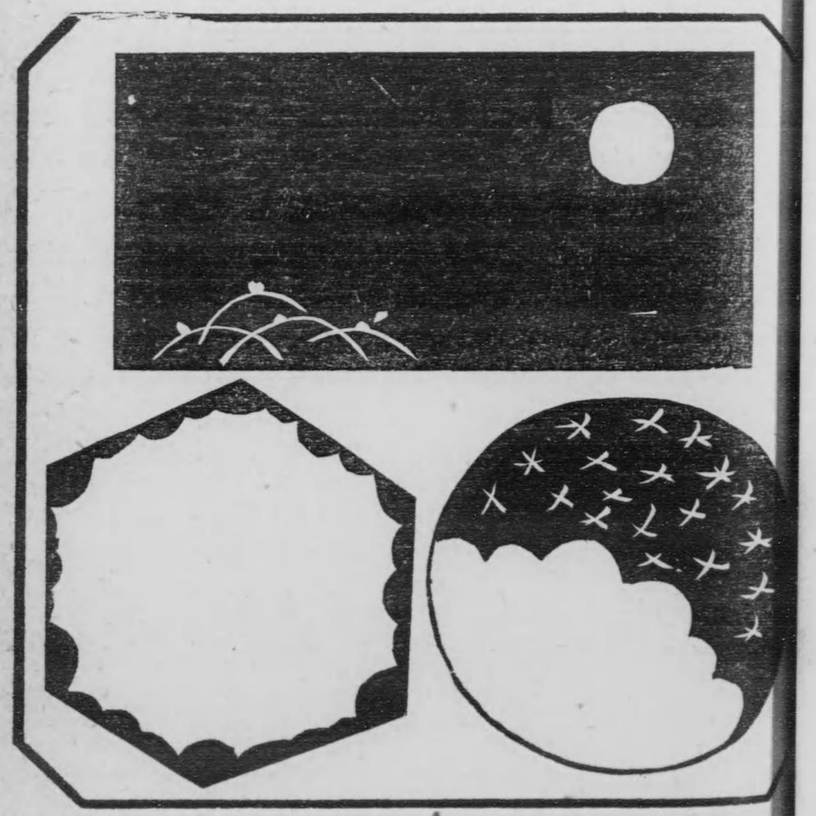
右盛

紅の煉切を梅形に作りて黑き所は大納豆の煮込を附けたる所なり。

左盛

白の煉切を角切形に切りて其の上に竹の棒を二本置きて上よりニッケ粉を降り掛けて後竹を取除けたる物なり。

月雪花



向附

水玉を紅羹にて書きて月を黄色餡にて丸めて入れ小豆羹を流したるなり。

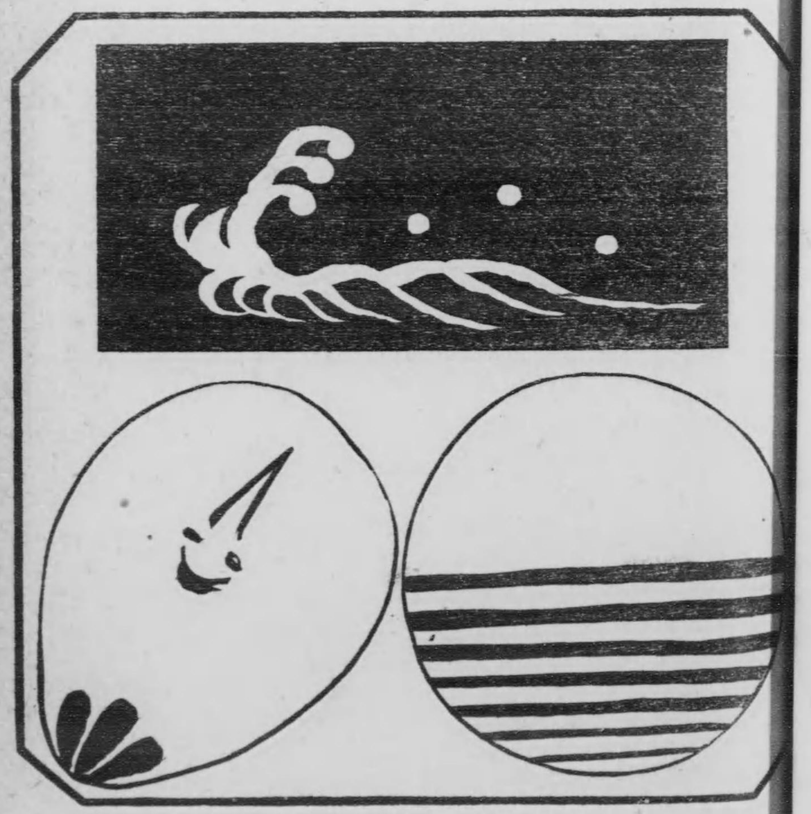
右附

牛皮を丸形に包みて薄茶の金團を箸にて植附けて櫻の花の半開に紅のソポロを植ゑるなり。

左附

白の煉切を龜甲形に作り圖の黒き所に小豆の煮込を附けて六ツの花を作るなり。

祝事用



向附

浪を小豆羹にて書きて挽茶羊羹を流したる物なり。

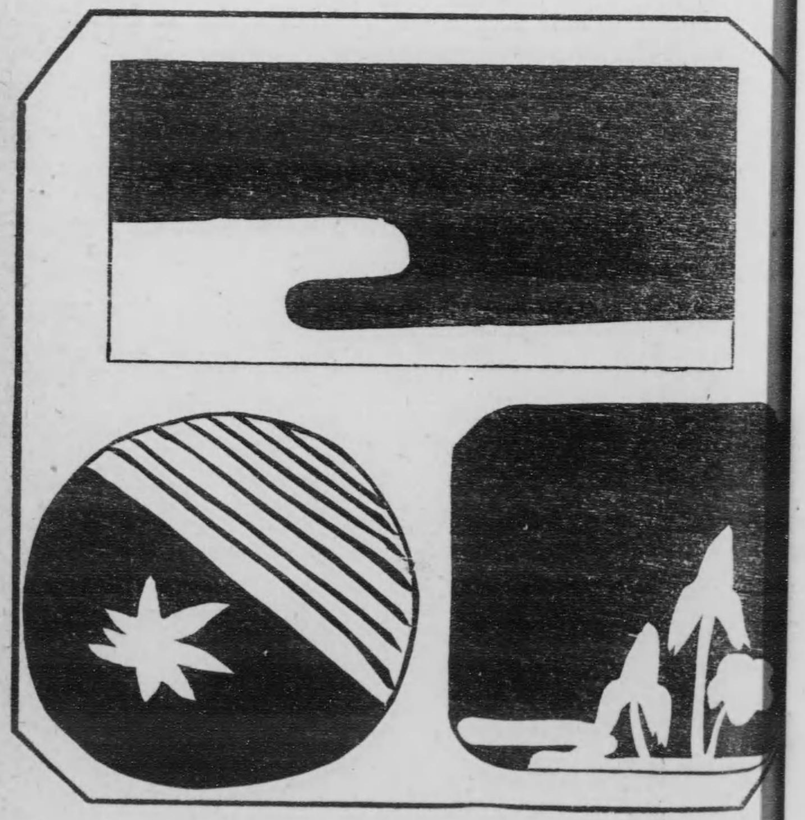
右附

紅の煉切に下を薄黄にボカシて日之出の形を作りたるなり。

左附

白の煉切りにて鶴を作り尾を焼目としたるなり。

佛事用



向附

白の部を薯蕷にて切りて舟に入れて黒の所は小豆羹を流したるなり。

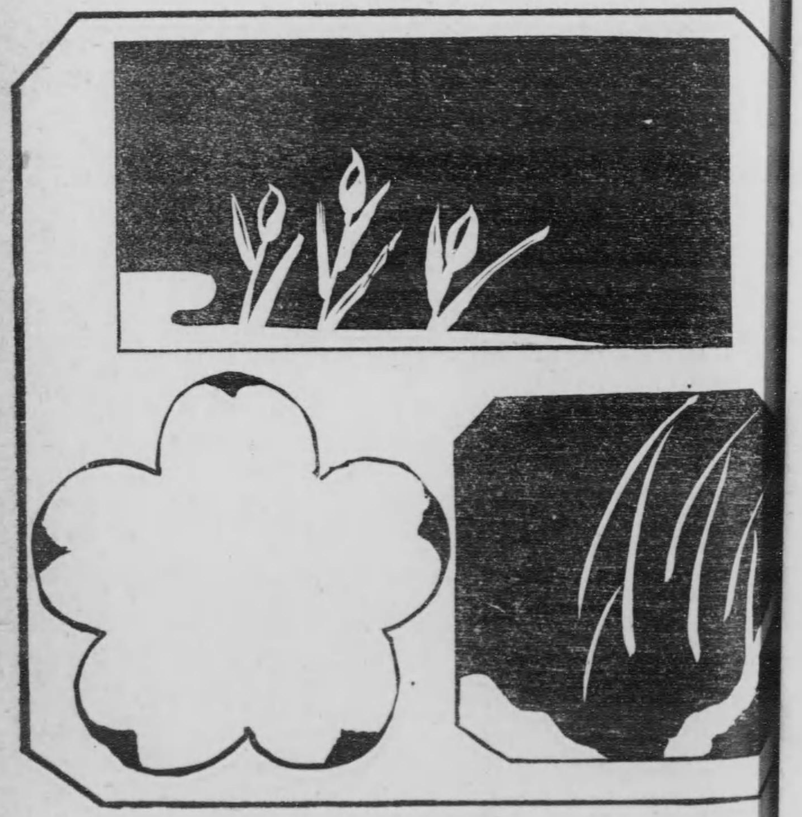
右附

青の岡時雨にてカウボネを白にて抜き出すなり但形紙か木形を利用する事

左附

紅煉切に上を白にてボカシ丸形に作り紅葉を白にて鋏力形にて抜き上に張りて指先きにて刷り込み平らにしたるなり。

季節用



向附

水及びアヤメを小豆羹にて書きて花を白煉切にて作りて入れて黄色の羊羹を流したるなり。

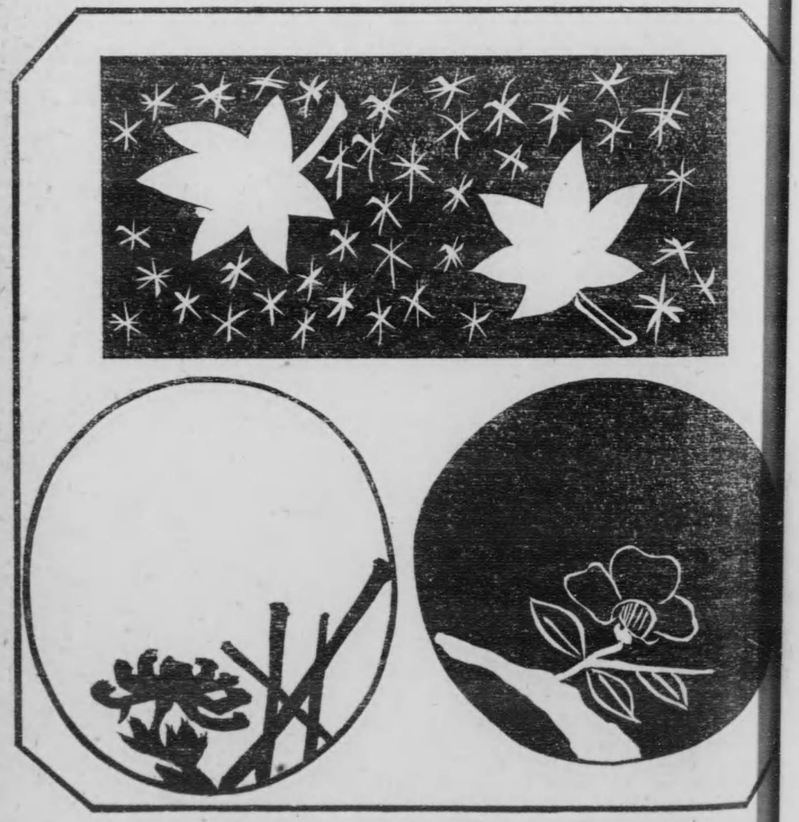
右附

挽茶の煉切を胴形に作りて棒切にて木を押して枝をヘラにて筋を附けて柳木を見せ下に少々小豆餡を附けて土を思はせるなり。

左附

薄紅の牛皮を櫻形に作りたるなり。

佛事用



向附

金玉糖を一分程流して其の中に紅葉を置きて上より青のソボロを投じて冷えたる時を以て全部金玉を流したるなり。

右附

紅の煉切を丸形に作りて椿の花を白にて葉を青にて木をニッケ粉にて染め し物を張り附けて平らに押して後フルヒにて押すべし。

左附

白の雪平の丸小判に包みて垣根焼き火箸にて焼目として菊を砂糖蜜にて書きてニッケ粉を掛けて仕上る事。

夕涼

向附

金玉の中に柳に水を小豆羹にて書きて流したる物なり。

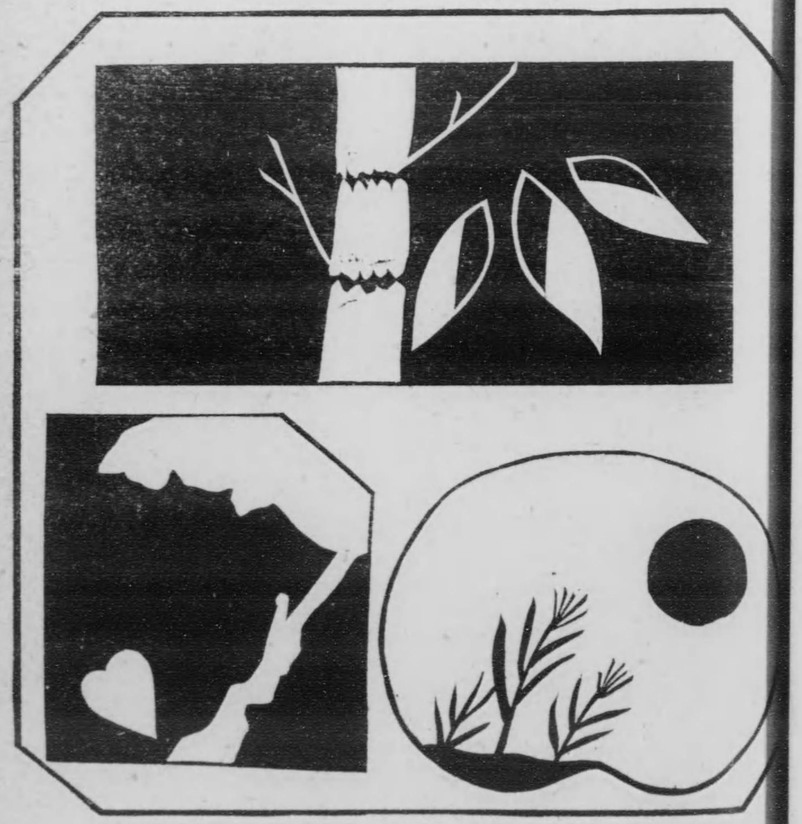
右盛

薄青の煉切に下を白のボカシにして水及び木葉を針金にて押して水鳥を白にて指先きにて押して平らにすべし。

左盛

黄色の煉切にて月を白にて出して橋をヘラにて筋を附けたるなり。

月雪花



向附

竹に雪の降り掛りし所なる故青にて竹を煉切にて作り笹を白と青の張合せにて作り黄味羊羹を一分程流して其の中に入れて冷えたる時を以て全部流したるなり。

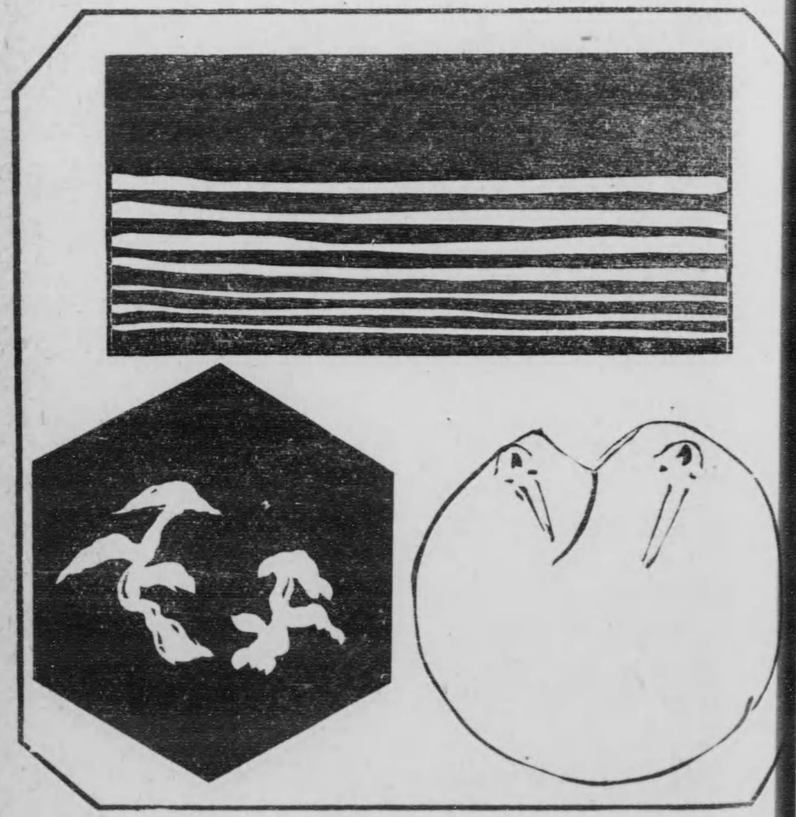
右盛

月は白の煉切を以て團扇形を作りて月を黄にて張りて平らに押してヘラにてススキを筋書きとなすべし。

左盛

薄青瓜の岡時雨にて櫻の花紅餡木は小豆餡にて拔き出したる物なり。

祝事用



向附

白赤降りボカシの衞生羹にて無地なり。

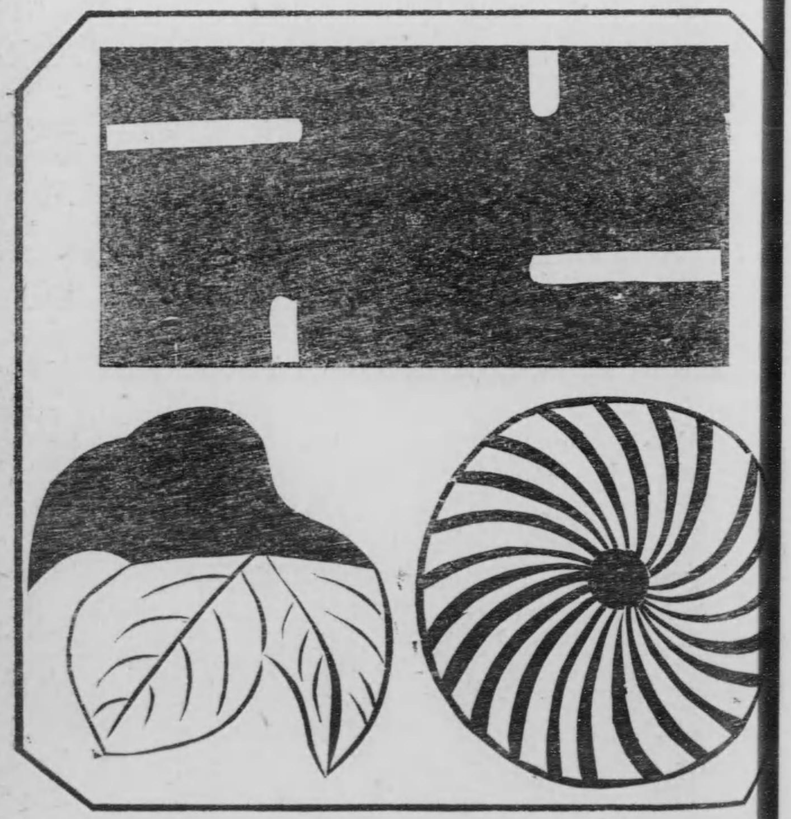
右附

鶴は白の煉切にて圖の如き形を作りて筋はヘラ先にニッケ粉を付けて利用すべし。

左附

龜甲形の黄色の牛皮を作りて火箸にて松の模樣を燒き出したるなり。

佛事用



向附

白羊羹にして四方の筋は小豆煉切にて切りて入れて流せし萬字の形なり。

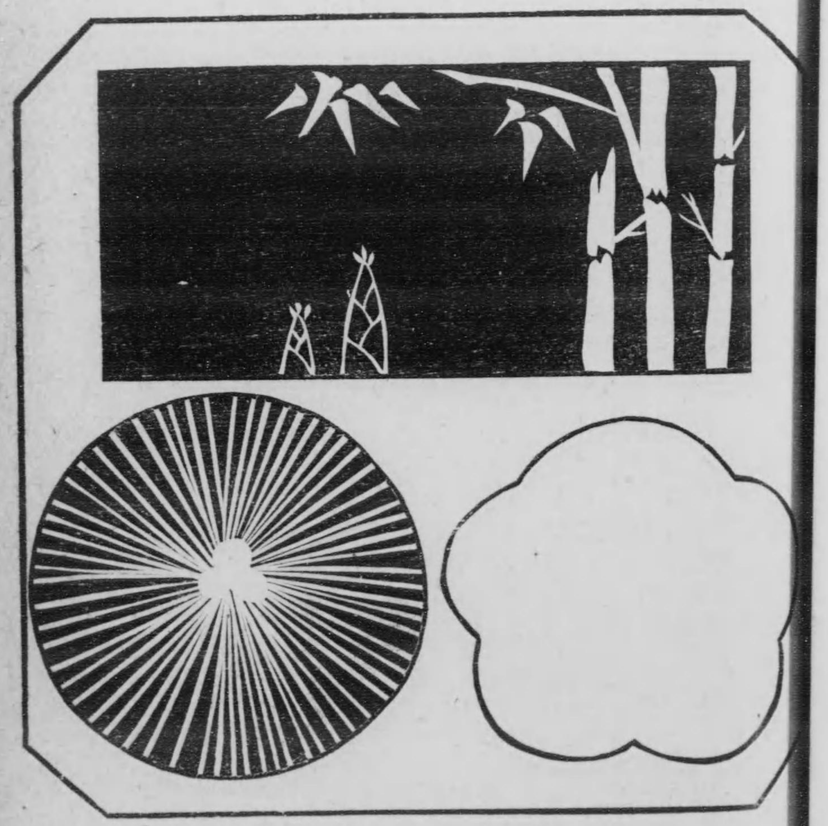
右附

煉切にて白と薄紅のボカシにてヘラにて筋を附けて菊の形を作りしなり。

左附

ツタの葉にして黄青赤の三色ボカシにて形を作りて筋はヘラにて附けるなり。

松　竹　梅



向附

竹は煉切にて作りて竹の子は白羊羹にて書きて地を小豆羹にて流したるなり。

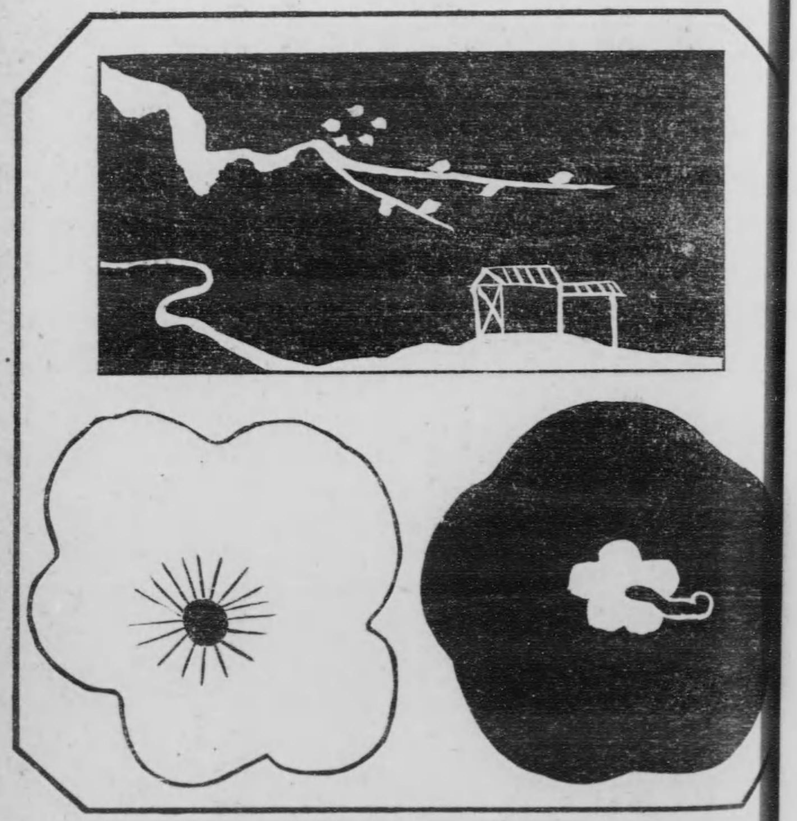
右附

梅は紅の煉切にして手形にて光琳式に作りし物なり。

左附

唐松は白と青のボカシ煉切にて包みて筋をヘラにて附けて眞中に大納豆の煮込を三ツ附けるなり。

梅屋敷



向附

水を白の薯蕷羹にて書き梅花及び家は小豆羹にて書きて挽茶羹を全部流したるなり。

右附

紅煉切にて梅の形を作り押棒にてヘタを青にて押し込みたるなり。

左附

白の牛肥にて梅の形を取りてシビの所に黄色染餡をフルイにて出して箸にて植へ附けたるなり。

季節用

向附

小豆羹にて柳の木及び枝を書きて後挽茶羹を流したる物なり。

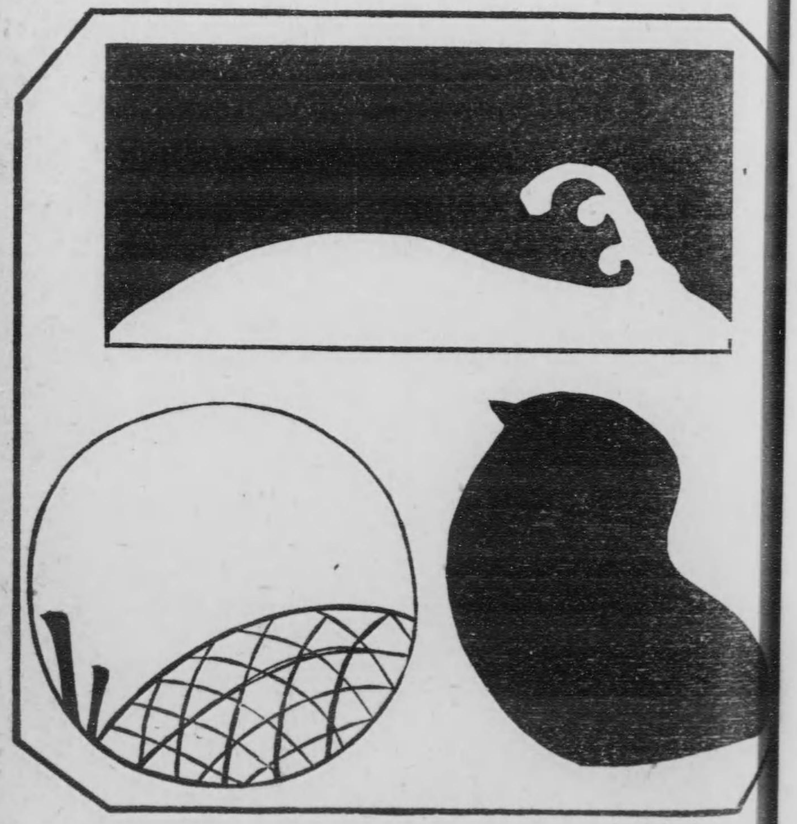
右盛

白と紅のボカシ包みにて煉切を作りギザの附きしヘラにて筋を附けて牡丹の花となる樣葉を下部に附けたるなり。

左盛

紫色に白を頭の處に附けて以上形を作り後ち布に包みて手輕に頭の所を絞りて絞りアヤメの形を見せるなり。

會席用



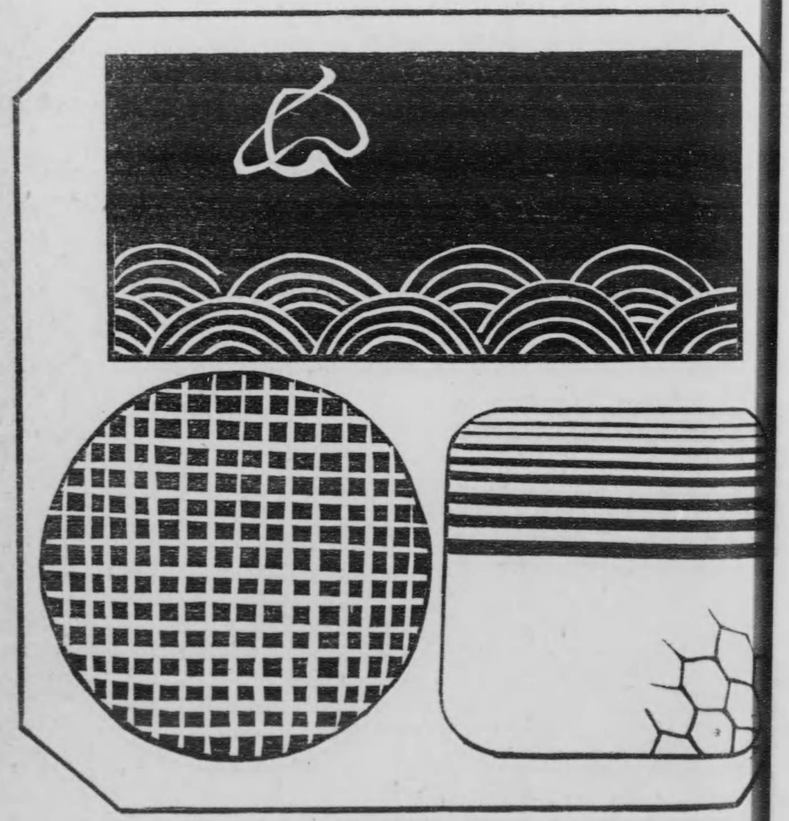
向附

白の浪は薯蕷にて切り抜きて舟の中に入れて八重成羹を流したるなり。

右附

薄紅色の煉切にて水鳥の形を作りしなり。

左附

白の雪平にて丸形に包み蛇籠は火箸にて焼き目を附けたるなり。

祝事用